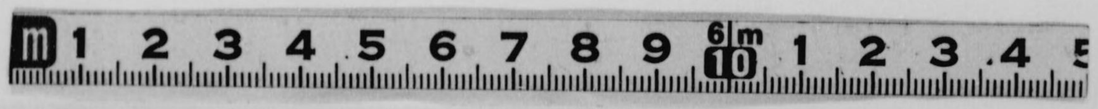
投函



379
12 D

379-12

國

譯禪宗叢書

第壹卷

大正
10 8 9
內交

國譯禪宗叢書第壹卷凡例

一、本叢書第一卷に收むる所の書は、枯崖漫錄(二卷)感山雲臥紀談(二卷)山庵雜錄(二卷)人天寶鑑(二卷)の四部八冊なり。是等の書は古來より禪門に於て七部書と稱するものゝ中に加へられ、參禪者の日常熟讀して、修養の資糧に充てたるものなり。

一、以上の四部は、悉く支那古尊宿の著述にして、山庵雜錄を除くの外は、我南北朝より足利初期に於て、夙に印行せられ、所謂五山版と稱して世に流傳せり。今次國譯に際しては、德川時代に印行せられたる版本に據り、每卷末に附する所の原文も亦之を用ゐたり。

一、本書に收むる所の四部の書は、國譯者各々人を異にするが爲

め、其各本の脚註に、間々重複の點なきを保せず、例せば、僧傳又は居士傳に於て、甲編に詳註ありて、乙編に略註あるが如き、或は全く彼此重複せる等の如き是れなり。是れ等は、其脚註に用ゐたる原本に、專ら依遵したるが爲めなり。

一、本叢書所收の書の脚註に、粗密一ならざるものあり、此は古來より全く事苑の存せざるに依て、勢ひ然らざるを得ざるが爲めなり。

大正八年七月

編者記す

國譯禪宗叢書　第一卷

目次

國譯枯崖和尚漫錄解題……一
國譯枯崖和尚漫錄……一—一〇七
枯崖和尚漫錄原文……一—五七
國譯感山雲臥紀談解題……一
國譯感山雲臥紀談……一—一一一
感山雲臥紀談原文……一—六二

目次

國譯山庵雜錄解題……一――二
國譯山庵雜錄……一――九八
山庵雜錄原文……一――五七
國譯人天寶鑑解題……一
國譯人天寶鑑……一――一二三
人天寶鑑原文……一――五九

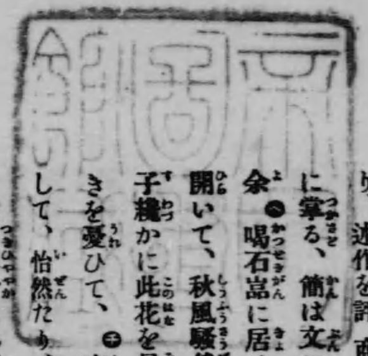
國譯枯崖和尚漫錄

解題

禪門に古來より七部の書、又は十部の書と稱し、雲衲が參禪の餘暇、時に之を繙きて進道の警策に資するものあり、羅湖野錄、叢林盛事、枯崖漫錄、雲臥紀談、山庵雜錄、林間錄、人天寶鑑是れなり。又時に臨濟錄、大慧武庫、正宗讚の三を加へて十部の書とも稱せり。本書は卽ち其の中の一なり。著者枯崖和尚、名は圓悟、福州福清の人、偃谿禪師の法嗣なり。宋の理宗皇帝景定年間、興福寺に住して道學併び高く、名を四方に馳せたり。居常破窓の下に坐して淸苦憤發倦むことを知らず、古を集め遺を搜扶して古尊宿の格言妙行を記し、積んで三卷となし、學者進修の指針となしたるもの卽ち此の書なり。たゞ各種の僧傳に師の傳を載せず、從つて其の行業の詳かならざるを憾む。

國譯枯崖和尚漫錄序

㋑石谿偃谿人物を愛し、風教を崇ぶこと、㋺端嘉の諸老に賢れり。暮年㋩靈徑にて、余と尤も親密なり、述作を評商するに、一語諱むことなし。嘗て㋥枯崖仲簡の二老に道ふ、厥の後、俱に記を徑山に掌る、簡は文に富むも、惜しいかな早世せり。而して枯崖は清苦憤發して、㋭正宗聞くことあり。



余㋬喝石嵓に居せし時、㋻夾路の玉簪花一たび開いて、秋風駭然たり。或人笑つて曰く、禪和子纔かに此花を見れば、則ち寒を禦ぐに計なきを愛ひて、㋾東馳西騖す、獨り枯崖破窓に坐して、怡然たり、毎に被を携へて、嵓上に同宿す、月涼なれば閣に登り、雪霽るれば山を看て、相與に㋿胸中耿々たり。余錦谿の報慈を出でゝ、延平の含清に歸り、數年稍〻睽る。間ろ聞く、枯崖古を集めて錄を成すと、偃谿其取る所の機緣皆㋼控人の入處あるを喜し、㋽後村は何れ

㋑石谿の心月禪師、偃谿の廣聞禪師。

㋺端平嘉熙は南宋理宗の年號、本朝の文暦嘉禎に當る、今より六百八十年程前なり。

㋩靈隱、徑山何れも臨安府にあり、支那五山の内なり、石谿偃谿此に住す。諱は遠慮なり。

㋥枯崖、仲簡兩人を石谿、偃谿の二老に取り持ちしを云ふなり。

㋭佛祖の正宗を了悟せしなり。

㋬喝石岩は徑山にあり、嘉祟一喝して碎けて三片となりしものなり。

㋻道の兩側の玉簪花が開くなり。

㋾あちこち化緣にまはる、驚も亦龍なり。

㋿耿耿はあきらかなり、目の「さゆる」を耿々として寢られずと云へり。

㋼控人の入處は當時處處に見ゆ、蓋し常用語にて「悟りの手引き」と云ふが如きなり。

㋽劉克莊字潛夫、後村と號す、詩文超邁、文集五十卷あり。

㋾林希逸竹谿と號す。老莊列口義あり、世或は俗書と罵れども矮人の觀場に過ぎざるな

の時か茗を煑て重論を得んと謂ひ、ヲ竹谿は他時共に僧寶傳に入らんと謂ふ。枯崖南に歸つて、錄を携へて相訪ふ、適〻余光孝に遷らんとし、率爾に過目して別る。今枯崖泉南の興福にワ瑞世す、而して起藏主爲めに梓に刊せんとして、叙を欲す。夫れカ參方の正眼、爲人の峻機、逸致高標にして、貪を激し儒を立つるは、備さに此に見ゆ。因つて思ふ、石谿太白に閑居せしとき、仲宣の孚、非庵の光、艮嵓の沂、勝叟の定、諸人の舊作を刻せんと思ふ。ヨ黃を捧げて住山するに及び、タ酬應不韻にして亦果さず。枯崖當に其遺を捜抉して繼ぎ繼いで彙集し、レ五燈の後、復た一燈の光明天下を燭すを見せしめば、豈漫錄と云はんや。枯崖名は悟、福の福清の人。ソ咸淳八年仲春、ツ北山の紹隆、鼓山の老禪庵に書す。

り、本朝の學者は益を受けざるはなし。
ワ瑞世は寺に住持せしなり。
カ參方は四方に參ずるの意なり、爲人は學者を接するなり。
ヨ當時住持の任命は黃紙に書す蟲蝕を避くるなり。
タ應酬不韻は應接暇あらざるなり。
レ五燈は、傳燈錄、廣燈錄、續燈錄、聯燈錄、普燈錄なり。又之を略稱して傳廣續聯普と云ふ。
ソ度宗の年號、南宋の末年なり。
ツ北山の紹隆は癡絕冲に嗣ぐ、冲は曹源生に嗣ぐ、生は密庵咸傑に嗣ぐ。

序

昔し偃谿佛智禪師、イ靈隱に住し、予臨安に客たり、相與に往來す、ロ神交道契、一日に非ざるなり。枯崖の名を知ること久し、未だ嘗てハ眉毛厮結ばざるなり。偶〻泉に寓す、因つて興福寺に過ぎて一見す。元と是れニ屋裡の人、恬淡寡言、眞に偃谿の印子をホ脫し來る。頃聞く、枯崖癸亥の歲、徑山の蒙堂に歸して、平昔聞見する處、宗宿入道の機緣、示衆の法語及び殘篇短碣、名字の未だヘ燈に上らざるものを裒集し、隨つて筆する所、名けて漫錄と曰ふと。其志在る有り、偃谿に呈示す、叱してト無事閣裡に擲下せらる。是歲チ夏五、忽ち謂つて曰く、「將に謂へり、述ぶるところの者、紀談雜錄

イ靈隱は臨安府にあり。
ロ交り契ることにて、神と道と相添へたるものなり、交際するなり。
ハ彼の眉毛と自分の眉毛と結び付くることは無かつたと云ふ「言ひまはし」にて面會はせざりしと云ふなり。
ニ屋裡の人は本分の家山に坐在する人なり。
ホ脫は脫出し來るなり、闊遠谿の印子の中から脫出し來ると。癸亥は景定三年。
ヘ既に傳燈に載せたるものは取らざるなり、裒集はよせあつむるなり。
ト又無事甲裡に作る、家の内にて用無き處を無事閣と云ふ、邪魔にならぬ處へ放つて置けと叱られしなり。
チ其れから七八年たつた今歲の夏に偃谿禪師が能く見るとまんざら捨てたもので無いと言はれしなり。
リ談柄は話の種なり。
ヌ採るべき處には鐵點を掛けられた、其餘は切り捨てられた、余漫錄の評語を讀むに悟公の見地頗る隔靴の怨あるを覺ゆ、而も江湖數百年の愛讀を贏ち得たるは全く偃谿取捨の當を得たるに據るのみ。
ル御手本に據つて瓢箪を書きしにあらず、北宋陶穀の故事なり。
ヲ箱の内に秘藏せられし美玉を發見せしものにて似せものと違ふ。蘊櫝は論語に出づ、櫝は箱なり蘊はをさむるなり。鼠の死骸を朴と云ひ玉の璞か

に効ふて　⑪談柄に資するのみと。今之を閲すれば、則ち是れに異なり、收むる處の機語、皆控人の入處あり」と。已に筆を用ひて　㉓點下し、餘は則ち刻卻す。且つ囑すらく、宜しく之を珍藏すべしと、予是の錄を見んと欲すと雖も、而も未だ叩くに暇あらず。忽ち起座元の元藁を携へて我に過ぐるを得、爲めに梓に鋟せんと欲し、信庵が一轉語を請ふ。予詳復すること數四、枯崖は、之を聞く處見る處に得ると雖も、然も編集して傳を成すや、或は讚し、或は拈し、或は着語し、或は實を記し、一々胸襟より流出す、豈是れ　㉔依本の胡蘆ならんや。則ち知る、枯崖和尚集むる所の者は、㉕皆蘊積の美玉を發して鼠璞にあらず、佛智禪師點する所のものは、皆走盤の　㉖遺珠を選んで魚目にあらざるを。予更に贅語せば、恐らくは反つて玉の瑕を生じて、珠の　㉗顎を爲さん。起兄之を請ふことを力む。已むを獲ずして再び　㉘一足を垂れ、彼の畫蛇を助く。噫、漫錄の一出、何ぞ揚雄が玄を草して、譏りを人に取るに異ならんや。然りと雖も　㉙後世必ず、子雲なるものあつて出でん。

㉚咸淳壬申夏、清漳の信庵陳叔震序す。

ざるを璞と云ふ、朴と璞とは同音にて璞が直段高きと聽き態し玉屋へ鼠の死骸を賣りに來たものがある、戰國策に出づ。

㉖揚雄大玄を著して曰く、後世子雲再び出でば必ず我書を取らんと云へり、子雲は揚雄の字なり。

㉗顎もきずなり。

㉘昔し問禪の僧の入るを見て曲彔の上から片足だらりと垂れし和尚あり、畫蛇は蛇の足を畫くなり、むだ事をしたと云ふ意。

㉙咸淳壬申は第八年なり、日本の文永九年にして蒙古入寇の翌年に當る。

國譯枯崖和尚漫錄卷の上

①圓通の宗照庵主、因みに木庵初めて泉南に到り。是の庵に館す。一日威儀を具して問うて曰く、「某甲愚鈍なり、乞ふ師箇の見所を指せ。」木庵面前の香爐を指して、曰く、「見るや。」照曰く、「見る。」庵曰く、「見處如何ん。」照曰く、「某甲不會。」庵曰く、「又見ると道ふや。」照懐悟、流汗背を浹す。此れより、門を杜ぢて四もに出でず、㊁一衲百結、韻致高古、能く之を親疎するものなし。

㊂慈慧の祖派禪師は、溫陵張氏の子、開元の羅漢寺に祝髮し、文關西の嗣、宗岱餘に參ず。宗「僧雲門に問ふ、如何なるか　㊃是れ正法眼。答へて曰く、普。又僧問ふ、如何なるか是れ正法眼。答へて曰く、瞎。」と云ふを擧して、子作麼生か會すと云ふ。派措くことなし。此れより、焦慮飢寢を忘る。一夜坐して子の刻に至り、山禽の叫一聲するを聞いて、省悟す。黎明に宗の印證を求む。纔かに門に入つて、便ち喚んで曰く、「和尚」と。宗曰く、「汝來ること作麼ん。」派曰く、「東家の杓柄は長く　西家の杓柄は短し。」宗曰く、「子夜來㊄發顛するか。」派曰く、「是れ和尚

①圓悟・大惠・懶庵・木庵・宗照・庵主。

㊁又鶉衣百結の語あり「ツギツギ」の布衲なり、韻致高古は人品氣高く古人の風あるなり。

㊂黃龍・眞淨文・宗岱餘・祖派禪師。

㊃尊瞎は公案なり。

㊄發顛は狂氣なり。

の顚か、是れ某甲が顚か。」宗禪床を下つて、擒住して曰く、「什麼の道理をか見し。」派曰く、「伏して惟んみるに、和尚尊候萬福」と。宗托開して曰く、「我れに前日の話頭を還し來れ。」派、女人拜を作す、復た頌を呈して曰く、「正法眼を問ふ。答へて曰く普、瞎。萬里の清風一溪の明月」と。今㊀香泥の像、里の四松に留む、緇素の爲めに欽仰せらる。

黃莊定公祖舜、曉に尤も淡薄、心を禪宗に留む、因みに㊁傳燈を見て悟入す。偈を述べて曰く、「六載心を留めて釋書を讀む。幾回か紙上に模糊せらる。今朝放下して都て無事。㊂只だ是れ從前の箇の老夫」と。仕へて執政に至り、紹興の名臣となる。且つ能く此道に證徹す、未だ㊃裴李の、美を前に專にするを許さゞりき。

㊄浙翁佛心禪師、初め雙徑に到り、大慧の嗣仁公に見え、扣くに、當時㊅千七百衆、咨決の要を以てす。狗子無佛性の話を得て、默して領し去る。台の報恩を過ぎ、決を佛照に求む、夜參に、世尊鞭影の話を擧して、「鞭影を見て行くは、良馬に非ざるなり」と曰ふを聞いて、言下に省悟す。旦日に入室のとき、「不思善、不思惡、正恁麼の時、如何なるか是れ瑛上座本來の面目」と問ふ。曰く、「佛手も遮ることを得ず」と。復た證長老に番陽に隨

㊀死骸に香泥を塗りて祭るなり。
㊁傳燈は禪宗の僧傳の名。
㊂前度の劉郎今又來るの意なり。
㊃裴休は黃檗に參じ李翺は藥山に參す、皆發明する處あり。
㊄浙翁は佛照に嗣ぎ、佛照は大慧に嗣ぎ、大慧は圓悟に嗣ぐ、浙翁諱は如璉。
㊅千七百衆は傳燈錄に載せたる人の數なり。
㊆話墮は公案なり、宇義は話に落ちしなり。
㊇凌霄は徑山にあり、雙覺佛日禪師は大慧宗杲なり。

侍す。旁僧の雲門の㊆話墮の話を商量して、「那裡か是れ這の僧話墮の處」と云ふを聞いて、豁然として、佛性從前の機用を洞見す。佛照每に人に話げて曰く、「我れ拂柄を握りしより以來、的に吾が機に契ふものは、惟だ瑛あるのみ」と。後に佛照佛心、武を接して㊇凌霄に住す、法席の俱に盛なること、佛日の猶ほ在せし時の如きなり。佛心の塔は㊈澗東に在り、詳かに誌銘に見ゆ。

興化軍の㊉瑞香烈庵主は、本郡の人、幻住叟と號す。妙年より奇逸にして、叢林に飽く、久しく等庵に參じ、後に東庵を得て、心要を發明す。鄉に歸りて、虎丘巖に居ること十年に餘る。山居の小詠あり、其一に曰く、「客來つて秘密を詢ふ。幽鳥語聲喧し。此の意分明なること甚し。何ぞ我が再言を消せんや、」と。嘉定の間、郡主東塔を以つて、之を招げども出でず、錫を瑞光に移すに及び、㊋東庵の訃を得、哀を擧して、拈香して云ふ、「向來采に任せて江外に遊ぶ。業風吹き到る明州の界。耆頭㊌の老拙庵に㊍聖着して、驀に毒手の相殃害するに遭ふ。猛虎の林を出づるも威るゝに足らず、虵蛇の路に當たるも、未だ怪しとなさず。㊎虛空激拶して火星飛び、叢林に流布して惡聲あり。死中に活を得て復た歸り來る。冷地に思量すれば眞に耐へ難し。近ごろ㊏筋斗已に倒翻すと聞き、

㊈佛心の法系極めて盛なり、之を澗東の道と云ふ。
㊉烈庵主は東庵に嗣ぐ東庵は大惠に嗣ぐ大惠は圓悟に嗣ぐ。
㊋東庵は佛照德光なり、又拙庵とも云ふ。
㊌耆頭は蜀の方言にて人語を入れざる人に順はざるの意なり。
㊍聖着は樂着に同じ「ツキアタル」なり。
㊎虛空と虛空がすれ合ふて火が出る。
㊏もんどり打つてばつたり倒れる、東庵の示寂を云ふ。

且つ喜ぶ昇平吾道の泰なるを。香を炷いて聊か以て殷勤を表し、拳頭と竹篦の債を償却す。大衆、只だ佛照和尚の如きは既に然も與麼なり、且く道へ、只だ今是れ屈を雪ぐとせんか、是れ恩に酬ゆとせんか。說着せば半文に直らずと雖も、誰れか知らん却つて通人の愛あることを。」瑞香、得處分明にして、確く其志を守り、應世を肯せず、伽梨は水光林影の中に勃窣たり、其高風逸韻を想見せば、人をして㊀意消せしむ。

鐵鞭㋒の韶禪師、因みに密庵開堂のとき、直ちに前に趨んで曰く、「箇れは是れ還佛場、心空及第して歸る。今日相見の處、大地に風雷を起す。作麼生か是れ相見底の事。」庵答へず、又曰く、「十二時中箇の漢あり、劒を把り來つて你が頭を截り、將ち去る渠を奈何せん。」庵亦答へず、遂に㋓滅すること一座具して曰く、「這の寃家に遇ふて打たずんば、更に何れの時をか待たん」と。庵亦答へず。身を退けて、㋔嗜を唱ふること三聲して曰く、「賊頭の㋕袁達李磨を捉得し到れり」と。鈞旨を請ふとき、庵方に一拳を竪て丶之を示す。曰く、「鈞旨を領す」と。筋斗を翻じて便ち出づ。庵入室罷んで、衆に告げて曰く、「適來箇の漢あつて、牙は劒樹の如く、口は血盆に似たり、手に一條の垂絲を把つて、鐵鞭の如くに相似たり。老僧親しく一下に遭ふ、汝等諸人切に須からく照顧すべし」と。此れより號して鐵鞭

㊀意氣消沈なり、僧を愛して愛せず紫衣の僧。
㋒鐵鞭允韶禪師は密庵に嗣ぐ密庵は應庵に嗣ぐ應庵は虎丘に嗣ぐ虎丘は圓悟に嗣ぐ。
㋓滅は拂なり、席具で一打ち打拂ふなり。
㋔嗜は賤しき者の貴人に對する受け答へに用ふる語、はいと云ふが如し。「ハーイ」「ハーイ」「ハーイ」と三聲するなり。
㋕袁達李磨は達磨に姓を付けしなり。

と曰ふ、不驚務の侍者たること六年なり。

㋐萬庵柔禪師、衆に示し云ふ、「有句無句は藤の樹に倚るが如し。荊棘林中に活路を開く。樹倒れ藤枯るるとき、句何れの處にか歸す。生鐵の秤鎚蟲に炷る。泥盤放下して呵呵と笑ふ。殺人劍と活人刀と、若し是れ金毛の獅狩子ならば、三千里外に㋙諸訛を見ん」と。佛生日に云ふ、「周行すること七歩、已に邪路に入る。目四方を顧みて、眼を開いて尿床す。天を指し地を指して、甚の㋚巴鼻かある。唯我獨尊、猶ほ是れ兒孫。畢竟他を浴して箇の什麼をか圖るや。良久して曰く、珊瑚枕上千行の泪、半は是れ君を思ひ半は君を恨む。」と。此の數語を閱すれば、霜を履んで氷を知り、露を踐んで暑を知る。密庵は門戸嚴緊にして、㋛人を接することは甚だ盛なりと雖も、豈呑舟の鱗の、能く網を漏るゝあらんや。

芥堂㋜璁禪師、木庵の室に預る、一日侍する次で、忽ち其怒に逢ふ。曰く、「你ぢ此に在つて什麼をか作す、夏制將に滿たんとす、西來意作麼生か會す」と。纔かに答へんと擬すれば㋝劈口に打一掌せらる。且聲を厲しうして曰く、「速かに道へ速かに道へ。」纔に答へんと擬すれば、又打一掌せらる、忽ち省發して汗下り、禮謝して去る。此れより諸方弘法道者と號す、往いて參激せざるなし。晩に吳門の聖因に住し、益聲譽を馳す、白髮肩に垂れ

㋐萬庵致柔は密庵に嗣ぐ。
㋙訛訛は入りくみなり、訛は雜なり訛は譌なり。
㋚巴鼻は牛の鼻づら、尻尾の如く「トラマヘドコロ」なり。
㋛接穴多くして手のまはり兼ぬるとは云へど、斯る呑舟の魚は漏さないの意ならん。
㋜芥堂璁は木庵に嗣ぐ、木庵は懶庵に嗣ぐ、懶庵は大慧に嗣ぐ、大慧は圓悟に嗣ぐ。
㋝耳へ掛けて打つた劈耳と云ひ口へ掛けて打つた劈口と云ふ

しかば、叢林呼んで聰白頭と爲すと云ふ。

㋐眞源惠日禪師、字は明可、方峻超卓なり、黃龍の三關を頌して云ふ、「我手は佛手、㋑糞箕掃帚、拈起して便ち行く、誰れか先後を分たん。我が脚驢脚、歩々踏着、虛空を踏破す、一任あれ卜度すべし。人々箇の生緣あり、屋漏りて靑天を望見す、昨夜泥牛㋒勃跳、金剛を帶累して發顚す」と。應庵之を見て嘆じて曰く、「眞に黃龍的骨の孫なり」と。竹篦子を頌して云ふ、「半載師を出して古塞に當る。將軍の匹馬意崢嶸。知らず重城を打破し了つて、空しく牢關を把つて放行せず」と。大慧聞いて曰く、「此れ黃龍の兒孫にして、亦我が楊岐下の說話を解するものなり」と。眞源嘗て僧に問うて曰く、「佛一大事因緣をもつて世に出見す、如何なるか是れ一大事因緣」。僧「無語。」復た引諭して、之に謂つて曰く、「例へば一顆の明珠の、頓ちに㋓朝天門灘頭市裡に在るが如し、千人萬人、行き過ぐれども見ず、忽ち一箇の漢あつて遇着し、便ち叫んで云ふ、我れ快活せりと、只是れ這箇の道理なり、會すや」と。初め杭の多福に住し、後に昇の興敎、明の香山に住す。乃ち天台萬年の㋔雪巢一村僧の嗣にして、語言宗旨、木水の本源あるが如きなり。雪巢別帖に云ふ、「專介の來りし時、書を收めて且喜す。㋕臨安の命を被り、遷還出世すと。仍て審かにす。別後新に住持を領し、道體康安なりと。深く以て慰となす。中間長蘆に赴き、相見を得んと欲す。已に入院せるを知る。人は言ふ、多福は政に於潛新城の深山中にありと。只悵然を成すのみ。我身畔、別に人無し。甚だ汝の歸來を望むも、已に出でゝ、㋖空王の印を佩ぶるを奈何せん。事兩全を要することは則ち難し。且つ勉力して、向前道を行せよ。自己を恣縱にして、厚からしめ、却つて他人を薄うすべからず。軟暖淡薄は、汝も亦深く之を悉せ、今の住院多くは此の如し。㋗相信ずべきなり。若し秋間に到らば、我定めて天台萬年の觀音別院に歸り、必ず長往の計をなさんと要す。汝を見るに因なきなり。且つ自ら世間の人情に保順して、祖道を光顯せしめよ。至祝、」と。普燈には、只だ其嗣法の、法常首座を載するのみ。

㋘愛堂妙湛禪師、水庵に、杭の淨慈に依つて、水頭淨頭となる。一日寺前に於いて、扇を擧げて錢を化す、忽然として猛省し、因つて臂を縮むるを忘る。旁僧訶して曰く、「獃子、扇上に錢あるなり」と、通身汗掖より出づ。歸つて水庵に白して之を印可す。亦頌あり、之に示して云ふ、㋙「一堆尿上の一尊佛、毫光を放出して天地を照す。鑊湯爐炭裡に蓮を生ず。只洗面に因つて鼻を摸着す」と。肯堂の爲めに、衆に首たるの日、新福帥王公度、遊山し、與に論じて契合す。福に到つて、黃檗を以て之を招く、後に、吳門の守趙公彥橚の承天の請に赴き、方

㋐眞源惠日は村僧法一に嗣ぐ、法一は草堂清に嗣ぐ、清は黃龍慧南に嗣ぐ。
㋑糞箕掃帚は「ちり取り」「はうき」。
㋒勃跳は「なぞる」なり、帶累は「まきぞへ」、發顚は前出。
㋓朝天門灘頭市は銀座通り、新京橋なり。
㋔村僧法一禪師雪巢と號す。
㋕臨安府の命により遷次公還せられて住持の職を領するなり。

㋖空王の印授を佩び住持せしな云ふなり、住持に祝聚の儀あり。
㋗小言と思はずに予が言を信ぜよ。
㋘愛堂妙湛は水庵師一に嗣ぐ、一は佛智裕に嗣ぐ、裕は圓悟に嗣ぐ。
㋙花嚴欄金毛の獅子、毫光は黃金佛の白毫光なり。

に順寂す。愛堂は安吉の人、朴野にして文飾を絶す、間々語言を發すれば、枯柴の如し、㊁人見るに及ばず、惜しい哉。

臨安府徑山少林の㊂佛行崧禪師は、建の浦城の徐氏に生れ、業を夢筆峰の等覺に受け、安吉の報本に瑞世し、東庵に嗣ぐ。道聲四に馳す、未だ幾ならず、杭の淨慈に住す。上堂に、「僧鹽官に問ふ、如何なるか是れ本身の盧舍那。官曰く、我が爲めに淨瓶を過し來れ。僧淨瓶を提げて至る。官曰く、復舊處に安んじ着せよ」と云ふを擧して、拈じて云ふ、「鹽官八萬四千の毛竅、竅々俱に開き三百六十の骨節、節々斷たんと欲す惜むべきかな這の僧夢の如くに相似たり」と。上堂に、「洞山云ふ、初秋夏末、兄弟東に去り、西に去る。直に萬里無寸草の處に向つて去れ。後來瀏陽庵主道ふ。門を出づれば便ち是れ草。大陽云ふ。門を出でざるも亦漫々地。」と云ふを擧して、拈じて云く、「同聲相應じ、同氣相求むることは、則ち三大老無きにはあらず。仔細に檢點し將ち來れば、總て是れ藤蛇足を繞る。且く利害什麼の處にかある。誰れか知らん雲外千峰の頂。別に靈松の雨を帶びて寒きあり」と。上堂に云ふ、「是法不可示。言辭相寂滅。春葩千萬叢。春山千萬疊。正與麼の時。釋迦老子鼻孔を打失す。是れ汝諸人還つて知る麼。」喝一喝して下座。上堂に云ふ、「大用現前を得んと欲せば、直に須らく頓に諸見を忘ずべし。諸見若し盡くれば、昏霧生せず、大智洞明なり。更に他物にあらず。遂に拂子を擧して云ふ。看よ看よ、若し見ると道はゞ、頭上に頭を安ず、若し見ずと道はゞ、頭を斬つて活を覓む。畢竟如何ん。良久して云く、泊んど錯つて注脚を下すべかりし。」喝一喝して下座。既に席を退き、武康宴山の接待寺を過ぐ。㊄寧廟尤も佛法を重んじ、嘉定の間、再び旨を得て南山を董す、即ち詔して、延和殿に登對す。號を佛行禪師、金襴の袈裟を賜ふ、寵榮至れり矣。

㊁蓋し承天の住持たること未だ久しからずして遷化せしなり、故に人多く見るに及ばず。

㊂佛行妙樂禪師は東庵德光に嗣ぐ、光は大慧に嗣ぐ、慧は圓悟に嗣ぐ。

㊃臨安府淨慈の肯堂充禪師は、徐杭の人にして、顏萬庵に嗣ぐ。風規肅整、望み一時に尊し、即心即佛を頌して云く、「美なることは西施の金闕を離るゝが如く、嬌なることは楊妃の玉樓を下るに似たり。終日君と花下に醉ふ。更に嫌ふ何れの處か不風流」と。㊅曹山酒を喫するに云ふ、㊆「販海の波斯大唐に入る。先づ珍寶を將つて暗に埋藏す。却り來つて手を伸べて人に從つて覓む。爭奈せん瞞じ難し當行あるを。」擧す、萬庵先師語あり、云ふ、「佛床に坐し、佛脚を斫る。東家の孔夫子を敬せず。却つて他鄕に向つて禮樂を習ふ」と。拈じて云く、「泥に入り水に入るは、則ち先師無きにはあらず。爭奈せん寒蟬枯木を抱き、泣盡くれども頭を廻らさず。拄杖を卓して云く、灼然として頭を回らさざる底ありや。肯堂㊇升子裡に下つて、伊を禮すること三拜せん」と。昔し大潙の㊈佛性謂ふ、「頌古拈古は、

㊄寧宗皇帝は南宋の第四主。

㊅肯堂彥充は顏卍庵に嗣ぐ、卍庵は大慧に嗣ぐ、大慧は圓悟に嗣ぐ。

㊆公案なり、僧問ふ、清銳孤貧請ふ師救濟せよ、山曰く、銳闍黎近前來銳近前す、師曰、泉州白家三盞酒喫了猶道ふ唇を沾さず。

㊇販海の波斯は海を渡つて南寶に來る波斯國の人なり。

㊈蹈みだんの下に陣つて三拜せん、又蹈床とも云ふ。

㊉佛性諱法泰、大潙に住す、圓悟に嗣ぐ、古人の公案を頌し、或は拈提するを頌古拈古と云ふ。

奢儉所を得んことを要す、人の錢を使ふを解するが如く、多きを必ずとせざるなり」と。善く肯堂の語を讀む者は、當に自ら之を知るべし。

寶峰の㋑端庵主、久しく佛照に侍し、其の女子出定の因緣を頌するを見て、悟入の處あり、一日丈室に造り、座の左側に於て、叉手して立つ、少頃して便ち出づ。照、前に呼び來して曰く、「什麼の辨白かある。」端叉右側に於て、叉手して立つ。照喝す。端趨り出づ。照之を頷ふ。端㋺恂恂たること鄙人の如く、小庵に居て宿給なし、然も戸外の履常に滿てり、同門の權孤雲、印鐵牛の如き、書を致して招けども出でざりき。

安吉州烏回の㋭月林觀禪師は、性純誠にして矯飾なし、福の侯官黃氏の子なり。初め牧童となり、鞭もて牛を叱して省あり、葷血を屏く、雪峰の忠道者に投じて出家し、荆南二聖の戒準に謁して得度し、澧州の證老衲に見えて、其の法を獲たり。初めて室に造るとき、話を擧するを聞く、云く、「若し能く物を轉ずれば、卽ち是れ如來なり。面前の香臺、作麼生か轉せん。」曰く、㋻「築着磕着」と。叱し去らる。復隨侍す、饒の薦福を過ぎ、雲門の話墮を見る。又十年にして、一日蓮池を繞つて行くとき、自ら誦して

㋑端庵主は佛照に嗣ぎ、佛照は大慧に嗣ぎ、大慧は圓悟に嗣ぐ。

㋺恂恂は恭敬の貌、此語もと漢書に出づ、宿給は一晚の宿へなり。

㋭月林は證老衲に嗣ぐ、證は月庵に嗣ぎ、庵は開福の寧に嗣ぐ、寧は五祖法演に嗣ぐ。

㋻築着は擣着に同じく「つきあたる」なり、磕着は石と石と打ち合す音「つきあたり」「かちあたり」なり。

云く、「那裡か是れ這の僧話墮の處」と。忽ちに大徹す。塗毒徑山にあり、遯庵華藏にありしとき、皆書の之れを致すありて分座す。洞山の麻三斤を頌して云く、㋼「唇上は碧斑貲豹博、舌頭は當的帝都丁。㋽頻りに小玉と呼ぶ元と無事。只だ檀郎が聲を認得せんことを要す」と。嘉泰の間、吳門の聖因に瑞世し、承天萬壽に遷る、學者輻湊す。烏回に住し、疾を示すの日、猶ほ再鼓入室し、且つ曰く、「桂花開く時、吾れ將に行かんとす」と。其徒をして預め夏制を結ばしむ。已にして桂花盛に開く、嘉定丁丑四月十三日也。參禪入室し、再び鼓を鳴らして普說す、衆集まり定まる時、拄杖を拈じて云く、「拄杖あらば拄杖を與へん。拄杖無くば拄杖を奪はん。衆中會する底のもの有るなきや。出で來つて道へ看ん」と。衆對ふるなし、拄杖を擲下して危坐、偈を書して、寂す、世を閱すること七十五、坐夏五十一。㋾闍維のとき、舍利計るべからず。烏庫命世の宗師、死生に處して、雲行き鳥飛ぶが如く、初より留礙なし。烏回夏中に入滅して、桂花盛に開くこと其の言の如し、是れ尤も其超絕奇瑞明驗の處を見る。荷負大法精一の力に非ざらん乎。

曹源生㋿禪師、信の龜峰にあつて衆に示して云く、「朝より暮に至るまで、鐘魚鼓板、諸人の爲めに上々の機を發し了れり。若し信得及せば、塵沙の諸佛、諸人の脚跟下にあつて跩跳す。若し信不及ならば、龜峰口を收得して飯を喫せん」と。禪床を拍つて下座す。眞に黃龍の所謂數世の富人、一錢

㋼「唇上は碧斑貲豹博」は、唐音「ピン、パン、ピン、ピヤウ、ポ」唇音、當的帝都丁は、唐音「タン、テ、テイ、ト、テー」舌音なり。

㋽お玉お玉に用事はないが忍び男にしらせたい。

㋾闍維は火葬なり。

㋿曹源道生は密庵咸傑に嗣ぐ、傑は應庵曇華に嗣ぐ、華は虎丘紹隆に嗣ぐ、隆は圓悟に嗣ぐ。

も虚用せざるが如きのみ。

松源岳㊀禪師、初め閩に入つて、乾元の木庵に見ゆ。久うして辭し去るとき、木庵「有句無句は藤の樹に依るが如し」と擧す。源曰く、「裂破。」曰く、「琅邪道ふ好一堆の爛柴と窣。」曰く、「矢上に矢を加ふ」。曰く、「吾が兄の下語、老僧過す㋐能はず、其れ如んせん未在なるを、他日拂柄手に在るとき、㋒爲人し得ず、人を驗することを得ず」と。曰く「爲人は博地の凡夫をして、一超に聖域に入らしむ、固に難し。人を驗することは、面前に打向して過ぐ、口を開くを待たずして、已に渠れが骨髓を知る、何の難きことか之れあらん」と。㋓庵手を擧げて曰く、「明々に汝に向つて道ふ、口を開くは舌頭上に在らず、後當に自ら知るときあるべし」と。年を逾えて、源密庵に衢州の西山に見ゆ、隨づて問へば卽ち答ふ。庵笑つて曰く、㋔「黃楊の禪のみ」と。後ち徑山に在つて、庵旁僧に不是心不是佛不是物を問ふを聞いて、忽ち大徹す。乃ち曰く、「今日方に知る、木庵の口を開くは、舌頭上に在らずと道ふことを」と。源は處の龍泉の吳氏に生れ、法を蘇臺の澄照に開く、㋕慶元の間、旨を蒙つて靈隱に住す、門庭高峻にして、入るもの大器たらざる鮮し。烏庫松源、破庵、曹源、萬庵、豈に㋖中峰の道を起すものに非ずや。

大梅の㋗止翁祥禪師は、無用の嗣子なり。衆に示して云く、「瑞岩の示衆支離を絶す。㋘栗棘金圈劈面に揮ふ。直下に人あり呑透得せば、更に須らく來つて頂門の鎚を喫すべし」と。語言質直、其の人の如し。住山の規模尤も人に過ぐ。

月林觀㋙禪師の會下に、㋚「杜多の、行なるものあり、俱胝一指の話を明得す。且曰く、「吾れ老いたり、須らく再來すべし」と。歸寂の後三十餘年にして、月林湖の報本にあり、夜夢らく、開堂して俱胝の話を擧するに、杜多の行、室に至つて一指を竪つと見る、明旦室內に前話を擧す、㋛孤峯の秀公時に旦過の中にあり、趨り入つて亦一指を竪つ。月林曰く、「杜多行再來す」と。

福唐の㋜明首座、寂照と號す、飽參聰敏なり、久しく空叟に四明の玉几に侍す。叟風疾㋝を感ずること數年、左右相繼いで辭し去る、照服勞益々勤む。叟常つて囑するに、㋞福鮮し、宜しく出世爲人すべからざるを以てす。里に歸つて、㋟鑑絕照の爲めに、衆に鼓山に首たり。帥李公俊大雲峰をもつて之れを招く、辭するに偈を以つてして云く、「箇は是れ皇朝無事の僧、談禪說

㊀松源崇岳は密庵に嗣ぐ、曹源と兄弟なり。
㋐非難の仕樣は無けれどもどうも矢張いけない。
㋒爲人は學者の世話するなり、人を驗するは人の手元を試驗するなり。
㋓もうよいよいと手を擧げて制するなり。
㋔黃楊は「ツゲ」の木なり、生長し難きもの、黃楊の禪は「コビツキ」或は「シヤチコバリ」の禪なり。
㋕南宋寧宗の年號也、日本後鳥羽院建久に當る。
㋖中峰は密庵の塔所、天童にあり。
㋗大梅の止翁は無用の淨全に嗣ぐ、全は大慈に嗣ぐ、慈は劉

悟に嗣ぐ。
㋘栗棘は栗のいがなり、金圈は鐵丸なり、或は云ふ、圈は牢なり、鐵の牢なりと、劈面は「まつかう」なり。
㋙月林は證老衲に嗣ぐ、前出。
㋚鉢坊主、名は行俱胝、和尚は指一本で横說竪說す、之を俱胝一指と云ふ。
㋛孤峰秀は月林の法嗣なり。
㋜寂照明首座は空叟宗印に嗣ぐ、印は佛照德光に嗣ぐ、光は大慈の法嗣なり。
㋝今の肺病ならん。
㋞次の隔分鮮し、出世して人の世話などすべからず。
㋟絕照の話は中卷に出づ。

道總べて無能、頽然日を送るすら猶ほ贅かと嫌ふ。敢べて虛名を把つて祖燈を玷さんや」と。絕照も其の出づるを勉む、復た曰く、「願はくは閑人と做らん」と。偈を述べて云く、「恰も半頭を露して原畔に立つ。故人底事ぞ又相逢ふ。柴門此を去つて關鑰なし、佛若し來る時却つて容れず」と、卽日遁れ去る。後に閩清の白雲に寓し、學者景向す。又數年にして、帥趙公希靜、禮を盡して雪峰をもて迎請す。照書を以つて、小師㋔圓庵主に授け、辭謝して赴かず、帥沈香を封して供となし、將るに四句を以つてして云く、「道人高臥して挽けども來らず。凜々たる清風懦頽を起す。太守親しく道を問ふに由なし。辨香聊か小師の回るに寄す」と。寂照三十餘年、一破紙被を守り、見地明白なるも、㋕記莂に遵つて表襮を恥ぢ、林藪に依つて寂寥に安んじ、始卒易らず、名位を爭競し、㋖佛祖を販賣するものに、其風を聞かしめば、亦以て少しく愧づべきなり。

浙翁佛心㋗禪師、如璨に示す法語に云く、「本色の道流は、十二時中、六根門頭、㋘空牢々地なること、一面軒轅の寶鑑の如く、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ず。甚んの眞如涅槃、菩提煩惱をか選ばん。以至、世間の虛幻、情欲、逆順、是非、一々照破して、直きに是れ汚染することを得ざれ。若し也、六根門頭纔かに纖毫の異念あらば、便ち許多か、障をなし、礙をなし、寃をなし、對をなされて、七顚八倒を得せしむ。凡聖の岐此れよりして分かる。然れども、凡聖は初より兩種なし。只だ是れ一箇了事の人のみ。了する底を喚んで聖となし、了せざるは便ち是れ凡夫なり。龐居士云ふ。『是れ聖人にあらず、了事の凡夫』とは、此れの謂なり。既に得了を知らば、更に須らく子細にすべし。目前に㋙輕結髮着すべからず。箇の裡方に人の牙關を咬定し、且つ㋚崖し將ち去るを見んことを要す。驀然として、懸崖に手を撒する處に崖到せば、正に好し、人の爐鞴に入り、人の鉗鎚を受けて、箇の本色の道流と稱せんこと、分外と爲さず。忽爾として時緣に迫られ、出で來つて、人の與めに、粘を解き、縛を去るも、內亦愧づる無うして、自然に綽々として、餘裕あるなり」と。此を閱するに、眞に臨濟宗の骨髓のみ。

常州華藏の㋛明極祚禪師は、暉自得に嗣ぐ、嘗つて保壽開堂の語を擧して、拈じて云く、「保壽開堂、衆の爲めに力を竭す。三聖推し出す、故園の春色。保壽便ち打つ。㋜可知禮也、鎭州一城の人の眼を瞎却す。三聖重々に肝膽を露す。保壽下座便ち方丈に歸る。千古叢林の榜樣を爲す。喝して云く。喚んで㋝榜樣と作し得んや。」明極は、大父をもつて宏智に事ふ、拈提は、山濤の兵を論ずるが如く、闇に孫吳に合ふ、亦叢林の榜樣たるべきなり。

㋔圓庵主は寂照の弟子也、弟子を小師と云ふ。
㋕記莂の語は禪師の鮮し云云是也、襮は表なり、出世を云ふ、始卒は始終なり。
㋖佛は法を賣り祖師は佛を賣るなり。
㋗璨浙翁は佛照に嗣ぐ、前出。
㋘空牢牢は空明明なり、黃帝軒轅氏の照魔寶軒轅鏡は書に出處なしと聞く、蓋し古來然く相傳ふるなり。

㋙へばりつくなり。
㋚崖又堰に作る、拒也、邪魔もの推しのけて進むなり。
㋛明極は暉自得に嗣ぐ、自得は宏智覺に嗣ぎ、覺は丹霞の淳に嗣ぎ、淳は芙蓉道楷に嗣ぐ、曹洞派下なり。
㋜可知禮也は「いろはにほへと」なり、支那にて小兒に敎ふる習字の手本なり。
㋝榜樣又模樣に作る楷模なり。

安吉州鳳山資福の㋐破庵先禪師は、王氏、蜀の廣安新明の人なり。密庵に烏巨に參ず、衆に從つて入室し、其の旁僧の爲めに、㋑「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず」と擧するを見て、忽然として朗悟す。復た隨侍して蔣山を過ぐ、五載自ら㋒街鬻せず、亦未だ嘗て其の許可を得ず、遂に辭して蜀に歸る。密庵濬かに小肩輿に乘じ、前詣すること五里、袖中より語を出して之れに餞す。曰く、「萬里南來す㋓川嘉苴、奔流及を度して玄關を叩く。頂門歡瞎す摩醯の眼。去住還た珠の盤に走るに同じ」と。破庵夔府の臥龍に住して、始めて法嗣の書を通ず。時に密庵天童にあり、育王の佛照に謂つて曰く、「元來川僧に道義あり」と。佛照曰く、「待て、你が知り得ることの、遲了なることを」と。蓋し密庵は平生川僧を怕れて、掛搭を肯んぜず、而して佛照は川僧を喜ぶ、堂中の大半は是れなり。

妙峯善㋔禪師、台州の憲因に住す。開爐の示衆に云く、「翠雲例に隨つて也た開爐。寒灰を撥盡して火も也た無し」。拂子を竪起して云く、「拈起す死柴頭上底」。吹いて云く、「知らず誰れか是れ赤鬚胡」と。高原之れを聞いて、青山鄭公に薦む。公の云く、「見說らく、他れ㋕人の院子を住壞す」と。原云く、「佛法も也人の撑拄する在らんを要す」と。後に臨安の永敎に居す、公果して省劄を付下し、請じて小瑞岩に住せしむ。再び佛照に育王に見え、風幡の語を以つて、箭鋒の機にあつ。佛照之に贈るに偈を以つてして云く、「今日君が爲めに一線を通ず。斬釘截鐵吾が宗を起す」と。妙峯は劉氏なり、晚年叢林老劉をもつて之を呼ぶ。

㋐破庵は密庵に嗣ぐ、密庵は應安に嗣ぐ、應安は虎丘に嗣ぐ、虎丘は圓悟に嗣ぐ。

㋑六祖風動幡動の公案。

㋒自己の見所をてらはす、密庵も蜀僧は錄ひなれば印可せざりしなり。

㋓嘉苴は橫嶺なり、四川の人は手に合はぬ故川嘉苴と云ふ。

㋔妙峰は拙庵に嗣ぐ、庵は大惠に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。

㋕人の寺を預りて大層荒したと云ひしなり、佛法の頭綱を拄ふる柱も必要なりと答ふ。

衢州報恩の百拙登㋖禪師は、和州烏江の人、族は閔氏、應庵の晚子なり。初めて見ある時、言ふ、「夜半白晝の如し」と。學者に示して曰く、「道人の相見は週遊する莫れ。大地都盧べて是れ一州。手に信せて拈じ來り、手に信せて用ふ。始めて知る大地一毫に收まることを、」と。又曰く、「道人の相見㋗哆々すること勿れ。一句以つて干戈を定むべし。得失是非都べて拈却す。知らず那事か復た如何ん。」報恩に住すること三夏、賦性彫飾を絕し、機語皆質直なり、故に百拙の號あり。

野雲南㋘禪師は、會稽の人、表裡端勁なり、先きに無用の會中に於て園頭となり、契悟し、後に瑞世す。衆に示して云く、「霜風落木、雁陣寒きに驚く。㋙生身の父母、心肝を露出す。觀音菩薩。嗔霍不盡。鼻孔を失却す。諸人且喜すらくは天下太平なることを」と。又云く、「百計推尋すれども永く面を見ず。一時に休し去れば、在處に渠れに逢ふ。長連床上に粥を喫し飯を喫し、飽を取るを期とな す。我れ且く爾に問ふ。常住の一粒米、是れ幾番か手を過すぞ。」烏虖、楊岐の道、㋚大慧に至つて

㋖百拙善登は應庵に嗣ぐ、應庵は虎丘に嗣ぐ、虎丘は圓悟に嗣ぐ。

㋗哆々は多言なり、大口あいてしやべりちらすは藥物なり。

㋘野雲處南禪師は無用淨全に嗣ぐ、無用は大慧宗杲に嗣ぐ、大慧は圓悟克勤に嗣ぐ。

㋙生みのおやちつちだしなした、嗔霍は怒りおどすなり。

大いに振ふ。語言機辯㋑胥江八月の濤、能く遏むるもの無きなり。無用は、祇だ其の親切底を以つて人を接す、亦敢へて湊泊するもの無し。晩に始めて野雲を得、此等の示衆は、眞に無用親切の語なり。孰れか㋺優孟たり、孰れか孫叔たるを知らず、佛日の子孫たるを忝しめざるものなり。

淳庵淨㋩禪師、蜘蛛の頌に云く、「立處は孤危、用處は親し、一絲頭上に乾坤を定む。渠儂は是れ機變に誇るにあらず。衆生の爲めに命根を斷たんと要す、」と。人の爲めに誦せらる。尤も能く節儉省事、人を勞役せず、亦舜老夫の炙燈掃地、皆躬ら之を爲すが如し。

退庵奇㋥禪師、印別峯の室に徑山に預る。別峯纔かに其の來るを望見し、失喜して、床を下つて之れに接し、復た衆の爲めに舉話せず。退庵衆を妨げんことを恐れて、後惟だ未だ至らず。金山に住する普說に云く、「便ち恁麼に散じ去るも、早く是れを平生に辜負し了れり。那んぞ更に進前咨詢するに堪へん。㋭某甲等、生死事大無常迅速の爲めに、種草と爲るに堪へず。若し是れ互に賓主となつて、成法爲人せば、却つて些子に較れり。此れを已に徹證するものの說と爲す。或るものは久しく叢林にあり。用心せざるに非らず。箇の透徹を得る能はざるものは、過什麼の處にかある。過は信根の重からざるにあり。半は信じ半は疑ひ、做

㋙大慧下に法嗣九十九人を出だす。
㋑揚子江八月の滿月を以て濤の高漲となす、澎湃として山岳の如し。
㋺優孟は役者なり、曾て孫叔敖に扮す、佛日は大慧果禪師、前出せり。
㋩淳庵善淨禪師は息庵覲に嗣ぐ覲は水庵師一に嗣ぐ、一は佛智裕に嗣ぐ、裕は圓悟に嗣ぐ。
㋥退庵遠奇は別峯印に嗣ぐ、印は密印民に嗣ぐ、民は圓悟に嗣ぐ。
㋭懷語なり。

すに似て做さず。只だ是れ決定の志無く、又全身放下すること能はざるなり。縱使放得下し做し得るも、理路絕する處、情識盡くる處、靜境も戀はず、鬧境も拘らず、只だ與麼に死水裡に浸在して、分明に死し了つて、活すること得ざるもの、往々に多し。只這裡に向つて着到し、若し能く猛烈にして靠せ將ち去り、一撞に撞着して初めて得ん。此れを久しく叢林にあつて、未到頭を打するものの說となす。若し是れ乍入叢林の兄弟、信根純淨にして、此の事を諦聽せば、恰も箇の白練絹の如くに相似て、他人の點汚を受けず。明師に遇ふを得て、一片の誠心を發し、人前に出づるを願はず。唯だ只だ是れ參禪學道し、心地を發明せんことを要し、之に資するに勇猛確然生死の大事をもて念となし、十二時中、時時に㋩覷捕し、驀然として慮を泯じ知解を絕せば、晴空萬里片雲を掛けざるが如くならん。何ぞ日頭の出でざるを患ひんや。日頭僅かに出づれば照さざる處なし。日頭の出づる時恰も箇の什麼にか似たる。山野老婆心切にして、㋬壁角頭に向つて一片の陳橘皮を拈出し、諸人の爲めに樣子を作さん。豈に見ずや。壽禪師因みに普請の次いで、一片の柴頭を放下して、驀然として契悟す。便ち道く、『撲落他物にあらず。縱橫是れ塵にあらず。山河と大地と、全く法王身を露はす』と。這箇の時節還つて計較し得んや。人の水を飲んで冷暖自知するが如し。法眼和尚も也曾つて恁麼に打發すること一回す。便ち解道す。『物物心上に到る。全心物おのづから閑なり。古今城郭の裡、得

㋩覷は窺ふなり。
㋬壁の角の塵まみれの内より蟲喰ひの橘皮を拈出して見やう。

るもの住もすれば山の如し、』と。眞語の者實語の者と謂ふべし。恁麼の時に當つて、殊勝を求むるを用ひざるも殊勝自然に至る。但だ壽禪師大法眼此の如きのみにあらず。三世の諸佛、六代㋓の祖師、天下の老和尚に至るまで、皆此を出でず。若し別證別悟あらば、卽ち是れ外道の法にして、是れ佛法にあらず。金山恁麼に、㋔切々怛々たること、恰も箇の媒人の如くに相似たり。東邊に說くこと一歇し、西邊に說くこと一歇し、兩邊に說くこと一合す。到㋕家相見するに至るに及び、儞自ら理會して、媒人の事に干らず。儞若し實に到家相見すること一回せば、便ち捨つるに忍びざるなり。參禪學道は、須らく捨つるに忍びざる處底の田地に至つて、正に好し工夫を做すに、人の山に上るが如く、各自に努力すべし。」烏庠、大爐韛㋖に入り、大鉗鎚に上り、等閑に一機を發し、一境を示すも、自ら尋常にあらず、此等の普說、恰も田を賣つて契を立つる似くに相似て、東西南北、四至、一々人の爲めに指出す。別峯三十餘年、曲彔床に坐して、只だ退庵を得て、㋗一麟足れり。

南嶽の㋘方廣照禪師は、淳素鄙朴、罵詈を以つて佛事をなす、學者之れを憚る。一僧あり、至る、照問うて曰く、「天寒く歲暮る上座何れより來る」。僧曰く、「一家事あれば百家忙し」。照曰く、「相見する底は是れ阿誰ぞ。」僧曰く、「某甲と和尚と」。照香臺を指して曰く、「面前は是れ什麼ぞ。」僧曰く、「香臺」。照曰く、「將に謂ふ收番㋙の猛將と元來是れ行間の小卒のみ。」僧喝す、照便ち打す。第二僧に問うて曰く、「天寒く歲暮る、上座何れより來る。」僧曰く、「氣力の㋚祇對するを得ず。」照曰く、「聞く儞衆を攪して出院すと是なりや否や。」僧曰く、「和尚幾時か者の消息を得たる。」照曰く、「近前來儞が爲めに道はん。」僧舌を吐く、照便ち打す。且つ㋛含胡詬罵して曰く、「我が這裡米なく菜なし、也來つて亂統す」と。拄杖を以つて之れを趂ふ。照は西蜀の人にして、佛照の會中に、照白眉と稱するものなり。垂示機語、空叟鐵牛の下に在らず。

橋洲曇㋜禪師、字は少雲、嘉定府の人、峽を出でゝ、明の仗錫に住す。暇日論を著して、佛祖の機緣を發明し、名けて㋝大光明藏と云ふ。筆勢宏濶なり。惜しいかな、未だ全書を成さずして寂す。丹霞を論贊して云く、㋞「殿前の草を剗り、聖僧の項に騎り、天寒うして木佛を燒く。三事併せ案ずるに、夫れ豈に他人の能くする所ならんや。衡山の雲の軒豁呈露、遠かに突兀を見るが如し。自ら能となさゞるなり。然れども、時に覿顧悖

㋓達磨二祖三祖四祖五祖六祖より、其餘の諸善知識に至る皆然り。
㋔切切怛怛は永々しく用も無き事をしやべるを云ふ。
㋕到家は家に到るなり、此の家は床も柱も壁も天井もなし、本分の家山なり。
㋖爐韛は鍛冶の「ふいご」なり、鉗鎚は鍛錬なり。
㋗古語に衆角多しと雖も一麟足れり。
㋘方廣照禪師は佛照德光に嗣ぐ、光は大慧に嗣ぐ、大慧は圜悟に嗣ぐ。
㋙收番はえびすに打ち勝つと云ふ意。
㋚其の樣に寒うては返詞する氣力もなしと。お前は大衆を煽動して攪分散させたと云ふがほんまか。
㋛含胡又含糊に作る、口を、モガモガ」さすなり、詬罵ほのゝしるなり。亂統は亂道と同じ。
㋜橋洲曇晏禪師は大慧に嗣ぐ、大慧は圜悟に嗣ぐ。
㋝大光明藏三册、今猶ほ傳ふ。
㋞殿前草刈の作務を命ぜし時、丹霞盆に水を盛り剃刀を添へて石頭の前に伏す、石頭笑つて爲めに鬚髮を剃除す、是れ丹霞得度の因緣なり。次の二事は人皆之を知る故に注省。
㋟南陽國師の侍者には一手許して南陽國師を生擒せるなり。
㋠大光明藏には宜しくの上に學者の二字あり、津は津液なり、後腋の涎なり。

怖して、其の守る處を喪ふものあり、院主是れなり。等閑に㋓南陽侍者を放過して、直きに南陽國師を擒取す。謂ゆる弓を挽いては、須らく强きを挽くべしとは、是れ此の手なり。重く末世疲癃の疾を哀しみ、古人必効の方を增損し、大法藥を成すもの、㋔宜しく元和津を用ひて嚥下すべし。和平の福立つて俟つべきなり、」と。余佛智老人に見えしとき、偶々之を閲す、且つ曰く、「學者も亦宜しく此に於て、元和津を用ひて嚥下すべし。」洲嘗つて自ら龕志を撰す。略に云く、「初め楞嚴圓覺起信を遶き、復た捨て去つて、成都照覺の徹庵、白水の㋕∴庵に依り、包を挈げて南に來り、先大慧に育王徑山に從ひ、後東林の萬庵、蔣山の應庵に見ゆ。辛苦艱難始めて平生の願を畢れり」と。則ち知る、其涉歷尤も艱辛なるを、未だ容易にして得るを聞かざるなり。

慶元府天童の無際派㋖禪師は、佛照に嗣ぐ。建安の張氏に生る、㋗慶元四年常の保安に開堂す。上堂に云く、「說けば卽ち無功有過、說かざるも亦是れ罪過。今より各々己れの過を省して、以つて人の過を責むる無かれ。拄杖應に放過すべからず。也從頭より按過せんことを要す。拄杖を卓して云く、㋘內卦已に成り、再び外象を求む。又卓すること三下。㋙風山小畜を占得して、澤風大過を變成す。」卓すること一下して下座。初め密庵の法席に預る、剪紙搭あり、戲れに頌せしむ。頌して云く、「當陽に拈起すれば剪刀藏。七級の浮圖手に應じて廻る。笑ふに堪へたり㋚耽源多口の老。湘南禪北尸骸を露はす、」と。一衆服膺す。船子に讃して云く、㋛「三寸鈎を離れて、城することを一橈す。百千の毛竅冷颼々たり。然く兩手親しく分付すと雖も、要するに渠儂が自ら點頭するにあり。」靈照女を讃して云く、「老態㋜生涯を喪盡するの後、汝を累して衒に沿ふて笊籬を賣る。是れ家貧にして兒子の苦しむにはあらず。此の心能く幾人の知るある。」叢林之れを稱す。嘉定の間、天童に在つて疾を示す。鮮衆の上堂に云く、「十方壁落なく、四面亦門なし。㋝淨躶々、赤洒々。汝可把。喝一喝して云く、幾度か賣り來つて、還た自ら買ふ。爲めに憐れむ松竹の淸風を引くを、」と。下座して丈室に入り、端座、泊然として化す、壽七十六、臘五十二。佛果の下、大藏人を接するの多き、馬祖の如し。今は獨り㋞東庵下を盛んなりとなす。

㋔宜しく元和津を用ひて嚥下すべし。和平の福立つて俟つべきなり、」と。

㋕∴音伊なり、古句に伊字の三點首羅に似たりの句あり。

㋖無際了派禪師は佛照に嗣ぐ、佛照は大慧に嗣ぎ、大慧は圓悟に嗣ぐ。

㋗慶元四年は日本の建久九年にして、四行法師示寂の年なり。

㋘易の卦の下三本を內卦と云ひ、上三本を外卦と云ふ。

㋙小畜の三爻變じて大過を成す、風山と云ふよりも風天と云ふ方妥なり、風山は漸の卦なり、小畜は上風下天なり、小畜は密雲して雨ふらざる卦なり。無際は初め密庵に參じ後佛照に嗣ぎしなり。

㋚耽源は人の名、曾て頌を作つて曰く、湘の南潭の北中に黃金あり、一國に滿つ云云。

㋛夾山善會の船子德誠に參する因緣を頌す、船子善會に問ふ、絲を垂るる千尺、意は深潭にあり、鈎を離るる三寸、子何ぞ言はざる、會曰を開かんと擬す、船子櫓を以つて勞會に打つて水に落す、會才かに船に上る、船子急に迫つて言ふ、導へ道へ、會又口を開かんと擬す、船子また打つ、會玆に於て豁然大悟す。

㋜生涯は資產なり、喪盡は身代限りなり、見聞覺知得失是非の資產を喪失せるなり。

㋝躶々は明白なり、洒洒は淸深なり、赤は空の義、赤地千里などの赤なり、汝可把は捕へ處なきなり、無鼻孔と同じ。

㋞東庵は佛照禪師、德光多く宗匠を出す、又翻庵と號す。

㋟蝸庵元藏禪師は晦庵惠光に嗣ぐ、光は雪堂道行に嗣ぐ、行は佛眼淸遠に嗣ぐ。五祖下に三佛あり、佛鑑、佛眼、佛果、各格外の機を具し多く宗匠を出す、是れ佛眼派なり。

㋠眼師は雪峰の開山義存禪師なり、雪峰は欽山に業まる「ぶ

螺庵肇㋐禪師、雪峰に住するの日、㋑祖師を贊して云く、「德山の棒下に桶底脫し、蟭螟眼裡乾坤濶し、東南の第一峰に坐斷し、百川倒流して鬧聒聒たり、」と。自ら㋒照子に題して曰く、「陰崖鳥は滅す槎頭の雪、午夜猿は啼く竹外の烟、怪しむなかれ住山技倆なきことを。牛に騎つて踏破す水中の天。」余己酉の夏、石翁玉和尚の會中に在り、耆宿猶ほ能く之れを言ふ、今僅かに此の二贊を憶すと云ふ。

金華の元首座、剛峭簡嚴、叢林目して飽參となす。等庵に白雲に見えて始めて大事を了す。僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」曰く、「卽心卽佛。」問ふ、「如何なるか是れ道。」曰く、「平常心是れ道。」問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」曰く、「趙州道ふ底。」聞くもの皆笑ふ。後に僧あり問ふ、「如何なるか是れ佛。」曰く、「南斗七北斗八。」問ふ、「如何なるか是れ道。」曰く、「猛火に麻油を煎る。」問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」曰く、「龜毛長きこと數丈。」傳者皆喜ぶ。噫若し此の如く答話を辨驗せば、惟だに己靈を埋沒するのみにあらず、抑も亦前輩に辜負す。

㋓蒙庵聰禪師は、福州長樂の朱氏に生る。少長侵侮好狎せず、年十九にして信の龜峰の光晦庵に依り、二十七にして得度す。卽ち告ぐるに、衆に隨つて專一に己躬の大事を體究し、衆務をもつて役となすを免れんと欲するを以つてす。庵笑つて曰く、「汝㋖緊參禪を要するや、佛法は一切作用の處、

と」なり、聒聒は水聲の潺潺たるを云ふ。

㋒照子は肖像なり、自分の肖像の贊なり、槎は「いかだ」なり。

㋓蒙庵元聰禪師は螺庵と俗兄弟にして又同じく光晦庵に嗣法す、佛眼派。

㋖緊參禪は當時の語、確かり參禪するを云ふ。

尋常行履の處にあり、何んぞ事務の奪ふを懼れんや。卽今且く一月の日を限り、如し了せずんば、決して罰して恕さゞらん」と。退いて、佛法は尋常行履の處にあるを以つて、寫して窻上に貼し、脇席に至らざるもの半月、庵時々に默かに之れを探る。其の作意甚だ猛烈なるを見て、私かに念じて云へらく、此の子若し悟らずんば、恐らくは狂し去らんと。一日鼻を搐めて泣聲あるを聞いて云く、㋗「啞、此の子を壞し了んぬ」と。詢問して乃ち俗家訃音の至れるを知る。庵擧意して曰く、「這裡好し一槌を與へんには」と。卽ち喚び來つて問うて曰く、「汝に什麼の事がある。」且つ道ふに父の亡するを以つてす。聲未だ絕えざるに、庵扭住㋘して一掌を與へて云く、「許多の無明煩惱、甚の處より得來る」と。又一掌す。當下に疑滯氷釋して、卽ち禮謝す。口を銜いて偈を呈して曰く、「了々々徹底了、端無く赤脚東西に走る。晴空の月一輪を踏破して、八萬四千門洞曉」と。庵曰く、「這の鈍漢、且く三十棒を放す。」曰く、「某甲も亦和尚に三十棒を放す」と。曰く、「儞看よ、瞎漢便ち敢へて亂統す」と。此れより機鋒峻捷にして敢へて當るものなし。庵臨寂のとき、付するに法衣幷びに偈を以てして、曰く、「再來の毒種、元聰侍者、耐へ難し吾が宗、汝が邊に滅せん。」且つ曰ふ、「異日老僧に辜負するを得ざれ。」曰く、「卽今も亦少からず、」曰く、「恁麼ならば、三十年後、此の話大いに行はれん。」曰く、㋙「蒼天の中更に寃苦を添ふ」と。龜峰に瑞世し、晦庵の嗣となる。後六處に移り、旨を被つて徑山に住し、十四

㋗啞又唖字を用ふ、覺えず發聲するなり。

㋘扭住はねぢふせるなり。

㋙蒼天は旻天に號泣するなり。

夏にして寂す。烏庫、蒙庵は晦庵の門に於いて、燒尾鱗なり、烏窠の㊃會通を得るが如く、㊂三登九到の勞なし。師資緣合と曰ふと雖も、顯微一貫、印の空に印する如く、了に朕迹なし。介にして勇、顧にして專なる者の驗に非ざるか。

笑翁堪㊁禪師、初め遊方して明の太白に抵る。無用問うて曰く、㊁「汝は行脚僧か遊山僧か。」曰く「行脚。」又問ふ、「如何なるか是れ行脚の事。」翁坐具を以つて之を撼つ。無用曰く、「此僧敢へて虎鬚を捋づ、參堂し去れ。」一日室中に狗子無佛性の話を舉す。口を開かんと擬す、無用竹篦を起擧す、翁應聲して曰く、「大茶毒鼓、天に轟き地に震ふ。腦を轉じ頭を回せば、橫屍萬里。」無用之を然りとす。翁平生未だ嘗つて㊄言を以つて物に徇ひ、色を以つて人に假さず。

自牧謙㊂禪師は西蜀の人、溫雅博喩、雙徑蒙庵の嗣なり。閩に入つて鳳山に住し、鼓山に遷る。時に高州の文學劉鎭叔安、謫居最も久し、間々往いて咨參す。一日問うて曰く、「某甲參禪し得んや。」曰く、「人々は分あり」と。曰く、「卽心是れ佛、如何なるか是れ非心非佛。」曰く、「夜行を許さず明に投じて須らく到るべし。」劉此に因つて心を佛法に留む。自牧後に雪峯にあり、室中學者に問ふ、「雪峰に句子あり。」僧曰く、「請ふ和尚道へ。」自牧拄杖を以つて趕ひ出す。此の如く爲人せしかば、機に契ふもの少し。

妙峰善㊅禪師、杭の靈隱に住す。丞相青山鄭公、天童人を闕ぐに因つて、奏して其の行を勉む。答ふるに、年耄に踰えたり、尙ほ夜行休せざらんやを以つてし、二偈を遞べて辭免す。一に曰く、「劍嘯門を敲いて定眼開く。驚傳す鈞輪山に入り來ると。岩に倚るの古木摧殘甚だし。㊆空しく費す陽和の到ること一回するを。」二に曰く、㊇「鼻繩擊斷已に多年。老倒す松楸澗草の邊り。相國恩波海の如く濶し。何を妨げん乞與日高うして眠るを。」嘗つて魯祖僧の面壁を見るを拈じて云く、「力を費すこと少からず。」瑞岩主人翁云く、「卽今亦少からず。」妙峯晚年足限を越えず、晝夜惟だ楮衾を擁して兀座す。垂示語言、皆人を藥發す。鄭公其の錄に題して云ふ、「師佛法中に於いて、㊈橫騖直貫、曾つて留難なし。方圓の器の虛空を滿貯するが如く、執着すべからず。七寶山の智惠の泉を湧かしむるが如く、悉く法味を具す、」と。知言と謂ふべし矣。

慶元府天童の如淨㊉禪師は、頎然たる豪爽、叢林號して淨長と曰ふ。眞歇の塔を禮する偈に云く、「眞空を歇盡して活機に透る。兒孫相繼いで命絲の如し。而今倒指して空しく斷腸す。杜宇血に啼く

㊃會通は烏窠和尚の侍者なり、通偈々出でて諸方に參ぜんと請ふ、窠曰く、汝佛法を學ばんと要せば此の間亦少許ありと、布毛を拈じて之を吹く、通卽ち悟入す。

㊄雪峰九たび洞山に上り、三たび投子に到る。

㊅笑翁妙滿禪師は無用淨全に嗣ぐ、全は大慧に嗣ぐ、慧は佛果に嗣ぐ。

㊆修行を成す爲めに雲遊する行脚僧か、或は大事了畢して遊山玩水する遊山僧かと尋れしなり。

㊇誠に忝ぐ〳〵しき笑翁なり。

㊈自牧謙禪師は蒙庵元聰に嗣ぐ、聰は雪峯の晦庵に嗣ぐ、庵は雪竇行に嗣ぐ、行は佛照法遠に嗣ぐ。

㊉世系前出。

㊆空しく費すとは、折角花を咲かさうとする春の神樣にむだ足を踏ませたとの意なり。

㊇鼻繩擊斷は、牛も老いては充れぬ故、鼻づらの繩を解くなり。

㊈堅樁十文字自在自由に働くなり。

㊉長翁如淨は足庵鑑に嗣ぐ、鑑は七休珏に嗣ぐ、珏は眞歇清了に嗣ぐ、了は丹霞子淳に嗣ぐ、曹洞派なり。

花上の枝。」衆に示して云く、「心念紛飛如何んか手を措かん。趙州の狗子佛性無し。只だ个の無字鐵掃帚、掃ふ處に紛飛多し。紛飛多き處に掃ふ。轉た掃へば轉た多し。掃ひ得ざる處命を拚てゝ掃ふ。壹夜脊梁を竪起し、勇猛にして切に放倒する莫れ。忽然として大虛空を掃破せば、千差盡く豁として通ず」と。宗趣知るべし矣。「瑞世は誰に嗣ぐ」と問ふものあり、曰く、「如淨。」「道號は何とか謂ふ」と問へば、曰く、「淨長。」後太白山に於いて、疾に感じて席を退く。涅槃堂に下つて始めて大哭し、鑑足庵の爲めに燒香す。入寂の時、侍者告ぐるに、法堂寶蓋の鏡、座上に墮つるを以つてす。曰く、㊁「鏡枯禪の至るなり」と。其の言の如し。

高原泉㊄禪師、令聞素より著る。慶元の梨洲に瑞世す。問ふものあり、「囊錐已に露はる。至寶は藏し難し。四衆側かに聆く。願くは法要を聞かん。」曰く、「截舌に分あり。」問ふ、「恁麼なれば則ち一句古今に超え、禪徒萬機を息む。」曰く、「又恁麼にし去るや。」問ふ、「如何なるか是れ梨洲の境。」曰く、「猿は古木に啼き、月は高峰を照す。」問ふ、「如何なるか是れ境中の人。」曰く、㊅「匙挑すれども上らず。」問ふ、「人境已に師の指示を豪る、向上宗乘の事、若何ん。」曰く、「且く㊆驢年を待て。」四衆拭目傾耳す。

空叟印㊇禪師、育王に詣る、時に佛照の法席鼎に盛なり、善財を頌するもの累帋なり。空叟云へるあり、㊀「童子纔かに生じて河沙の福聚まる。凜然たる氣宇王の如し。覺城の東際、智願已に全く彰はる。展轉知識に參尋して、寸步を移さず。南方に歷遍す、無窮の事、風高く月冷かに、煙水渺として茫々たり。一聲彈指の處、毗盧の㊈樓閣門戸盡く開張す。塵々頓に現じ、法々圓常す。都て是れ夢中の境界、惺々の後滿面の慚惶。歸り來つて也重ねて摩頂に遭ふ。雪上に更に霜を加ふ。」衆之れを推す。後空叟の道、益々聞著し、亦育王に住す。

浙翁佛心禪師云く、㊉「空東山余才茂㊋借脚に答ふるの書は、眞に閻老子、殿前一本の赦書なり、今の諸方、道眼若何を知らず、果して能く、此の書を受持せば、則ち他日大いに得力の處あらん。」書に云く、「空は本巖穴の閒人、今長老と作るといへども、只だ是れ前日の空上座のみ。常住の有無一に知事に付す。豈に敢へて私に涉らんや。常住を盜用して、好を貴人に結び、或は用ひて俗家に資給し、或は用ひて知己に接陪す。㊌今にして帋角披毛し、負ふ所を償ふ者は、皆是れ等の人なり。先佛の明言懼れざるべけんや。願はくは、公我を此輩の中に置くことなかれ。則ち公の帝鄉に入り、㊍好事を求む、前途未だ量り易からざるなり。耳秋に鼎盛或は匡鼎來等あり。

㊀善財童子五十三員の善知識に參す、寂後に彌勒の樓閣に至る、彈指一聲樓閣盡く開く事は華嚴出づ、また文殊指南圖贊あり。

㊈樓閣開張し善財入り已つて閣門又閉づ、百千萬億の樓閣を見るに、一一樓閣の內に一彌勒あり、諸眷族を領し一善財を併せて立つ。

㊉空東山は晦堂心に嗣ぐ、黃龍派なり。

㊋借脚は金を借るなり、脚は要脚の脚にて金子を云ふ、秀才の余才茂より借金を賴みし返詞ならん。

㊌今にしては「追付け」なり、牛に生れかはるを帋角披毛と云ふ。

㊁枯禪自鏡禪師は密庵に嗣ぐ。

㊄高原泉禪師は退庵奇に嗣ぐ、奇は別峯に嗣ぐ、峯は華藏民に嗣ぐ、民は圓悟に嗣ぐ。

㊅匙は「さじ」なり、さじにて挑げ上ぐるなり。

㊆驢の千支の來るを待て、「をとつひ」來いと云ふ如し。

㊇空叟宗印禪師は拙庵に嗣ぐ、庵は大惠に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。

鼎は「マサニ」と讀むべし、眷

に逆ふの言、以つて如何んとなす、」と。佛心毎に、此れを以つて人に擧示す。璨隱山もまた云ふ、「常住の金穀、供衆を除く外、幾んど鴆毒の如し。住持の人と、其の出入を司どるものと、穢かに霑着せば、則ち通身潰爛せん。律部に之れを載すること詳かなり。古人の錢を將ふる、庫下に就て、生畫を㋓回ふて、藥を煎ず。蓋し見るべきなり。今の方丈に踞るもの、特衆人鉢盂中の物を捨つて、以つて口腹を恣にするのみに非らず、且つ將に以つて自己に追倍せんとす。㋔泛人の情に非らずや。又其の甚しきときは、則ち剜り去つて珍奇を授買し、廣く人情を作し、大刹に遷らんことを冀ふ。只だ恐らくは、他日鐵面閻老子、與めに計算せんかな、」と。因つて併せて之れを錄す。

臨安府淨慈の退谷雲㋕禪師、初め鐵庵一大禪會中に在つて侍者となりて、其の開堂に値ふ、㋖「國師三喚侍者」を問ふとき、谷手を以つて其の口を揜ふ。又問ふ、「侍者三應す、又作麼生。」谷拂袖して徑ちに出づ。後に佛照の印可を得たり。㋗且つ謂ふ、「其の機語雪堂の行の如し」と。旨を得て、明の青王に住するに及び、時に佛照東庵に居る、父子相從ふの樂み、昔より未だあらざるなり。退谷は福州閩清の黃氏に生る。

寂照明首座、孤鳳超絕、生緣は福州の長樂なり、多く宗匠に見ゆ。嘗つて頌あり、曰く、「大事未だ明かならずんば考妣を喪するが如し。既に明かなれば雪上又霜を加ふ。曾つて三峽猿啼の苦を聞いて、鐵作の心肝も也斷腸。」晚に浙より閩に歸り、㋘漏澤園に幹す。頌に曰く、「劍刃に身を翻すもの能く幾くかある。端なく平地に死人多し。從頭より喚起して重ねて烹過す。未だ免れず依然として他を埋沒するを、」と。其の人となりを見るべし。出世を肯んぜず、白雲古寺の閑房の中に終老す。樞相鄭公性之、尚書陳公葬、私第に居りし時、嘗つて道を問ふ。㋙瑩雲臥謂ふ、「臨卭の復首座嘗つて尊宿に見え來る、演祖待するに父執を以つてす。始終一節、亦以つて懿を縮林に增すに足れり。豈に特り雄席に高踞して、然る後榮とせんや、吾れ寂照に於いても亦云ふ。」

瀾翁佛心禪師雙徑の法席、人物林立、嘗つて膝を撫して云く、「儞ぢ這裡に向つて轉語を下し得ば、一夏を空過せず、」と。覿面相呈して、更に回互なしと云ふものあり。天下の人を疑殺すと云ふあり。皆叱せらる。謂ふ「口快を趁ふべからず」と。佛智老人時に侍旁にあり、緘默するのみ、老人後爲めに拈香して云く、「千鈞弩に上る。當時㋚遂天の索價、一言に道ひ盡す。貼地に相酬ゆべからず。只だ今驀路に相逢ふ。諱むこと得べからず。避くるに亦由なし。禮拜燒香、錯を以つて錯に就く。何が故ぞ、覆水收め難し。」又云ふ、「大脫空を說き、無轉知を用ひ、當時面前に打向して過ぐ。驀に手を以つて一畫せられて、三十年惟

㋐好事は試驗及第なり。
㋒回は買なり。
㋔泛凡音同じ、凡人の意。
㋕退谷義雲禪師は佛照德光に嗣ぐ。
㋖雨陽忠國師三たび侍者を喚ぶ、侍者三たび應諾す、國師云く、將に謂へり喜れ汝に事責すと、元來却つて拔我れに事責す。
㋗且つ謂は佛照和尚の言なり、雪堂行は佛眼の法嗣なり。
㋘漏澤園は墓所の名也。
㋙雲臥の瑩は大惠法嗣なり、復首座の紀傳は景祐野錄に出づ、復首座は白雲の友なりしを以て、五祖法演は父執を以て之に事へしなり。
㋚遂天の索價は、大なる掛け直の意、貼地に相酬は大地程の仕拂はいけぬ。

ゆるも追ふべからず。恨み消すべからず。曲は直すべからず。只だ今白浪堆中、我が遮の一鍬。」香を挿んで云く、「怪しむ莫れ拈出するを。」大宗師家、一絲毫を拈出して、四世界を牽動す。更に一絲毫の踈漏の處なし。此の語皆是れ相見の時の話、入道の時の因緣なり。

泉州法石の隱山璨禪師、上堂に云く、「德山の棒雨點の如く、臨濟の喝雷奔に似たり。隱山當時若し見ば、一時に三門を趁ひ出さん。什麼として此の如くなる。門に當つて荊棘を栽うるを用ひず。後代の兒孫、衣を惹着す。」佛涅槃に云く、「我が佛もと降生せず。今日何ぞ曾て入滅せん。若し生に非らず滅に非らずと道ふも、也是れ眼中に屑を着く。汝諸人瞥すや瞥せずや。畢竟今朝を喚んで甚んの時節と作さん。一度風來つて一度寒し、一回水を飲んで一回噎ぶ。請ふ看よ陌上桃花の紅なるを。盡く是れ離人眼中の血。」垂示此に類す。隱山は泉の晉江の人、性褊躁にして貶剝を好む、自ら叢林の一害と謂ふ。下生に瑞世し、凉峰の空退庵に嗣ぐ。此庵は乃ち其の大父なり。

高原泉㊃禪師梨洲に住す、荒陋寂寥なり、無準首座と爲り、荊叟維那と爲り、雙杉會下にあり。原夜坐に、㋐「江月照して松風吹く、永夜の清宵何の所爲」と擧す。荊叟曰く、「覷着せば氷河連底の氷。」雙杉曰く、「牽き來つて好し頂門の槌を與ふるに。」原默然たり。壯歲の時、已に奇退庵の許與を得たり。

丞相蔣公芾、建昌に居る時、莫齋居士と號す。屢々光孝寺に詣り、道を璨隱山に問ふ。狗子無佛

㊃高泉の法系前出。
㋐證道歌の語。

性の話を擧するを聞いて、下語せんと擬し、喝住せらる。偈を呈して曰く、「眼前一座の鐵壁、天を拄へ地を拄へて黑漆、今朝瓦解氷消す、一段の孤明歷々たり」と。又喝出せらる。後に請益して示しを得、清素侍者兜率の悅に語げ、能く佛に入るべきも、魔に入る能はざるを以つて、渙然として氷釋す。偈を述べて曰く、「襴衫を翻着し、靴を倒着し、橫拈竪放、總に他に由る。魔に入り佛に入るは尋常の事、一段の風流當家に出づ。」又曰く、「婬坊酒肆經過に飽く。一曲尊前㊄囉哩囉。鼓を打つて看來るも君會せず。大家手を把つて高坡に上る。」隱山深く之を肯ふ。卽ち陞堂して、衆に告ぐ、「隱山鼓を撾つて證明を爲す。千古叢林の一盛事、」の句あり。

天目禮㋑禪師、鄮峯に在りし時、佛照の開室に擧す。「風動幡動者の僧如何ん。」答へて曰く、「物主を見て㋒眼卓竪す。」照曰く、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、甚れの處に祖師を見ん。」答へて曰く、「腦蓋を揭翻す。」空印叟後へに隨つて入室す、照復た前話を擧す。叟答へて曰く、「白浪を貪觀して、手中の橈を失却す。」照曰く、「老々大々、者箇の語話を作す、儞看よ、適來の後生子、此の一轉語を下せるを。」天目佛照の會中に在つて依止すること三年、因みに書狀の職を受けず、靈巖を過ぐる時、癡鈍も亦前話を擧す。答ふること前の如し。鈍曰く、「此の語只だ育王の會中にのみ用ふるを得、我が者裡、飯水も也未だし、儞に到つて喫せしめざること在り、」と。烏虖、二大老の人を接する此の

㊄囉哩囉は歌と歌との間に挾む樂聲なり。
㋑天目禮禪師は松源に嗣法す。
㋒眼卓竪又卓柴に作る、眼の突き立つなり。

如し、宜しく萬世の師と爲すべきなり。

少室の㋺睦禪師、瑞岩に在り、偶々鳳山の礪老、松源の像を持して贊を請ふ。贊に曰く、「口を開くは舌頭上に在らず。話墮せり。大力量の人脚を擡げ起さざる。未だ分外と爲さず。平生者の些兒を用ひて、却つて鳳山に捉敗せらる。瑞岩與麼の贊揚、也是れ賊を送つて界に入る、」と。少室の宗眼端正なること此に類す。人に示すに徒に事に語言の末に從ふに非ざるなり。

本眞書記㋻は、福唐の朱氏の子なり。儒を棄て資福山主に依つて祝髮し、嶺を出でて遍く叢席に參す。特立の操行あり、晩に天童の慈航の印記を得、卽ち里の松溪に歸り、庵を卓して居す。己に奉ること甚だ約にして、食僅かに足るのみ。嵓谷幽遠、水木淸華、眇然として俗を絕し世を離る、將に身を終へんとするが如し。偈あり曰く、「茆庵ト築して溪南に向ふ。踪跡唯だ饒す野鹿の叅ずるを。昨夜滿簷霜月白し。最だ憐む松葉の落ちて鬖々たるを。」又曰く、「高く棲拂と筇枝とを懸けて、覿面相呈するも早く辭を費す。此の外更に親切の句なし。知らず若箇か尋思を解す。」豈に其の志を高尙にするに非ずや。或は議す、其の後學を激發するを得ざるを不幸となすと。予謂ふ、棲拂筇枝を以つて人に示す、止だ此れ足る。又何ぞ必ず別に語言を求めんや。

秀嵓瑞禪師㋽曰く、大慧和尚擧す、趙州一日佛殿上に在り、文遠の佛を禮するを見て、拄杖を以つて

㋺少室の睦は松源に嗣法す。
㋻本眞書記は天童の慈航に嗣ぐ、黃龍派。
㋽秀岩瑞は光佛曙に嗣ぐ、大慧下。

打つこと一下す。遠云く、「佛を禮するも也是れ好事。」州云ふ、「好事も無きに如かず。」頌して曰く、「文遠の脩行着空ならず。時々に瞻禮す紫金の容、趙州の拄杖然く短しと雖も、腦後の圓光又一重。」大圓㋾見て曰く、「妙喜の作用、嵓頭死心に減せず、肯へて來つて商榷す。謂つべし光前絕後なりと。今爲めに末句を改む、必ず來らん、但だ恐らくは相見を得ざるを」と。改めて「華山の千萬重を劃破す。」と云ふ。大慧之れを聞いて、果して詣り見えんと欲す。而して大圓已に遷化す。只だ其の錄に題して云く、「七佛の命脈、諸祖の眼睛、但だ此の錄を看ば、一切現成、」と。二老相敬すること此の如し。今復た其の人を見るなし、氣燄猶ほ人に迫る。烏虖、二大老は故より復た見るなし、秀巖も亦已む。因つて錄して、之れを識す。能く筆語の外に於いて、隻眼を着得する有らば、庶はくは三人龜を證するを免れん。

㋾當時大圓と稱するもの多し、此れ蓋し大潙大圓智禪師ならん、明の昌國の人、黃龍派。

國譯枯崖和尚漫錄卷の上　終

國譯枯崖和尚漫錄卷の中

㋑祖賢首座は、撫の金溪の人、人品高妙なり、法を癡鈍に得、久しく閩に留る。南郷に歸らんと欲し、義江に至り、感あつて反る。㋺綾牒を焚いて、歸竟嘉と、茅を編んで、莆の土囊山に隱る。嘉既に福の帥の長生の招きに赴きしかば、卽ち黃山の篠塘に遷り、自ら土室を杼る。僅かに膝を容るるのみ、扁して樂此と曰ふ。遠近の者之れを聞いて、始めて供ずるに粟を以つてす。居ること二十年、一日の如し。郡侯曾公用虎、其風を高しとし、囊山の慈壽、席を虛しうするを以つて、禮請すれども赴かず、嘗つて十不去を譔して、以つて意を見す。末章に云ふ、「十不去。止だ此便ち諸佛の土なり。假饒天子の詔書來るも、㋩向道す事故を生ずるを須ひざれ。」復齋陳公宓、與に持敬の二字を論ず。答へて云く、「敬と云つて足れり、何ぞ持を用ふるを爲ん」と。遷化の後、玉堂林公希逸、㋥祭るに文を以つてす。略に曰く、「六經の外、此の良友を得。余近ごろ方劉の諸公と、石室に遊び、晚に其の故廬に造る。月色淸朗、松聲蕭騷たり。慨然として其の高標逸致を想見す、」と。

㋑圓悟・此庵先・或庵禮・癡鈍顚・祖賢首座。
㋺綾牒は僧侶の度牒なり。
㋩向道とは「相手に言ふ」の意なり、向つて道ふと讀むも可なり。
㋥希逸の跋文に墓に銘せりと云ふ、蓋し親交あるなり。

㋭鐵鞭韶禪師は直諒にして㋬窺密せず、福州鰥亭の人なり。溫陵の光孝の請に赴く。開堂祝聖拈香し罷んで、乃ち云く、「什麼を喚んで第一義と作す、旁らに甘はざる者有る莫きや、出で來つて道へ、看ん、」と。時に僧あり出でゝ問ふ。㋮「頂顙摩醯の眼卓竪す。」拄杖を拈じて、卓すること一下して云く、「住めよ住めよ。今日の開堂尋常の佛事に比せず。設し問答して彌勒の下生に到るも、㋯鈎鎖連環す。水を盛つて漏さゞるも、也只だ是れ粥飯の氣を鼓す。自己に於いて了に沒交涉なり。所以に道ふ、問は答處に在らず、答は問處にあらず。問答交馳して靑天に霹靂を轟かすが如く、看る者貶眼を容さゞるも、那んぞ更に言中に向つて旨を定め、句下に宗を明むるに堪へん。大いに木に緣つて魚を求め、株を守つて兎を待つに似たり。殊に知らず、我が宗に語句なし、亦一法の人に與ふるなし。這裡に徹し去らば、皇恩佛恩一時に報畢せん。其れ或は未だ然らずんば、更に爲めに錦上に花を添へん、」と。復た拄杖を卓して下座す。八會の錄あり、世に行はる。㋰聲を審かにして音を知り、音を審かにして樂を知るべし。

覺庵趙贊府、釋書を看て省あり、官を休めて翠微に依り、乞ふて惟覺と名づけ、冠を裂いて薙髮

㋭圓悟・大慧・無用全・鐵鞭韶禪師。
㋬窺密は蓋し人の秘密を窺ふなり。
㋮頂顙は「ひたひ」なり、摩醯は修羅の一、眼は頂顙に卓竪す。
㋯鈎鎖連環は「ひつかかり」「つなぎ」が出來てぐるぐるまはるなり。
㋰聲を審かにす云云は、語錄によつて鐵鞭の働きを知るの意なり。

し、毗尼を具す。後居山の偈に曰く、「氣衰へ力憊れて言ふに堪へず。㊇得意濃かなる時、便ち肩を息へよ。俗を捨て官を捨て、兼ねて欲を捨て、人に由り命に由り、更に天に由る。飢ゑ來れば黄粮の飯を爛煮し、困じて後、衣に和して白日に眠る。山鳥一聲驚いて夢覺む。㊈知らず今夕は是れ何れの年ぞ。」謂ふべし、㋐幽人貞吉、中自ら亂れざるなりと。

㋐破庵先禪師嘗つて曰く、今時の兄弟は、工夫を做すのみにして、性を索めず、所以に教驗を見ず。我れ行脚の時、密庵衢州の烏巨山に住す、我れ彼の中に在つて知客に充てらる。職を解き了つて、往いて水庵に雙林に見ゆ。兩廊長し、我れ毎夜睡らず、東廊より西廊に到る、話頭を提起して工夫を做す。行くこと兩三匝し了つて、堂中に歸つて打一着するに、上下聞の兄弟、一に㋑爛冬瓜の似くに相似たり。覻了つて自ら思量す。道く「我れ若し便を着けずんば、也者の一堂の爛冬瓜に似て、什麼の㋒椀子を討ねんや」と。我れ那の時に在つて、些の工夫を做し得て、室中にも亦口を開くを得。只だ是れ命根未だ斷たず、心下畢竟に穩かならず、遂に起單して平江に至つて、萬壽の僧堂に歇ふ。那の時、是の燈止庵萬壽に住す、是れ㋓無鼻孔の長老なり。粥し罷んで、鼓を打つて入室す。我れ心裡に他れを欺いて去らず、同行あり去つて入室し了つて、却り來つて我れに問ふ。「備去つて入室するや也未だしや。」我れ同行を謾つて云く、「我れ去つて入室し了る。」又却つてみづから思量して道ふ。「他れは是れ我が同行なり、我れ他れを謾るは心下穩當ならず、漸く川に歸り去らんことを要す。却た是れ如何ん」と。此の如く思量して、心中躁悶す。遂に行いて、僧堂の後に入り去つて、忽然頭を擧げて、照堂の二字を見て、從前の疑情頓に釋く。迦遲して蔣山に上り、再び密庵に見ゆ。室中契合せざるなし。破庵の參禪、㋔韓信が軍の、孤り水上に在るが如く、必死して二志なし、勝つ所以なり。

㋕秀巖瑞禪師、上堂に擧す。馬祖の日面月面、後來水庵頌して云ふ、「日面月面、胡來れば漢現ず。胡漢不來、清光一片」と。拈じて云く、「馬大師を見んことは未可なり。」秀巖也頌あり、「日面月面、磚頭瓦片、淨瓶を踢倒し、門扇を撼動す。」老宿一夏、僧と說話せざるの語を擧して、拈じて云く、「者の僧は正に是れ㋖飯籮裡に餓死するの漢。老宿甚の死急を着く。恁麼の見解、喚び來つて痛打することを一頓して、三門を趁ひ出さん。甚として此の如くなる。人の爲めにしては須らく徹するをなすべし。人を殺しては須らく血を見るべし。」烏庫㋗拙庵の爲めに拈出する底は、木庵の處より得來る。語は叢林にあり、話は人口にあり、然りと雖も、秀巖を見んと要せば、猶ほ海を隔つるあり。

江西の㋘雲臥瑩庵主曰く、徑山の謙首座、建陽より歸り、茅を仙洲山に結ぶ。其風を聞くもの、悅んで之に歸す。㋙曾侍郎天游、呂舍人居仁、劉

㋗是れを退一歩の方と云ふ。
㋘山中曆日無し、寒盡きて年を知らず。
㋙周易履の卦九二の爻。
㋚圓悟・應庵・密庵・破庵祖先禪師。
㋛腐つた冬瓜の如くごろごろ落ちて居る。
㋜めしも食はれないの意なり。
㋝無鼻孔の長老は、見地明白の長老の意。

㋞韓信背水の陣をもつて趙の軍を破る、人を死地に置いて活を求むるなり。
㋟秀巖瑞は光佛照に嗣ぐ、前出。
㋠めし櫃の中で餓死するなり。
㋡拙庵は秀巖の師、佛照なり。
㋢雲臥瑩は大慧に嗣ぐ、雲臥紀談、羅湖野錄の著あり。

寶學彥脩、朱提刑元晦の如き、書牘を以つて道を問ひ、時に山中に至る。㋓元晦に答ふる書有り、其略に曰く、「十二時の中、事ある時は事に隨ひ、變に應じ、無事の時は、便ち頭を回して、這の一念子上に向つて、『狗子に還つて佛性ありや也無きや、趙州云く、無。』と云ふを提撕し、這の話頭を將つて、只管㋒提撕して、思量すべからず。穿鑿すべからず。知見を生すべからず。强ひて承當すべからず。眼を合して黃河を越るが如く、越り得過ぐると越り過ぎざるとを問ふことなかれ。十二分の氣力を盡して、打一越せよ。若し眞箇に越り得ば、這の一越便ち㋔百了千當せん。若し越つて未だ過ぎずんば、但だ越ることを管して、得失を論ずるなかれ。危亡を顧みるなかれ。勇猛向前して更に擬議するを休めよ。若し遲疑動念せば、便ち㋕沒交涉なり、」と。謙嘗つて㋖劉寶學の請に從ひて、建の開善に住す、向に雲臥と同じく、大慧に侍すること最も久し。㋗劉朔齋云く、「文公朱夫子、初め道を延平に問ふ、篋中に携ふる處、惟だ孟子一冊、大慧の語錄一部のみ、」と。

臨安府淨慈の㋘北礀簡禪師、㋙茶陵の郁を贊して云く、「步を竿頭に進めて斷橋に顯ず、太虛凸き處水天回む。古今喫顛人多少ぞ。閻梨の這の一交に似ず。」㋚靈照女を贊して云く、「屋裡に機を橫へて老爺に抗す。門前に手を斂めて丹霞を揖す。㋛娘生の爺は好兒女を養ふ。也許多の㋜無賴査あり。」叢林多く之を誦す。㋝淳祐丙午三月晦日、偈を書して云く、「平生伎倆なし。赤脚須彌を走る。一步は一步より闊く、三更鐵圍を過ぐ、」と。且つ曰く、「翌日行くべし」と。期に至つて趺坐して滅す。中書舍人程公許、奠るに文を以てす。略に曰く、「南山の頂に踞して、綸を垂るゝこと千尺、湖水渺瀰たり。魚寒うして食はず。病を示して期に及び、體癯せて神逸なり。維れ莫の春、參徒雲の如く集る。師顧みて笑ふ。吾れ歸るに日ありと。四句の偈を題す。玆れを絕筆となす。孟夏の朔に及び、泊然として入寂す。師昔し證する處、もと自ら緜密。末後の一着乃ち眞實を見る、」と。是れ實錄なり。噫、老礀神情秀特にして、博學强記なり、而して喜んで文を爲り、法を東庵の佛照に得たり。昔し㋞甘露滅瑩仲溫、皆見地明白なり、其れ文字を以つて之を多とすべけんや。老礀委順の時、尤も殊特なることこの如し。

㋓曾開、字は天游、官は禮部侍郎に至る、呂本中字は居仁、江西傳衣詩派圖を作り、黃山谷を推して詩祖となす。

㋔朱熹字は元晦、宋一代の名儒なり。

㋒時の夜の提撕の如く大切に持つを提撕と云ふ、提も撕もひつさぐるなり。

㋕百了千當は何も彼も一時に埒明くなり。

㋖沒交涉は埒あかぬなり。

㋗劉寶學彥脩は、大慧禪師に參じて柏樹子の話を明得す。

㋘朔齋は疑らくは劉謹ならん、三教平心論を著す。

㋙北礀居簡禪師は光佛照に嗣ぐ、大慧下。

㋚茶陵郁山主、曾て蓼驢に騎つて溪橋を過ぐ、喫顛して水に落ち卽ち大悟す。交は顛と同じ、ひつくりかへるなり。

㋛靈照女は龐居士の女なり、老爺は龐居士なり、丹霞子淳禪師龐居士を訪ふ、途に靈照に逢ふて居士在りや否やを問ふ。靈照菜籃を放下して手を斂めて立つ、霞又問ふ、居士在りや否や、靈照籃を提げて便ち去る。

㋜娘生とは母から生んで貰ふた儘を謂ふ、所謂赤子の心を失はざると同意なり。

㋝無賴査は俗語解に小兒の詐り多きを無賴と云ふ、査は煎藥の滓也とあり。

㋝淳祐丙午は本朝寬元四年にして東福の創立より四年目なり。

㋞甘露滅は洪覺範、瑩仲溫は雲臥庵主、二人當時其見地の明白を稱す、後來慶堂出づるに及び覺範の面皮を劈破す。

㋟眞德秀は西山先生と稱す。

㋠甲子乙丑は嘉泰四五年頃なり。

參預眞文忠公㋐德秀、雙徑の崧少林と里閈を同じうす。相與に講道、翰帖の往來、歲として無きはなし。一帖に云く、㋒「甲子乙丑年間、延平にあり。嘗つて夢に一處に至る。十六羅漢あり、其中の相好端嚴なるもの、忽ち目を開き、相視て微笑して曰く、大堅固力を得たりと。俄かにして天樂空に浮んで至る、音節の妙、絕だ世間に異なり。遂に寤む。今將んど三十載なり。佩服して忘れず。近ごろ夢筆に於いて、閑山一片を得。小庵を其の上に築き、大堅固力を以つて、銘と爲さんと欲す。吾が師の一偈を得て、蒙滯を開發せんと擬す。㋓等覺も亦舊遊なり。其れ能く忘情せんや、」と。余此帖を徑山の三塔庵に見る。烏虖、西山謂つべし三十年一夢にして覺むと。大堅固力を銘せんと欲す、寤語して作麼かせん、何ぞ必ずしも、佛行重ねて說偈すと言はん。

慶元府小靈隱の㋔柏巖凝禪師は、性㋕簡亢にして交接する所なし、乃ち息庵の法嗣なり。金文に住するの日、提綱に云く、「盡大地是れ箇の住處、强ひて安排するを用ひず。盡大地是れ箇の當人、何ぞ影迹を求むるを須ひん。東邊に住しては、喚んで東邊の長老となし、西邊に住すれば、喚んで西邊の長老となす。翻して來り覆し去り、橫倒堅直、一月の間、許多の㋖不唧噜を做し出す。然りと雖も爾凝上座を見んと要せば、又却つて㋗那邊にあつて、更に那邊ぞ。爾見んと要せずんば、又却つて爾諸

㋓等覺は寺の名、佛行曾て業を此の寺に受く、故に舊遊と云ふなり、寺は夢筆峰にあり。
㋔柏巖凝は息庵親に嗣ぐ、親は蓬庵裕に嗣ぐ、裕は圓悟に嗣ぐ。
㋕簡は脫略なり、亢は不群なり。
㋖唧噜の反は秀なり、不唧噜は愚なるまれなり。
㋗此處疑ふらくは原本に脫字あらん。

人の眉毛眼睫上にあり。是くの如くにして住し、是くの如くにして說く。一箇の舌頭を分つて兩橛となす。且く道へ、那箇の舌頭ぞ。左右を顧みて云く、了、」と。大抵步驟の熟すること、雲を爾むの㋘汗血の如く、塞態なきなり。

㋙秀巖瑞禪師、無用松源と閩に入り、乾元の木庵に見ゆ。庵問ふ、「近離甚の處ぞ。」曰く、「鼓山。」曰く、「恰も鼓山の信を得んと欲す、將ち得來るや。」巖、兩手を展く。庵曰く、「參堂し去れ。」其れをして庫務を執らしむ。亦勞を憚らず、庵陰かに之れを奇とす。衣を洗ふの次、庵曰く、「什麼を作す。」巖衣を提起す。庵曰く、「答話も也會せず。」巖擬議す、庵便ち掌し、忽ち省發す。後明の育王に住し、佛照の嗣となる。庵之れを聞き、寄するに偈を以つてして曰く、

㋚「媽々年來齒髮疎なり。心々只だ是れ奴々を念ふ。一從あれ㋛潘郎に嫁與して後、記得す從前梳洗無きを、」と。余昔し石門會和尚の法席に九峰に預つて、其の言を聞くこと此の如し。

㋜鐵鞭韶禪師、剛正孤硬、大法を以つて重任となす。吳門の承天に住す、廣く僧堂を架して、以つて衲子を延く。室中狗子佛性の話を擧して之を驗す、契ふことあるもの少し。元雙杉時に會中にあり、偶を投じて曰く、「狗子無佛性、一正一切正、寰中は天子の勅、塞外は將軍の令。」鐵鞭之を頷ふ。

㋘汗血は駿馬なり、塞態は疲憊の體なり。
㋙瑞は拙庵に嗣ぐ、前出。
㋚媽媽は母なり、奴奴は女子なり。
㋛潘安仁は美男子なり、晉時代の人。
㋜世系上卷に出づ、密庵に嗣ぐ。

㋑笑庵悟禪師は周氏、蘇の常熟に居る。久しく才無等に侍し、復た松源と同じく密庵を扣く。密庵曰く、「爾が平生の見處試みに我れに語げ來れ、隨つて所見を通ず。」曰く、「未在。」「參堂し去れ。」笑庵後に僧堂中に於いて、燈を剔るを見て省悟す。室中、横機讓る處なし。德山門に入れば便ち棒すを頭して曰く、「嶽を倒し湫を傾けて與麼に來る。小根の魔子謾に疑猜す。㋺神駒一躍三千界、空しく說く門前の下馬臺。」密庵聞いて喜ぶ。昔し松源衆に在る時、世事に疎なり、笑庵は微細皆責に任ず。源の靈隱に住するに及び、庵は里の靈巖にあり、舟を具して杭に抵つて之を訪ふ。門に到り、三日にして方に相見を得、慚色なし。後に源法華の招に赴く。又靈隱を以つて、力め舉げて㋩自ら代らしむ。前輩の見る處、流俗に異なり、今人の一語或は訛すれば、終身恨と爲すものと大いに逕庭あるなり。併せて此を書して、後來の龜鑑となす。

㋥笑翁堪禪師、門風壁立にして、氣諸方を蓋ふ。初め台の報恩に住す、台舊律宗なし。師、郡守齊公碩と議して、十寺を合せて一となし、壇を築きて㋭南山開遮持犯の法を唱へ、後學を風厲す。平江の虎丘に遷るに及び、閩の帥王公居安、復た雪峰を以つて之を招ぐ。且つ書を廟堂に貽つて謂ふ。「南方の佛法競はず、須らく賴ひに作興すべし」と。旨を得て乃ち行く。未だ幾くならず、詔して杭の靈隱に住す。忽ち僧あり、釋迦出山の像を持して贊を請ふ、卽ち書して云く、「半夜逾城、全く肯重なし。端坐六年、久靜動を思ふ。衲は寒雲に卷いて雪山を下る。人と相見するとき又何の顏ぞ。」

㋑笑庵は密庵に嗣ぐ、應庵下。
㋺二句三級浪高うして魚龍と化す、癡人猶酌む野塘水より轉化す。
㋩松源が自分の代りに笑庵を擧げしなり。
㋥全無用に嗣ぐ、前出、大慧下。
㋭開遮持犯は律儀なり、南山宣律師の戒法を唱ふる也。

㋬松源岳禪師虎丘より靈隱に遷る、老いて㋮聵す、叢林呼で老聵翁となす。傳ふる所の白雲端和尚の法衣を以て、亟に人に付せんと欲す。三轉語を垂れて云く、「口を開くは舌頭上に在らず。」「大力量の人什麼として脚を擡げ起さゞる。」「大力量の人什麼として脚根下㋯紅線不斷なる。」而も契ふ者なし。衣を塔下に留めて曰く、「三十年後我家の子孫あつて、來つて此山に住せん、此を以て之に付せよ」と、遂に寂を告ぐ。㋰石溪後亦虎丘より旨を奉じて徑に至る。衣を拈じて云く、「大庾嶺頭。黃梅夜半。之を爭ふて足らず。之を讓つて餘あり。而今公案現成。免れず錯を將て錯に就く。衣を捧げ起して云ふ。敢て問ふ此衣、白雲傳へ來つて松源留下す。什麼邊の事を明むる。春風に腦亂して卒に未だ休せず」と。今佛海雙徑の傳衣庵に留む、其復待つ所あるか。

㋱絕照鑒禪師、初め里の乾元に住す。佛生日の上堂に云く、㋳「老鼠三寸の光なしと雖も、天に徧く地に徧く灾殃を起す。命根落ちて乾元が手に在り、當頭一杓の湯を消得す、」と。是れに由つて名叢林に播く。後に鼓山に遷る。學者㋷瀾趨雲萃す。晚年玉几に論薦す。惜し

㋬松源密庵に嗣ぐ、上卷前出。
㋮聵は聾に近く耳甚だ遠きなり。
㋯天上の仙人、男女の足に紅線を結びつけて夫婦となす、因緣熟すれば如何んともし難きなり。
㋰石溪は佛海心月禪師なり。
㋱絕照鑒禪師は、訥庵仁に嗣ぐ、仁は鈍庵顥に嗣ぐ、顥は此庵淨に嗣ぐ、淨は大慧に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。
㋳老鼠は天を指し地を指す像を指す、誕生佛なり。
㋷波瀾の奔るが如く浮靈の集まるが如し。

いかな命將に下らんとして寂す。絕照は福州の人なり。訥庵に嗣ぐ。

肯庵圓悟禪師は、建寧の人、天恣閑暇なり。武夷山に居ること十年に餘る、因に牛歌を聽いて悟道す。嘗つて偈あり云ふ、「山中住して識らず、張三㋐と李四と。只だ松栗を收めて齋粮に當つ。靜かに聽く嶺猿の古樹に啼くを、」と。福唐の大目禪苑に瑞世す。嘗つて儒學を晦庵朱文公より授けらる、師と辛公棄疾と同門の友たり、因つて黃檗を以つて之れを延く。入寺に其の行李數十檐ありと譏するものあり、辛公之を聞いて蹙然として樂まず、後に都運黃公瓊を過ぎ、同じく之を訪ふ。且つ曰く、「有道の士、三衣の外長物なし、多々益々辦ずるは道人の累爲らずや」と。庵笑つて答へず、徐ろに共に諸老の手帖を觀る、因つて盡く籠篋を揭げて之れに示す。皆古德の墨蹟㋑紫陽の書翰なり、辛慚色ありきと。

寒齋高士林公公遇字は養正、官を棄てゝ經世の意なし、惟だ山林に大法を負ふ者と此の道を講明す。竹溪の林公希逸に寄するに云ふ、「此の事何ぞ人に向つて說くことを須ひん、耳あつて聾の如きは眞の秘訣。此事何ぞ人に向つて語ることを須ひん、口あり瘖の如きは眞の活句。盲聾瘖啞是れ仙方、箇の中別に長生の路あり。長生の路、また朝なくまた暮なし、また今なくまた古なし、また萬象と森羅となし、また山河と國土となし。長生の路何の許にかある。㋒丹成を待たずして自ら輕舉す。只だ目前にあつて尋處なし。尋ねんと要せば、只だ尋ぬる無きところに在り」と。寒齋が著述する所の心鑑錄、吾教に補あり。後村劉公其の墓に銘して云く、「猗公の立つ所、天壤と俱にし、㋓畫前に起り、性初に復す。以つて釋とせんか、則ち實を踐む、以つて老とせんか、虛に放ならず。千古の秘寶を探つて獨得し、一世の苦淡を叢めて以つて自ら娛む。余の述ぶる處は迹の區々たるのみ。君の心の如きは擬摹すべからず。有之を求めんと欲せば、君の書に於てせよ、」と。此れ名言なり。問ふこと勿れ元いに吉し。

㋐張三李四は、三右衞門四郎兵衞なり、又朝三暮四を持ち掛けてもある。

㋑紫陽は朱文公なり。

㋒鍊丹の術の成就を待たずして羽化登仙するなり、輕舉は登仙なり。

㋓東山源禪師、初め痴鈍の室中にあり、如何んか是れ大道の源と擧するを聞いて、一喝を下し、偈を述べて曰く、「大道の源問端を立つ。老魔徹底みづから欺瞞す。誰か知らん家醜遮蔽し難きを。一喝㋔當陽に雷山を破る。」久しく老佛心に徑山に從ひ、閩域を證徹す。閩に歸り、投ずるに偈を以つてして曰く、「腦蓋を揭飜す笑談の間。槃に珠を走し珠槃に走る。一段の風光攔不住。堂々手を擺つて長安を出づ。」時に凌霄會中、人物林の如し。清鐵脚、阡都寺、咸く在り、皆韻を趂ふて之れに餞す。後出世して佛心に嗣ぐ。東山は參與徐公清叟と方外の友たり、公閩に帥たるの日、雪峰を以つて招致す。蘇の虎丘を離れて、建上に至り、光孝に順寂す。悲しいかな。

㋓畫前とは八卦を畫せざる以前を云ふ。

㋔東山は浙翁に嗣ぐ、浙翁は佛照に嗣ぐ、佛照は大惠に嗣ぐ、大惠は圓悟に嗣ぐ。

㋔當陽は「まつかう」の如し、まつ向に一喝を惡雷山を劈くの意。

㋙雙杉元禪師、戒行嚴潔、秀の天寧に住す、小參に、應庵室中に密庵に問ふ。「如何なるか是れ正法眼。」庵云く、㋚破沙盆と云ふを擧して、拈じて云く、「者些の說話、三叉路口多年一條の爛木頭の如く、風吹き日炙り、㋛誰れか敢へて覷着せん。忽ち箇の健兒に駄し將ち去らる。上面に元來官印あり。且く道へ、印文什麼の處に在る。五陵の公子少年の時、得意の春風馬蹄を躍らす。惜ます黃金を彈子と爲すを。海棠花下に黃鸝を打す、」と。薰石田特に之れを稱す。雙杉は福州の福淸の鄭氏に生まる。先に溫蘿庵あり、後に密庵あり、繼いでは遂僻雙杉あり、遂僻は卽ち其の俗門の叔父にして、法門落髮の師、淸如源なるもの、見趣操行尤も卓然たり。鄭氏出す處の尊宿、盛なりと謂つべきかな。

㋜枯禪鏡禪師は淸苦古朴にして、太師史衞王尤も之れを致敬す。初めて接見し、卽ち問うて曰く、㋝「疎山曹家の女の始末如何ん。」枯禪厲聲して曰く、「相公與麼の問、一隻眼を失却す。然らば則ち祖師の垂示得て箋注すべきか。」左右愕然たり、王笑ふのみ。遂に席を進めて徵詰論辯し、夜分に至つて方に散ず。惜むらくは、當時人の與に記錄する無きのみ。枯禪掛搭を求むる者を見る毎に、則ち先づ㋟白領を撤去し、濶袖を剪除せしめて、方に相看を許す。

㋙雙杉は萬庵に嗣ぐ、庵は密庵に嗣ぐ、密庵の師は應庵、應庵の師は虎丘、虎丘の師は圓悟なり。

㋚破沙盆は破れたる擂鉢なり。

㋜枯禪鏡は密庵に嗣ぐ、庵は應庵華に嗣ぐ、華は虎丘隆に嗣ぐ、隆は圓悟に嗣ぐ。

㋝疎山曹て木蛇を僧あり、問ふ手中是れ何んぞ、疎山提起して曰く曹家の女。

㋟白領は汚れ易く、濶袖は切れ易用ふこと多し、故に之を許さざるなり。

㋛鼇峯定禪師は、福の長溪の人なり、嘗つて毗陵の時思庵を過ぎて、無際に依る。開堂に値ふ、擧す、「釋迦彌勒は他の奴、他は是れ阿誰そ。」定曰く、「不會。」又之れを擧示せしとき、又曰く、「不會。」無際揖住して曰く、「一不會二不會。」定失聲答へて曰く、「泥團土塊。」後に永嘉龍翔の文絕象の會中に於いて分座す。無際明の太白にあり、書を貽つて歸を趣す。昔し㋠佛智老師も亦無際に侍す、故に嘗つて之れを言ふ。

安吉州道場別浦舟禪師、老佛心に師事し、後に空叟の嗣となる。佛成道の上堂に云く、「釋迦老子二千年、摩竭陀國にみづから云ふ。明星見る時豁然として悟道すと。胡人は詐り多し。知んぬ、他は是れ實か是れ虛か。後來眞淨道ふ。『今㋡克文比丘あつて、東震旦の中に於いて、赫日見る時また箇の什麼をか悟る』と。關西の人は頭腦なし、爭でか知らん是れ有か是れ無か。㋢川僧口を開いて膽を見る。一句は是れ一句。床を拍つて云く、是れ那の一句ぞ。曾つて巴峽猿啼の苦を經て、三聲を待たざるも也斷腸。又云ふ、百丈三日耳聾、馬祖有過無功。臨濟三たび痛棒に遭ふ。黃檗始めあつて終りなし。虎嵩は棒を行せず、喝を行せず。蛇と成る底は蛇となり、龍と成る底は龍となる。床を拍つて曰く、道ふことを見ずや、鶯は楊柳の岸に遷り、蝶は海棠の風に舞ふ。」見處穩密、拈出して人に示す。㋣春の花を行

㋛鼇峰は無際に嗣ぐ、無際は掛庵に嗣ぐ、庵の師は大惠、惠の師は圓悟なり。

㋠佛智は聞遠谿にして枯崖の師なり、故に老師と云ふ。

㋡克文は眞淨の諱なり。

㋢川僧は四川の僧、別浦自ら云ふ。

㋣綱技に入るの春の如しの語あり、花と花には皆春が入つてゐる。

るが如く、月の水に在るが如く、了に朕迹なし。空叟の門、嶄然として絶出するものなり。老藏云ふ、「別浦嘉定の間、癡絶と並び駈つて先を爭ふ、惟だ壽癡絶に及ばず。烏虖、惜しいかな。」

㊀雙杉元禪師は、乃ち柔萬庵の嗣なり。國史陳公㊁貴謙、弟の參預文定公貴誼と、武康の龍山に於いて、雙杉庵を掬め、こゝに館す。國史公宗鏡を編するに答ふる書に云ふ、「正に㊂台屏に詣つて恭しく問訊を致さんと欲す。藻翰寵臨す。伏して審かにす。深く宗鏡三昧に入つて、辯才機用、無畏をほしいまゝにす。就いて錄する處の㊃數板を掲ぐれば、聯珠貫璧、眞に㊄乳を擇ぶ鵝王の眼腦なり。深く用つて降歎す。但だ恐る日新の證、將に舊習を棄てんとす。此に於いて去取或ば一定せず。多聞强識を啓發し、聖賢の地位を知らしめんと欲するが如し。㊅知力を以つて挾むべきを容さす。此れを用つて㊆致道の具と爲して求めば、入るとして自得の妙に非ざるなし。時を康んじ物を濟ひ、浩然として窮りなし。是れ思ふに佛を用つて眞儒の効と爲すなり。世に見聞に局する者、門戸を主張するものあり。心に是として口に之を非とし、其の詳を得ず。意ふに愚人に在つて、其の自ら欺くを知らず。眞に所謂憐憫すべきもの、㊇此れを觀ば亦解意すべきなり。室中の三轉語は、禪

㊀元雙杉は柔萬庵に嗣ぐ、庵は密庵に嗣ぐ、密庵は瓏庵に嗣ぐ、瓏庵は虎丘に嗣ぐ、丘は圓悟に嗣ぐ。
㊁陳貴謙、官は樞密に至る。
㊂台屏は御屋敷と云ふ如し。
㊃數板は數枚なり、聯珠貫璧は眞珠寶玉を并ぶる如くなり。
㊄乳を擇ぶとは、鵝と云ふ鳥は水中に乳を投ずれば美事に乳だけをすひ取るなり、鵝王乳を喫するの語禪錄に多し。
㊅此事は決して多聞博識の知を以つて到るべきにあらず。
㊆但し大道に至るの道具として、善用するは可なり。
㊇此書物を見れば善くわかる。

和子平生の工夫を窮む。應擧三場の文字の如くに相似たり。日夜を通じて之を爲すも、猶ほ未だ暇あらざるを恐る。豈に是れ難を趍ふて易を捨て、彼れを棄てゝ此を取るを好まんや。蓋し工を專らにして體窮せずんば、未だ大休歇の田地に到らず。徒らに知見解會を成して、自己の眼を障へ、㊈倒行逆施す。前輩言へるあり。若し眞箇に此事を打透せんと要せば、切に㊉此錄を見て、意識を將ち來つて、先行すべからず。未だ擧せざるに便ち會せば、更に疑ふべきなし。佛の方便を失せば、則ち入頭の處なし。之れを利すと曰ふと雖も、其の實は害を爲す。陳操尙書は是れ个の參禪の樣子なり。雲門の敎意に對し、尙ほ自ら口言はんと欲して詞喪し、心緣せんと欲して慮忘すと拈出して、雲門に一期に㊋家財を籍沒し了らるゝ是れなり。今居士法施の大檀越たるを要せば、須らく㊌金圈栗蹂鐵酸餡子なるべし。事を用ひて、人を引いて草窠に入り、反つて其の粘縛を增す勿れ。如何ん。筆に因つて㊍切怛す。稍暇あらば當に請ふ㊎拄杖以つて多口の罪を謝せん。」國史公、此に因つて開悟す。

㊏西山亮禪師、趙州婆子を勘するを頌して云く、「飢うる時は定めて飢を聞き、飽く時は定めて飽を聞く。婆子は臺山に在り趙州勘破し了んぬ。」遯庵

㊈日暮れ道遠くして倒行逆施すは古語なり、正直になきなり。
㊉此宗鏡錄を見て情識の解會をなすべからず。
㊋全部欠所せられ了んぬ。
㊌鐵丸が栗のいがが磨つた鐵の餡ころもちを店開きするがよし。
㊍乂怛怛怛の文字あり、むだ言を申しました。
㊎口から耳へ掛けて一本まぬりませうとなり。
㊏西山亮は奇人なり、遯庵に嗣ぐ、庵は大慈に嗣ぐ。
㊐潦倒は郎當に同じ、零落の義なり、支宗皇帝が蜀へ落ちられた時、馬の鈴が三郎郎當三郎郎當と鳴つた。

之を可とす。金陵の清眞に出世す、提唱語言、發することと機括の如し。天童の癡絕に寄せて云ふ、㋒「潦倒たる西山百不能、隨身幸に一枝藤あり。東に撑へ西に拄へ閑日を消す。甘んじて荒山小院の僧となる。」四明の小靈隱に住して終ふ。西山は蜀の人、性方雅にして俗流と交るを喜ばず、無準其の語に叙して、稱して㋓本色の宗師と爲す者なり。

㋔無準佛鑑圓照範禪師、少うして穎悟、機辯を以つて自ら將ふ。豪庵に雙徑に謁す。庵問ふ、「何の處の人事ぞ。」曰く、「劍州の人。」問ふ、「還つて劍を將ち得來るや。」佛鑑一喝を下す。庵曰く、㋕「烏頭子也人を㋖括噪す。」佛鑑髮黑し、時に呼んで烏頭となす。後破庵に隨侍す。因〻謙道者方丈に入つて請益す。㋗躡蹤して往く、破庵謙の至るを見て便ち問ふ、㋘「近日胡孫子如何ん。」謙曰く、「胡孫捉不住。」破庵曰く、「捉を用ひて作麼。」佛鑑之れを聞いて胷次豁然たり。

㋙井山密禪師、㋚至節の小參に云く、「正令全提して十方一團の鐵、冥極坐斷して大地行蹤を絕す。是れ禪ならず是れ道ならず。摩羯提國三七日の中、鐵壁鐵壁、少林山下九年の冷坐。㋛浣盆浣盆、自餘の臨濟德山總べて是れ衆盲の象を摸するなり。

㋓本色は「まじめ」と云ふ如し、彩色を施さゞるなり。
㋔無準師範禪師は破庵先に嗣ぐ、先は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵、應庵は虎丘、虎丘は圓悟に嗣ぐ。
㋕烏頭は鶴に似て非常の靈藥なり、引きかけてあるなり。
㋖括噪は「がみ〳〵ぬかす」と云ふ如し。
㋗躡蹤は跡からついて往くこと也。
㋘此頃手飼ひの猿はどうした、猿はつかまりませぬ。
㋙井山密禪師は枯禪に嗣ぐ、枯禪は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ、庵の師は虎丘、虎丘の師は圓悟克勤なり。
㋚是れは冬至の小參なり。
㋛浣盆又換盆に作る、蓋し笑樂の意ならん。

一向に與麼ならば、荒草天に連る。拂子俯して時宜に狥ひ、曲げて方便を開く。拂子を以つて劃して云く、一劃は陽となる。又劃して云く、一劃は陰と爲る。陰陽交〻感じて歲功乃ち成る。忽ち乾坤窄きを若んせん。乾坤窄く、日月星辰一時に黑し。且く道へ、是れ陽か是れ陰か。拂子を擲下して云く、石筍の枝を抽くを待つて、卽ち汝に向つて道はん。」井山は、乃ち枯禪の俗門の姪にして、法門の嗣子なり。幼より長に至るまで、之を羽し之を翼し、鷹兒の寨を出づるが如く、便ち冲天の志あり、明師の賢資を出すこと信なり矣。恨むらくは、其施設を盡す能はずして早世せるを。

㋜建康府保寧の㋝卽庵覺禪師、嘗つて無準と同じく破庵に參ず。後無準の山居に因つて、寄するに偈を以つてして云く、「松風を吸ひ山色に飽く。浩養妨げず清骨に徹するを。夢覺めて千巖香靄分かれ。興來つて一笑乾坤窄し。霽霞凝雪翠滴々たり。泉斷崖に瀉いて聲瀝々たり。故人斯の樂み我れ何ぞ知らん。遐かに白雲に跂つて幽石を抱く。」高源の梨洲の住するを送つて云ふ、「小玉聲中些を認得す。今に至るまで兩眼尙ほ眯麻す。阿師雪がずんば鄉人の恥なり。鼎に鼎に誰れをして正邪を辨せしめん。」蜀の諸老・高源・卽庵・石田・無準の如き、道價皆一時の重きを爲す。猗歟、盛なるかな。

㋞慶元府雪竇の㋟無相範禪師、松源に參じ、法を焦山に開く、龍象駢集す。新雪竇の爲めに、無準上堂、「楊岐和尙出世、陞座罷んで、九峯勤和尙其の手を握つて曰く、且喜すらくは箇の同參を得たり。

㋝卽庵は破庵に嗣ぐ、破庵は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ。
㋟無相範は松源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ。

岐云く、如何なるか是れ同參の事。峰云く、楊岐犂を牽けば九峯耙を拽く。岐云く、正恁麼の時、楊岐前に在るか九峯前にあるか。峰擬議す。岐云く、將に謂へり、同參と。元來不是。」と云ふを擧して、頌して云く、「楊岐左眼半斤、九峯右眼八兩、一對無孔の鐵鎚、今に至るまで收拾し上せず。」叢林咸く、大範を以つて之を呼ぶ。蓋し無準と行道同一時なり。雪竇の請に赴き、遂に遷寂す。是れより先き、紹定辛卯の歲旦、上堂に云く、「春來萬彙悉く皆新なり。一段の風光畫けども成らず。無事妙高行一轉、知らず誰れか是れ境中の人。」明日齋より退き、巡寮して妙高峯に登り、且つ云く、「吾が意を會すや否や」と。又明日堂に赴き、粥を喫し罷んで、湯を索めて沐浴し、端坐して寂す。衆議して峰頂に窆堵波を建つ。佛鑑の記する所に見ゆ。

平江府雙塔の無明性禪師は、性端潔にして詼謬を疾む。「開口不在舌頭上」を頌して云く、❶「明に棧道を修して、暗に陳倉を度る。舟を刻んで猶ほ劍を覓む。夜雨瀟湘を過ぐ。」「大力量人擡脚不起」に云く、「只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず。白雲盡くる處是れ青山。行人は更に青山の外にあり。」「大力量人脚下紅線不斷」に云ふ、「兩を放ち三を拋ち、神を瞞し鬼を謾す。換盆換盆、誰れか儞を識らざらん。」趙州二庵主を見るを頌して云く、「南枝は暖に向ひ北枝は寒、一種の春風に兩般あり。語を寄す高樓に笛を吹くこと莫れ。大家留取欄に倚つて看る。」松源之れを首肯す。無明一生眠食清衆を離れず、老いて益々精進なり。惟だ此の一節、亦書すべし。

❶張良蜀の棧道を燒いて陳倉より出でて三秦を襲ふ、表通りを行かないで裏道通る。

況んや、衲子其の決擇に資するをや。

❷柏岩山禪師は、福の玉融林氏の子なり、至る處輒ち席を前む。水波を畫くの壁に題して云く、「波浪鼓する時點滴なし。風濤息む處卽ち瀰漫、明牕❿紙鏄に尋覓を休めよ。壁上の行船方に好看。」同輩皆稱す。里に歸つて洋嶼の雲門に住し、息庵に嗣ぐ。節を砥き行を礪く、衆の畏服する所なり。

中巖寂禪師、天性孤高、衆に示して云く、「過去の諸如來は溝に塡ち壑を塞ぐ。現在の諸菩薩は❼棍に頭無く禪に口無し。未來の修學人は推せども向前せず、拽けども向後せず。若し也會得せば、同坑に異土なし。若し也會せずんば、君は西秦に向ひ、我れは東魯に之く。」又云く、「行も亦禪、坐も亦禪。終日頭を擧げて天を見ず。爾に出づるものは你に反る。認着すれば依然として還つて不是。拈起すれば則ち大虛に充塞す。放下すれば則ち纖塵立せず。拈起せず放下せずんば、鎭州の蘿蔔頭、趙州❼遼天の價を索盡す。」又云く、「今朝七月旦、夏制將に滿つるに垂んとす。更に曲彔床に上つて舊公案を擧則す。擧し得て全きも、鼻孔半邊なし。擧し全からずんば、舌頭に梵天を拄ふ。❼啞、胡亂し了れり。我れに這の則公案を還し

❷柏岩山は息庵に嗣ぐ、庵は水庵一に嗣ぐ、一は佛智裕に嗣ぐ、裕は圓悟に嗣ぐ。

❿窓の紙の破れ目から見る必要は無い。

❼棍は男のふんどし、今の褌股の如くにて端なし、禪は女のゆまき、行燈袴の如くにて口なし、此解古來難めり。要するに渾脩たる處を得ば其意すむなり。

❼天竺屬く樣な高い直段を需む。

❼啞は發聲なり。よい加減のこと云ふてしまつた。

來れ。卓拄杖して云く、切に忌む㊂喀啄するを。」此の數語、㊃含沙の射影に巧なるが如し。吾れ恐らくは之に見ふて、其毒に中らざるもの幾んど希なり。

㊄天目禮禪師、同參を訪ふて、値はざるの偶に云く、「庭前一樹の㊅紫荊花、老子何ぞ嘗つて家に在らざらん。若し弟兄相見し了ると謂はゞ、先師の門戶天涯を隔つ。」叢林の爲めに誦せらる。野狐の話を頌して云く、「墮落知りぬ何の處ぞ、君に憑つて子細に看る。潮來つて別浦無く、木落ちて他山を見る。」癡鈍の爲めに喜ばる。曾つて北澗と同じく、佛照會中にあり、相與に㊆提衡す。故に簡川禮寂の呼あり。余景定の間、保寧に寓し、始めて全錄を見る、天目老職の許可に預る。豈苟然の者ならんや。

㊇短蓬遠禪師、平生臥具を設けず、晝夜枯坐す、遠鐵槭㊈の稱を得たり。餘杭の永壽に開法し、明極の嗣となる。中秋同輩に寄するに云く、「一點の孤明大虛に徹す。體に盈缺なく方隅に任す。光萬象を含んで㊉珠蚌を懷き、影は千江に落ちて井驢を覷ふ。㊋馬祖翫ぶ時向背に迷ひ、長沙用ふる處名摸を絕す。衲僧直下に標旨を忘し、吐七呑三總に自如。」筆墨の遊戲を

㊂喀啄はくちばしでつつくなり。
㊃含沙は「おさき狐」で、人の影を見て毒を噴き掛ける。
㊄松源に嗣ぐ、前出。
㊅紫荊花が見ゆれば此偶全部分明なり、紫荊は紫色の花のさく「すをを」なり。
㊆抵敵抗衡の意ならん、簡は才あつて川の如く、禮の蘊蓄は竅の如し。
㊇短蓬遠は明極に嗣ぐ、極は目得に嗣ぐ、得は宏智に嗣ぐ、智は丹霞に嗣ぐ、曹洞家。
㊈槭は「くひ」なり、鐵の槭を打込んだ樣なと云ふ處から此名を得しなり。
㊉珠が蚌を懷き、井戸が驢馬を覷ふ。
㊋馬祖嘗て百丈等と月を玩ぶ。皓月と云ふ供奉官が長沙に業障の事を尋ねし也、名摸又名見に作る、名摸を絕すはさぐ

害せず、後吳門の承天に住す。一日上堂に云ふ、「承天の一句、言前に分付す。達磨不會、隻履歸去、」と。宿を越えて病無うして坐逝す。時に光東谷も亦道行なり、一力洞上の宗を起す、㊇人無しと謂ふこと無かれ。

㊌石田薰禪師は、眉山の彭氏なり、嘉定の間高峯に出世す、屋老い僧殘す。是れより先き、高原、無準、卽庵、中岩、石溪の諸老之を㊍徐して、然る後請に從ふ。開爐上堂に云く、「高峰の門戶灰の如くに冷かなり。多謝す諸公の㊎歲寒あるを。些子なり死柴頭上の火、大家力を着けて試みに吹き看ん。」石田吳門の高峰に住する、寥寞荒寒、法昌の分寧に在る時に勝る。開爐に高原宿德咸く集まる。又差一力を以つて、鼓を撾つて、㊏十八泥人の爲めに說法するに勝れり。

臨安府淨慈の㊐混源密禪師は、天台盧氏の子、泉南に遊び、敕忠の光晦庵に參ず。乃ち大惠の謂ゆる禪狀元なるものなり、久しうして盡く其の道を得たり。後示衆あり、云く、「恁麼々々、地を堀つて靑天を覓む。不恁麼不恁麼。虛空骨を攪り出す。釋迦老子僧伽梨正法眼藏を以つて摩訶大迦葉に分付す。㊑生錢放債し換水養魚す。㊒世尊金襴を傳ふるの外、別に何物を

るべき引きがかりなきなり。標旨は標指なり、月を指す指なり。
㊍當時曹洞門下人無きの嘆あり。
㊌石田は破庵に嗣ぐ、庵は密庵に嗣ぐ。
㊎歲寒の節操。
㊏泥人は土偶なり、大業なき故人形に說法せしなり。
㊐混源密は光晦庵に嗣ぐ、庵は大惠に嗣ぐ。
㊑生は主也、生錢放債は人より錢を借りて僞金なしをするなり。
㊒阿難。
㊓大びら切つての商賣をせずして內證の賣買計りする。
㊔二被。
㊕礫は敗壞の「石ずゑ」なり。
㊖拗は「いぢわる」なり、役所のいぢわるより役人のいぢわる

か傳ふ。門前の刹竿を倒却着せよ。㋐官路を行せず只だ私商を販す。㋑内外中間、心を覔むるに了に不可得、汝が爲めに安心し竟れり。家財俱に籍沒し、㋒磉下に黃金を得たり。德山の棒臨濟の喝、㋓官拗は曹拗に如かず。情親は義親に如かず。腰間の曆日已に多時、用ひず㋔龜を攢り瓦を打するを、楊岐三脚の驢兒、儞諸人の鼻孔に入る。雲門黑漆の竹篦を以つて、弟僧の命根を斷ず。東勝神州に火發して、帝釋の眉毛に燒着す。西瞿耶尼の人、㋕忍俊不禁にして連聲に屈と叫ぶ。初三十一中九下七、㋖鉢囊を掛起し柳樑を放下す。山河大地、日月星辰、三月安居、諸佛菩薩、畜生驢馬、九旬禁足、大圓覺を以つて我が伽藍と爲し、寂滅現前、欵㋗に據つて案を結ぶ。去年の梅今歲の柳、顏色馨香舊に依る。喝。但願ふ春風齊しく力を着け、一時に我門に吹き入り來れ」と。人の語句を閱するに須らく其の密說、顯說、直說、曲說を究むべし。恒山の雲の開遮自在なるが如く、須らく是れ同一眼觀、圓一意見にして、方に前輩に辜負せず。混源の出處、已に嘉泰普燈に備はる、此數語未だ載せず。石田の曰く、㋘「受虛中只だ能く事跡を詳類す」と。愚謂ふ聯燈の去取眞に放過せざるものなり。

國史陳公貴謙、舍人眞公德秀に答ふる書に曰く、「承はる禪門の事を下問せらるゝを。仰いで虛懷樂

㋐官路は官道の方がこはい。
㋑龜の甲、瓦のかけでうらなひするなり。
㋕忍俊不禁は俗語の辛抱しきれないの意なり。
㋖鉢囊は持鉢ぶくろ、柳樑は拄杖。
㋗欵は罪人の白狀也、案は申し渡狀なり。
㋘受虛中は普燈錄の著者、傳・廣・續・聯・普・これを五燈と云ふ、普燈は其一なり、僧傳の綱墓に此等の語は放過すべからずと云ふなり。

善の意を見る。願ふに淺陋何ぞ以つて此を辱うするに足らん。然れども敢て管見を以つて陳白せざらんや。㋙所謂話頭看る合しや否やとは、某を以つて之を觀れば、初めより定說なし。若し能く一念無生なれば、全體是れ佛なり。何れの處に別に話頭あらん。只だ多生の習氣に緣つて、覺に背いて塵に合ふ。刹那の間、念々起滅す。猴孫の栗を拾ふが如くに相似たり。佛祖の輩、已むを得ずして、權に方便を設けて一箇無滋味の話頭を咬嚼して、意識行はれざる所有らしむ。蜜菓を將つて苦胡蘆に換へ、汝の業識を陶して都べて實義無からしむ。亦國家の兵器の已むを得ずして之れを用ふるが如し。今時の學者却つて話頭上に於いて强ひて穿鑿を生じ、或は逐箇に解說して、事業に當つるに至る。遠うして遠し矣。㋚稜道者二十年に七蒲團を坐破す。只管看る㋛驢事未だ去らざるに馬事到來するを。因に簸を捲いて大悟す。所謂八萬四千の㋜關捩子、只だ一箇の鎖起と開とに消す。豈に多言に在らんや。來敎に謂ふ、『佛の言を誦し、佛の心を存し、佛の行を行はゞ、久々にして得處あるべし』と。此の如きの行履、固に一世の賢者たるを失はず。然れども禪門の一着は、又須らく自己本地の風光を見徹して、方に究竟と爲すべし。此の事人々の本有と雖も、但だ客塵妄想の爲めに覆はる。若し痛く鍛煉を加へずんば、終に明淨ならず。圓覺經に云く、『譬へば金鑛を銷するが如し。金は、銷して固に有なるにあらず。復た本來の金と雖も、終に銷を以つて成就す』とは、蓋し此れを謂ふなり。

㋙古人賛說の話頭を吟味するの必要ありや否の問なり。
㋚長慶惠稜は雪峯に嗣ぐ。
㋛一事去らざるに又一事來る。
㋜緊要の處なり。

來敎に又謂ふ、『道若し言語文字の上に在らずんば、諸佛諸祖何が故に許多の經論を留めて世に在くや』と。謂ふ經は是れ佛言、禪は是れ佛心、初より違背なし。但だ世人言を尋ね句を逐ふて、敎網に沒溺し、自己一段光明の大事あるを知らず。故に達磨西來して、不立文字直指人心見性成佛、之を敎外別傳と謂ふ。是れ敎の外別に是れ一箇の道理あるにあらず。只だ此心を明了して、敎相に着せざらんことを要するのみ。今若し只だ佛語を誦して、自己に歸することを會せずんば、人の他の珍寶を數ふるが如く、自らは半錢の分なし。又破布に眞珠を裹むが如く、門を出づれば、還らず漏却すべし。縱使中に於いて小滋味を得るも、猶は是れ法愛の見のみ。本分の事上には、所謂金屑貴しと雖も眼に落ちて翳となるなり。直きに須らく打併し、一切淨盡して、方に小分の相應有るべきなり。某甲向來大藏經を閱せずと雖も、然かも華嚴、圓覺、維摩等の經は、之れを誦し、亦稍や熟せり矣。其の他傳燈の諸語錄、壽禪師の宗鏡錄の如きは、皆翫味すること數十年間、方に㊐屋裡に在つて着到す。却つて經典を看るに暇なきなり。楞伽は是れ達磨の心宗なりと雖も、亦句讀通じ難きを以つて、曾つて深く究めざるなり。吾人皆是れ誠心にして、彼の世俗のみづから瞞して、以つて談柄に資するに非ざるを知らんことを要するのみ。姑く日用を以つて之れを驗するに、濁惡の愆過なしと雖も、然れども、一切の善惡逆順の境界上に於いて、果して能く照破して、㊑他の爲めに移換せられざるや、否や、夜の睡中に夢覺一如なりや否や、恐怖轉倒するや否や、疾病して能く主たるを得るを作すや否や。若し目前猶ほ境の在るあらば、則ち夢寐未だ轉倒を免れず。夢寐既に轉倒せば、疾病に必ず主宰と作り得る能はず。疾病既に主宰となり得ずんば、則ち生死の岸頭に必ず自在ならず。所謂人の水を飲んで、冷暖自知するが如し。待制舍人、功名鼎盛の時に於いて、清修寡欲にして、神を此の道に留む。謂つべし火中の蓮華なりと。古人言へるあり、『此れは大丈夫の事、將相の能く爲す所にあらざるなり』と。又云く、『直きに高々たる峯頂に立ち、深々たる海底に行かんと欲す。更に深く窮め遠く到つて、直きに不疑の地に到らんことを欲す』と。來敎に謂ふ、『手を下すに處なし』と。只だ此の手を下すなき處、正に是れ得力の處なり。前書に言ふ所の如く、靜處鬧處皆一隻眼を着けて、是れ什麼の道理ぞと見よ。久々に純熟せば、おのづから靜鬧の異なし。其れ或は雜亂紛飛し、起滅停らずんば、却つて一則の公案を擧して、之れと厮㊒崖せよ。則ち起滅の心自然に頓に息まん。照すと照さるゝと、同時に寂滅せん。卽ち是れ㊀家に到るなり。某しも亦學ぶ焉にして、未だ至らざるなり。姑く吐露を盡すこと此くの如し。必ず他に示さゞれ。恐らくは㊁儒釋謀らずとするもの、必ず大いに之れを怪まん。待制舍人、他日心眼開明せば、亦必ず大いに笑ひ、而して之れを罵らん、」と。國史公は、多く宗匠に見ゆ。

㊐自家屋裡の物丈にて事濟みし故、他を省みざるなり。
㊑外物の爲めに自己を移換せられざるや。

㊒崖は拒なり、相手を推しのけて進む心持あり。
㊀本分の家に到着す。
㊁道同じからざれば相爲めに謀らず、論語。
㊂大川は浙翁瑛に嗣ぐ、瑛は佛照德光に嗣ぐ、光は大惠に嗣ぐ。

㊀大川濟禪師、法を荷するを事となし、狷介意に當るものなし。四明の寶陀に在つて、三句の語あり、曰く、「寶陀の一路、來々去々、㊁聳頭に撞着し、風波無數。」曰く、「寶陀の一玄、臂を掣し、拳を揎す。鼻孔を打失す。蒼天蒼天。」曰く、「寶陀の一妙、人の能く到るなし。喫飯着衣、阿屎放尿。」冷泉に住して示寂す。㊂遺囑に骨を撒して、窒塔を造らざれ。偈を說いて曰く、「地水火風は先佛の記、冷灰堆裡に舍利なし。長江の白浪中に擲向して、千古萬古第一義。」と。眞に一代宗匠の模楷、㊃澗東の道を起すものなり。

山陰の㊄清首座は、心法を無用に得、㊅椒の頌あり、云ふ、「烟を含み露を帶びて已に秋を經、顆々通紅して氣味周し、眼睛を突出し口を開いて笑ふ。這回は戀はず舊枝頭」と。諸方猶ほ能く誦して、清の述ぶる所たるを知らず、或は載せて無用の作と爲すは非なり。

夢堂升禪師擧す、雪竇の示衆に云ふ、「賓を立て主を立つるは好肉に瘡を剜る。古を擧し今を擧するは、沙を拋ち土を撒す。直下に無事なれば正に是れ無孔の鐵鎚、別に機關あらば、定めて無間地獄に入らん。」拈じて云く、「這般の漢、須らく是れ緇素の眼を具して始めて得べし。活句下に明得せば、佛祖の爲めに師となるに堪へたり。死句下に明得せば、自救不了。且く道へ、雪竇恁麼の說話、是れ活句か、是れ死句か。

㊁聳頭又邉頭に作る、逆風ならん、揎は拳なり突く心なり、阿屎放尿は「ぶつぶつじゆうじゆう」なり。

㊃廬山の慧遠以來此說を爲すもの多し。

㊄澗東は其師瑛斷翁の塔所なり。

㊅清首座は全無用に嗣ぐ、無用は大惠に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。

㊆山椒の偈頌なり。

雪竇の地獄を出づるを待つて卽ち汝に向つて道はん。」又云く、「達磨衆に示して、各々所見を言ふ。小兒百草を鬪すとき、到る處に去つて尋討す。黃昏鬪罷んで却た歸り來る。知らず狼藉は誰れにか掃はしめん、」と。平生の提唱、人倫の周孔あり、鱗羽の龍鳳あるが如し。晩年には、戶を閉ぢて交接を喜ばず、衲子之を見れば、龍門に登るが如し。昔し雲蓋の智、禪林の㊇軟暖を便とし、道心の淡薄なるを疾み、來り參するもの、頭を掉つて納れず、其の入室を容すを聞けば、則ち堂室爲めに滿つ。夢堂之れ有り矣。

㊈石田薰禪師曰く、破庵老和尙言ふ、「禪和子室中の下語は、摠に是れ知見解會、如何ぞ了得せん。須らく是れ言句の外に向つて、時に臨み別に意智あつて、㊉泥水を去離して方に得べし。」我れ舊時行脚歸去のとき、一同行と合州の釣魚に在つて掛搭す。彼の中も亦是れ一員前輩の尊宿あり。㊋我れ去つて入室するときには、再三我れを免して肯へて擧話せず。同行の去るに至るに及んでは、却つて他を免さず。但だ膝を拊つこと一下して云く、「儞這裡に向つて轉語を下せ看ん」と。同行語無うして、番々入室すれども、只だ是れ此の如く問ふ。他の同行云ふ、㊌「耐へ難し這の漢、番々只だ此の如く問ふ。我れ他に應ずべきなし。儞我が爲めに一轉語を下せ」と。老和尙の云ふ、「儞他の今番又是くの如く儞に問ふ

㊇輕軟飽暖なり。

㊈石田は破庵に嗣ぐ、前出。

㊉拖泥帶水。

㊋自分には何とも言はぬが同行の友が往くと中中よいと云はない。

㊌辛抱しきれない此處のおやぢ何とも言はずに幾度往つても同じこと計り言ふと。

を待つて、但だ㋐兩指をもつて鼻を夾んで、他を聲すること一聲して便ち出でよ」と。同行果して去つて入室し、敎ふる處による。尊宿云く、「人あり儞を㋑敎壞し了んぬ」と。信に知る、此事得る底の人は、兩鏡の如くに相似て、自然に彼此相瞞せず、工夫を做すには、須らく省要の處に做すべし。這般の田地に到らしめて、方に種草と爲すに堪へたり。

㋒笑翁堪禪師、行丐して泉南に到り、洛陽に休す。一僕夫と山行し、偶ま下生院に到る。古屋數十間あり、廊には風葉を卷き、寂として人聲なし、惟だ一老僧の、雪頂厖眉にして、殿陛に㋓負暄するを見る。徐ろに立ちて客を止め、僧堂前の破木床に坐せしめて曰く、「何れの處よりして來る。」翁曰く、「來に所來なし。」僧曰く、「什麼によつて遮裡に在る。」翁曰く、「早晨に白粥を喫し、如今肚裡飢ゑたり。」僧曰く、「是れ遮箇の道理にあらず、速かに道へ。」翁、屋角の樹を指して曰く、「好いかな一株の木、恁麼に蒼翠を得たり。」二人大いに笑ふ。相就いて話つて刻を移し、始めて老僧は嘗つて、㋔無用に見え來るを知る。雪峰の玢侍者、此を言ふこと甚だ詳かなり、惜しいかな、老僧偶ま其の名を忘れたり。

㋕鐵牛印禪師曰く、『正堂辯和尚の、日書記に與ふる書に云く、「黃龍の

㋐兩指にて鼻を夾み、ぐつと息を込めて指を彈き、「プツン」と音をさせよと敎ふるなり。
㋑敎壞、離の出ない中に徒らものが外から啄くから、とうとう折角の雛子を殺して仕舞ふた。
㋒笑翁は全無用に嗣ぐ、前出。
㋓負暄は、ひなたぼつこなり。
㋔自己と師を同じうす。
㋕鐵牛は佛照に嗣ぐ、照は大慧に嗣ぐ、慧は圓悟に嗣ぐ。
㋖道行は雙肩に荷ふなり、絺章繪句は文章句讀を立派にするなり。

一宗を㋗道行して、振擧せんと要せば、切に絺章繪句人に見耀すべからず。禪道決して行ふ能はず。古には規草堂あり。近ごろ㋘珪竹庵あり。更に㋙洪覺範あり。今に至るまで士大夫只だ喚んで文章僧となす。其れ之を如何せん。公の三日耳聾と女子出定とを頌するが如き、淵源を徹見するに非らずんば、何んすれぞ此に至らん。小々を以つて大法を礙ふる勿れ。道は獨り一己の私を明辨するのみにあらず、諸方の老宿皆此くの如く議す。㋚我れを知り我れを罪するは此の書にあり。萬々之を察せよ。」此の語切に今時の病に中る。學者忽にすべからざるなり』と。鐵牛の紀載、誠に後學に補あり。所謂草堂の諸老者は、見處穩當ならざるにあらず、當時も亦此の議り有るを免れず。嘉定の間、黨石田博學能文なるも、痛く自ら掩抑するは、此れを以つての故なり。璨隱山初めて㋛元城語錄を見て、喜ぶこと甚だし。携へ歸つて之れを閱し、未だ竟らざるに、卽ち卷を掩ふ。侍僧の曰く、「何ぞ初めに之を喜んで、遽かに之れを捨つるや。」曰く、「禪僧家は、念々常に㋜乾屎橛上に在つてすら、尙ほ雜用心を爲す。況んや世間議論の文章をや」と。是れ亦堤防の法、當に是くの如くなるべきなり。㋝先德云ふ、「學者文字語言を漁獵するは、正に網を吹いて滿たさんことを欲するが如し、愚

㋗珪竹庵は佛眼遠に嗣ぎ、道場に住す。
㋘洪覺範は甘露滅にして大慧に嗣ぐ。
㋙我れを知るは春秋か、我れを罪するも又春秋か、是れ孔子の語なり。
㋚劉元城の語錄、元城論は克莊。
㋛乾屎橛は尻の穴をぬぐふ「くそべら」なり、無滋味の話頭なり。
㋝和譯の譯錄に依つて本分を知らんと欲するも亦之に類す、然れども諸人却つて雪を以て井をうづむるの法を知るや、若し未だ知らずんば和譯の譯錄を見よ。

に非ずんば卽ち狂なり。」

閩山居士俞景賢、漸に入つて知識に遍參す。後に鄮峯の用首座に見えて問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」用曰く、「我汝に向つて道はんと欲す、汝還信するや否や。」士曰く、「請ふ師道へ、安んぞ敢へて信せざらん。」用曰く、「汝緊參禪を要せば、西來意を問ふべからず。」士曰く、「何ぞや。」用曰く、「西來に甚の意かある。」士豁然として了解し、衣を拂つて便ち出づ。用復た召して曰く、「什麼を見て便ち出で去る。」士回顧す、而して用喝一喝す。士曰く、「住ね住ね」と、便ち行く。此れより里に歸り、親眷を割棄し、㋔顓々として獨り嶼上の別墅に居る。偈を述べて曰く、㋕「錯脚洪に游び瀾を歷て歸へる。更に一法の思惟すべきなし。柴門高く掩ふ長江の上。誰れか管せん風濤の是非を鼓するを」と。用は㋖誰菴に見ゆ。

長樂の珪藏主曰く、「向きに南北の山に在つて、元雙杉と同じく住す。其の清約介靜、四威儀の中、己躬を究竟するの大事を忘れざるを見る。日間は偏へに要らず僻寂の去處を尋ねて、孤坐すること、兀として枯株の如し。夜間睡夢にも、また古德の話頭を提起して、㋗噂語喈々として、畧ぼ辨すべきが如し。其の工夫を做すの、精專純一を見るべきなり。那の時、便ち其の必ず法門の大器爲るべきを知れり。其の人を思ふごとに、未だ嘗つて面熱し、汗下らずんばあらず」と。斷橋の雲谷に答ふる手帖に見ゆ。

㋔顓は愚なる貌なり。
㋕錯脚は足を踏み錯るの意ならん。
㋖大慧の法嗣なり。
㋗噂は囁と同じく雖言なり、喈々は泣く樣な音のするなり。

嘉興府光孝の㋘石室輝禪師、僧問ふ、「明招の勝光に見ゆるとき、纔かに門に跨れば、光一足を垂る、意旨如何ん。」室曰く、「乞兒飯椀を弄す。」問ふ、「只だ招の伎倆已に盡くと云つて、拂袖して便ち去る如きは、又且つ如何ん。」室曰く、「鈍鳥逆風に飛ぶ。」室久しく明極に侍し、後無準に嗣ぐ、性介烈なり、貴勢敢へて干すに私を以てせず。慶元の彰聖に住せしとき、㋙官府の科擾節なきをもて棄て去る。府公之を聞いて、勉留すと雖も、回らず、嘗つて㋚牌を掛けて、衆に徑山に首たり。其の語穩實なり。

國史陳公貴謙、嘗つて烏回に在つて、月林觀禪師と夜坐す。林曰く、「如何なるか是れ賓中の主。」公曰く、「頭腦相似たり。」林曰く、「如何なるか是れ主中の賓。」公曰く、「橫さまに㋛鏌鋣を案じて正令を行し、太平の寰宇癡頑を斬る。」復た聲に從つて曰く、「如何なるか是れ賓中の賓。」月林手を搖して笑ふ。噫公の機辯、猶ほ想見すべきなり。

㋜無量壽禪師は撫州の人なり、大師史衞王に答へて云ふ、「佛法は一切の處、奏事書判の處、着衣喫飯の處、君を致し民を澤する處、士を納れ賢を用ふる處に在り。第一に心を擬して㋝尋覓すべからず。纔かに是れ斯くの如くなれば、又得ざるなり。」嘗つて衆に鄱陽の刁峰に首たり、太師京口の金山を以

㋘石室輝は無準に嗣ぐ、準は破庵に嗣ぐ、庵は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ。
㋙役所からうるさき事を持ちかけて仕樣がない。
㋚徑山首座の掛牌して垂示普說す。
㋛鏌鋣は名劍の名、髮切、膝丸なり。
㋜無量壽は秀岩瑞に嗣ぐ、瑞は佛照に嗣ぐ。

つて之を招けども出でず、卽ち隆興の感山に遁る。晩年始めて台の瑞岩の請に赴く。是れ亦比丘たるの ㋝ 大體を失はざる者なり。

石田薫禪師曰く、「既に佛門に入つて佛飯を喫す。㋞ 潑天の門戸、人の扶持を要む。亦須らく是れ箇の漢にして始めて得べし。況んや長老と稱するをや。名既に此くの如くなれば、實當に如何んすべき。向上の眼目を具し、大機用を得て、以つて人天を開鑿し、後學を饒益して、方に出世の二字に孤負せざるべし。中下の機に就いて之を言はゞ、亦因果を識り、香華を勤め、早晩禪誦懈らざらん事を要す。新を剏め、舊を補ひ、一切處に眞實の心を運らして、方に少分の相應あらん。方丈に坐し、見成を傾して、勞は人を責め、逸は己に歸すべからず。瞬息の間、頭は白く齒黃にして、㋟ 前頭大いに事の在るあらん。前輩の長老時節因緣既に至つて、奈何んともせず。㋠ 面皮を劈破す。多くは是れ住院の後却つて一歩を進得す。蓋し院の大小衆の多寡を問はず、千人萬人叢中も、亦此くの如く、㋡ 單丁にして去る處も亦此くの如し。二六時中專ら此の道を以つて懷と爲し、長久に工夫間斷せず、故に能く打發す」と。石田の此の語、毒藥口に苦く、病に利ありと謂ふべきなり。

㋝ 佛法を學れ覓むるは外に取らるる故不可なり。
㋞ 納僧の脚跟は樹下石上にあり。
㋟ 潑天の門戸は向上の些子なり。
㋠ 生死岸頭に臨んで何の技倆かある。
㋡ 面皮を劈破すとは「つらよごしをする」の義にて、寺院に住持するを云ふ。
㋢ 單丁は只一人の處をいふ、上の千人萬人に對す、單は隻也、丁は壯丁の丁なり。

潭州石霜の竹嵓印禪師 ㋣ は、隆興府の人、道味苦嚴、見る者肅然として心服せざるなし。抑齋陳公辨、潭に帥たるの日、龍牙福嚴を以つて、招致すれども皆赴かず。後に石霜を以つて請す、已むを得ずして命に應ず。僧問ふ、「如何なるか是れ和尚の家風。」嵓曰く、「家風を問うて作麼する。」問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」嵓曰く、「湘潭雲盡きて暮山出で、巴蜀雪消して春水來る。」同門の秀孤峯、開無門、皆之を推遜す。平生 ㋤ 機鍵縝密にして、語言粹夷あり。豈に親しく月林を見るの力に非ざるか。

㋣ 竹嵓印は月林に嗣ぐ、月林は證老衲に嗣ぐ、證は月庵に嗣ぐ、月庵は開福の寧に嗣ぐ、寧は玉龍法演に嗣ぐ。
㋤ 機鍵は機軸關鍵なり、蓋し宗旨のしらべ緻密なりしなり。

㋥ 大川普濟禪師、嘗つて弁山と老佛心に侍す。弁山偶々外幹し、請暇に及ばず、歸るに泊び、佛心曰く、「阡兄兩日何くにか往きし。」答へて曰く、「未だ嘗つて出入せず。」大川適々旁に在り、叱して曰く、「參禪の人、何ぞ妄語するを得ん。」弁山面赤く汗下る、此より尤も語言を謹む。昔し ㋦ 昭默死心の責を受く、亦此に類す。湛堂其の良器を歎せしなり。

平江府虎丘の ㋧ 坳堂濟禪師曰く、「毛髮、爪齒、皮肉、筋骨、髓腦、之を地と謂ひ、唾涕、膿血、津液、涎沫、痰淚、精氣、大小便利、之を水と謂ひ、暖氣之を火と謂ひ、動轉之を風と謂ふ。此四緣假合して幻身を成ず。須らく主宰あつて始めて得べし。何を主宰と云ふ。試

㋥ 大川は浙翁に嗣ぐ、前出。佛心は浙翁なり。
㋦ 昭默は靈源清禪師なり、死心は黃龍の清なり湛堂は眞淨文の嗣法なり、湛堂嘗て昭默死心の法器たるを賞す。
㋧ 坳堂は息庵に嗣ぐ、息庵は水庵に嗣ぐ、水庵は佛智に嗣ぐ、佛智は圓悟に嗣ぐ。
㋨ 頷頤は相上下するなり。

に道へ看ん。」劫堂は蜀の人、息庵に嗣ぐ、別浦癡絶と一時に㋝頡頏す。惜しいかな壽俱に癡絶に及ばざるなり。

國譯枯崖和尚漫錄卷の中　終

國譯枯崖和尚漫錄卷の下

蒙庵聰㋑禪師、嘗つて福州に歸り、木庵に乾元に謁す。木庵問うて曰く、「是れ聰侍者なるなきや。」蒙庵名を稱すること、未だ覓らざるに、木庵曰く、「此の事は聰明智慧の、能く辯ずる處にあらず、如何ん。」蒙庵曰く、「通身是れ口、吐不出。」曰く、「毒に中り了れり。」蒙庵曰く、「他を㋺掩彩する莫れ。」曰く、「且坐喫茶。」茶罷んで、木庵又曰く、「須らく知るべし、此の事は方冊の上にあらず、口皮邊に在らず。」蒙庵曰く、「畢竟什麼の處にか在る。」曰く、㋩「鐵蒺藜當面に擲つ。」蒙庵曰く、「大いに好し、口皮邊にあらず。」庵便ち打つ、蒙庵喝一喝して出づ。蒙庵既に法を其の落髮の師、光晦庵に得、大㋥父を以つて雪堂に事へ、復た木庵に乾元に謁し、密庵に烏巨に、水庵に淨慈に、誰庵に高亭に見えて、深く淵奥に徹す。是れ未だ嘗つて、一日も師友無かるべからざるなり。其の法道の昌ならざるを欲するも、㋭(得)べけんや。

無準佛鑑範㋬禪師曰く、『木平洛浦に參じ、便ち一問を致して云ふ、「一漏未發の時如何ん。」浦云ふ、

㋑上卷に出づ、佛眼派。
㋺掩彩する莫れとは盲にするなと云ふ意なり。
㋩鐵で作つた「ひし」、戰陣に用ふるものなり。
㋥大父は祖父なり。
㋭得の字原本無し、今補ふ。
㋬佛鑑は東福寺聖一國師、佛光國師兀庵禪師の師なり。

「舟を移して水脈を詰じ、棹を擧げて波瀾を別つ。」平契はず、却つて往いて盤龍に問ふ。「一滴未發の時如何ん。」龍云く、「舟を移して水を別たず、棹を擧げて卽ち源に迷ふ。」木平便ち悟り去る。後來雲峰悅和尚拈じて云く、「木平若し洛浦の言下に向つて悟り去らば、猶ほ些子に較れり。後來盤龍の死水裡に向つて浸殺すべからず」と。住して後問ふものあり、「如何なるか是れ木平。」平云く、「斤斧を勞せず、果然として只だ這裡に坐在す、」と。僧道へ、他恁麼の說話、意何くにかある。多く兄弟の、往々に商量するを見るに、舟を移して水を別たず、棹を擧げて源に迷ふは、便ち是れ死水。如何なるか是れ木平、斤斧を勞せず、所以に ⓚ 遮裡に坐在すと。若し恁麼に會し去らば、ⓣ 驢年にも、也た未だ夢にだも見ざる在り、遮裡須らく他の古人の一些子、人の憎みを得る處を覷見して、始めて得べし。』佛鑑の此の語、學者を發藥すること淺からず、晩年 ⓓ 中峰の道を雙徑に唱へ、機用の迅駛なること、擊石火閃電光の如きは、卽ち此の語なり。惟り英雋の鱗集するのみにあらず、今上皇帝も亦問道を思ひ、ⓢ 紹定六年七月十五日、修政殿に御して、引見說法せしめ、徽號金襴を賜ふも、亦此の語なり。豈に他の術あらんや。

伊巖玉 ⓑ 禪師は嚴州の人なり、初め名儒にして篤行ありと稱す。中年擧業を習ふを厭ひ、專ら ⓩ 洛學を究む。忽ち曰く、「是れ以つて吾が事を了すべからず」と。遂に ⓪ 縫掖を裂き、鬚髮を薙つて、出世の法を學ぶ。徑山に登り、老佛心に謁して之に師事す。久しうして契ふ所なし。復た往いて癡鈍に雪竇に見え、依止すること三年、一日忽ち卽心卽佛の話を明得す。故に「無毛の鶴子天に貼して飛び、千山萬山高く突兀」の句あり、嘗つて ⓕ 劉元城の語錄を看て云ふ、「所謂禪の一字は、六經の中に此の理あり、但だ之を禪と謂はざるのみ、達磨西來に及び、此の話大いに行はる。此の事の言ふべからざるに據れば、則ち夫子の答へざる是れなり。且つ西來意は必ず問はざれ、而して話も亦必ず答へざれ、向上の老和尚、好んで人を玩弄す。故に不答を以つて之に答ふ。所謂柏樹子は乃ち繫驢橛なり、後人知らずして只だ樹を了するを守つて、祖師の西來意を尋ぬ。一笑すべきなり、」と。讀んで此の處に至つて曰く、「若し是れ當時此の語を聽くを得ば、這裡正に好し、ⓔ 一錐を與ふるに。」

眞源日禪師 ⓐ 曰く、ⓛ 『馮侍郎濟川、張侍郎子韶、道を徑山の妙喜禪師に問ふ。師問ふ、「物を隔てゝ道を見ざる時如何ん。」子韶對へて曰く、「今日親しく慈顏を覩る。」妙喜曰く、「隔。」子韶云ふ、「然も是の如しと雖も、他を瞞すること一點だも得ず。」妙喜却つて濟川に問ふ。對へて、曰く、ⓜ 「不較多。」妙

ⓚ 遮裡這裡同聲互用。
ⓣ 驢やら驢馬の千支(えと)が出て來ても合點出來ぬ。
ⓓ 雙庵の塔前出。中峰明本にあらず。
ⓢ 日本四條天皇の天福元年なり。
ⓑ 伊巖懷玉禪師は癡鈍頭に嗣ぐ頭は或庵に嗣ぐ、或庵は此庵に嗣ぐ、此庵は圓悟に嗣ぐ。
ⓩ 明道伊川の唱へたる學を洛學と云ふ。

⓪ 縫掖は儒服なり。
ⓕ 劉安世字器之、大名の人、元城と號す。
ⓔ 一錐、元城錄は驢馬が井戸をのぞいて居るのじや、うしろからヒツシヤリはつたら、ビツクリして飛び上る。
ⓐ 眞源日は雲巢法一に嗣ぐ、上卷出。
ⓛ 馮濟川名は機、不動居士と號す。張子韶字は九成、無垢居士と號す、皆名儒なり。
ⓜ 不較多は左程違ひないの意なり、蓋し道と物とは同じことじやと云ふ病氣を持つてゐる。

喜曰く、「二公の對答、親切ならざるにあらず、但だ未だ道を見ず、一物あつて臥房裡に頓在し、更に一重の壁を隔つるが如し、」と。』什麼として見ざるや、禪和子道理を說いて便ち道ふ、「十方壁落なく、四面亦門なし、箇の什麼をか隔てん、」と。「饒ひ、儞の眼銅鈴に似るも、也須らく是れ悟つて始めて得べし。」又曰く、「禪和子檐版にして、纔かに轉語を下し得て、依稀彷彿する能はず、便ち言ふ、我れ百了千當す」と。余頃ごろ、佛智老人に見ゆ。亦曰く、「妙喜の橫說竪說、切に今時の病に中る。近來世を欺き、名を盜み、未だ得ざるを得と謂ひて、遞に相狐媚し、更に相印受す。東山を見るに、直下に佛法の罪人爲らざる者、幾んど希なり。」斯言、學者並に宜しく之を識るべし。

東山源禪師曰く、『往年嶺を出でゝ、初めて徑山に上る、其時枯禪首座㋡立僧となり、破庵西堂掛牌し、一時の龍象畢く集まる、石田無準の如き、皆同じく衆寮にあり。破庵尋常の室中、偏に愛して、經行及び坐臥、常に其の中に在り、如何なるか其の中の事と云ふを擧す、亦曾つて去つて請益するも他一詞を措かず、㋧起單するに臨み、却つて一頌を作つて相送つて云ふ、「骨を換へ筋を抽くの一句、只だ點頭みづから許すを缺く。若し能くみづから解して非を知らば、便ち見ん海宇を平吞するを。」箇れ便ち是れ、人の爲めに、釘と抽了し、楔と拔却するなり。此れより、平江靈巖を過ぎ、癡鈍に見ゆ。時に茂業海前堂

㋡立僧とは衆僧を成立するなり、僧堂にて首座の外に有道博達の人を請じて之に充つるなり。陞座普說の掛牌なり。

㋧起單は暫暇なり、七尺單前をたつの意、大事了畢して出づるを云ふの語なれども、古來暫暇と同樣に用ふ。

立僧と倣り、今の大慈の笑翁、育王の大夢、みな彼の中にありて、同じく住す、叢席甚だ盛なり。癡鈍嘗つて云ふ、㋤「詢佛燈四十九日の夜、露柱を抱いて悟り去る、」と。次に蔣山に上つて、浙翁に見ゆ。因に室中卽心是佛を擧す、下語して云ふ。「橋柱を抱いて澡洗す、」と。翁云ふ、「什麼の快活かある。」下語して云ふ、「請ふ和尙放下着」と。他に打出せらる。後復た巖雲巢、皎中庵に見え、衢州の祥符に上つて、殺六巖に見え、二十餘員の知識を歴扣す。看れば、㋶應庵下の兒孫の、直截緊峭なるに出づるはなし。宗枝の繁衍する所以なり。』嗚虖、東山悟門に於いて、大いに廓徹すと雖も、猶ほ先聖の一善を得るが如く、則ち拳々服膺して、之を失はざるなり。

眞源日㋰禪師曰く、『雪巢和尙入室のとき、僧に問ふ、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、仁者心動く。那箇か是れ儞が心。」又云ふ、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、仁者心動く。儞甚れの處に向つて、六祖を見ん。」又云ふ、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、仁者心動く。是れ什麼か動く、」と。臨濟の奧旨を發明し、衲子の眼目を證驗す。㋒運斤臨風の手の如く、其の妙は一斲にあり。』雪巢は金虜の亂に當つて、嘗つて大慧と同じく江を渡るもの、大慧笠中に一の金釵を藏して路費となし、時々之を視る、雪巢其の不意を伺ひ、取つて諸を江に投す。大慧慚謝して、與に交を結ぶ。

㋤詢佛燈は佛鑑派。

㋶大慧下一時爍天の勢ありしも三世振はず、後來の禪道は皆應庵下なり、應庵名は曇華、虎丘紹隆に嗣ぐ。

㋰黃龍派。

㋒昔し或人鼻の先に胡粉を塗ること蟬翼の如し、巧匠に之を削らしむ、匠人大斧を採つて兩腋風を生ずる、一拂一擊の下に胡粉を削り去り、鼻少しも傷つかず、莊子に出づ。

眞源は雪巢に嗣ぎ、草堂を以つて大父と爲す、故に平生の語言、挺拔して父祖の風烈あり。

隆首座㊀南山叟と號す、清源南安の人なり。壯歲遊方して、多く尊宿に見ゆ。罷參の後、業海の塔を禮す。偶に曰く、「業火煎熬して業海乾く。尙ほ劫石を餘して影團々たり。我れ來つて、笑ひ罷んで聲を呑んで哭す。昔日の船は此の處より翻へす。」癡鈍の塔を掃ふ偶に曰く、㋑「左苕帚柄時貨に背く。樹倒れ藤枯る舊陣圖。一代年來つて一代低し。灼然たり邪法實に扶け難し。」南山は、無隱、雙杉、荊叟と同じく、癡鈍に侍する、最も久しとなす。

西蜀保福の晦嵒暉㋒禪師は、通泉の白氏の子なり。嘗つて肇諾庵、道谷源、開掩室と同じく松源に參じ、密に眞要に契ふ。里に歸つて、三たび道場に主たり、遠近歸響し、道化益々盛なり。散夏の小參に云く、「大智洞明、十方融會、聲に騎し、色を蓋ふ、古に邁ぎ、今に越ゆ、寂默を以つて通ずべからず、語言を以つて造るべからず、是を以つて大覺世尊、摩竭提國に於いて、三七日中、口を啓く處なし。㋓四稜蹋地に至るに及び、盡力

㊀隆南山は癡鈍頌に嗣ぐ、頌は或庵に嗣ぐ、庵は此庵に嗣ぐ、此庵は圓悟に嗣ぐ。

㋑左音雖、禿なり此字豊通の字書に見えず、而し禪錄には往往見る處也、韋南紀談の後集に考證あり、左苕帚は「ちびり箒」なり、古所宗亘左苕と號し、其語錄を左苕稿と云ふ、日本永錄頃の人なり。

㋒晦、巢、道、閑、四人皆松源の法嗣、松源は虛堂の祖父にして人呼んで職翁と云ふ。

㋓四稜蹋地、死心蹋地、同意なり、落付く心なり、又舊盧都地の語あり、「くちばしをとがらす」なり、前と義別なり、今は前說に從ふ、四角の木材を地にねざせるを四稜蹋地と云ふ、心が落ちついてから種種の法門を演說せらる。

提持す。只だ箇の㋔是法非思量分別之所能解と道ひ得たり。又㋕是法不可示言辭相寂滅と道ふ。恁麼に揭示すること、譬ふるに斷崖の落石の若くに相似たり、看るもの眨眼を容さず。是の一念非を知るを除して、前後際斷し、全體荷擔し得去る。是れを眞精進、是れを眞法供養如來と名づく。一會の靈山儼然として未散なり。是の如く時々に禁足し、念々に護生せば、又何ぞ必ずしも九十日中に、無繩自縛せん。然も是くの如しと雖も、衲被頭を蒙ふて萬事休す、」と。此の時山僧都べて會せず。語悉く此れに類す。癡絕蔣山に在つて、其の錄に題して云く、「大隨和尙道ふ、「我れ七十餘員の善知識に參ず、大眼目を具するものは、只だ一二を得、其の他は皆正眼を具す」と。予三十年前叢林の中に在つて、晦嵒と游ぶ、當時大眼目を具するものは、松源一人のみ。歲次庚寅の仲秋、其徒寶日、東林に主たりし提唱の語を携へて、予に編次を乞ふ。是れに由つて帙を開いて縱觀するに、一字一句、造次顚沛も、皆從上大眼目の體裁あり、徒だに語言の末に從事するにあらず、是に知る、松源の道、盡く是に在るを。烏虖古を去る既に遠く、師法益々壞す、正知見のものすら其人に艱む、大眼目の者は知るべし。晦嵒の話は、吾が蜀に行はると雖も、此の錄江湖に流播せば、是れ斯道の㋖歃盟と爲すべし。若し善觀するものは、始めて吾が言の妄ならざるを信せん」と。癡絕も亦激する所あつて言ふ。

㋔非思量云云は、ああがうと合點分別してわかることでない。

㋕是法云云は、見せようにも見せ樣がない、言語道斷なりと。

㋖昔し春秋戰國時代には、盟約の書が出來ると、牛の左の耳を切つて血を出し各之をすすつて約束を勵行したり、歃はするなり。

福州聖泉の岳翁淳㋐禪師は、天麥軒持なり、夏に雪峯に坐して、重ねて鷲山閣を架するに値ふ。偈を作つて曰く、「夜半天崩れ地陷休す、一莖草上に瓊樓を現す、儂れ先後歩を同じうせずと雖も、月幌風櫺一樣の愁、」と。時に競ふて傳誦す。雲巢無準向きに嘗つて同行なり、皆誠敬心服す。叢林の間、議論鋒發すれば、㋑與に可否を決す。戲れに禪判官を以て之を呼ぶ。

潭州大潙の泉山㋒初禪師、字は子愚、陳氏の子なり。始め儒を業とし、鄉先生と稱す。後に趙州の語を看るによつて省あり、剃髮受具して、知識に遍參し、永木庵の高弟と爲る。嘗つて里の承天寺の僧堂に記して云く、㋓「承天の大僧堂、再造より百餘歲、外嚴にして中空す、人知る者なし、住持了空、其の壞れんことを揣つて、之れを新にす、施者は樂み、役者は悅び、半年ならずして成る。擁するに㋔照堂を以つてし、㋕明樓は前にあり、其の勞に任ずるものは道本從貢なり、秋より經始して事を冬に迄ふ。了空是に於て、徒を率ゐ入つて居す、寔に㋖嘉定六年十二月十九日なり。比丘大初記す」と。僅かに九十二字のみ。西山眞公是の郡を典り、見て喜び、後に湖南に在つて、專書して招く。潙山に住すること二十年にして寂す。

㋐居翁淳は枯禪に嗣ぐ、枯禪は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ。
㋑此處原本の句法を改む。
㋒泉山は木庵に嗣ぐ、木庵は懶庵に嗣ぎ、懶庵は大慧に嗣ぐ。
㋓此文原と九十二字、今譯して字數合はず、文の簡淨を識れば則ち可なり。
㋔照堂は僧堂の「眞後ろに」ありて光線の具合惡ければ成るべく高くして敞明を旨とす、是れは住持差支の時首座や立僧の代講する處なり。
㋕明樓は僧堂の前に在る樓架なり。
㋖日本の建保元年なり。

嘯巖蔚禪師衆に示して云く、「一年三百六十日、今朝は恰も是れ結交の時なり、且く道へ、天衣は甚をもつてか人と分歲せん、拄杖を拈じて云く、㋗一做さずんば二休せず、石虎を爛烹して泥牛を活剝す。已に是れ盤に滿ちて㋘釘出し了れり。拄杖を卓して云く、㋙三德六味、施佛及僧、法界有情、普同供養。若し是れ牙に粘し齒に滯るの漢ならば、應に家風の冷淡なるを笑ふべし。一咬に骨を見る底ならば、自然に樂んで以つて憂を忘れん。然も是くの如しと雖も、明年更に新條の在るあり、春風を惱亂して卒に未だ休せず。」嘯巖の語言は褊康長七尺八寸、美音氣、好容色、形骸を土木にして、自ら藻飾せざるも、人は以つて龍章鳳姿、天質自然なりと爲すが如し。鳥虖、敬せざるべけんや。

癡絕冲㋚禪師曰く、「予紹興壬子、峽を出でて公安の二聖に夏す、時に松源密庵の道を饒の薦福に倡ふ。旱暵にして衆を着くるに艱む。適々西湖の妙果席を虛しうす、松源雲居の首座曹源を擧げて選に應ず、亦密庵の嗣なり。其の入門の提倡を聽いて省あり、遂に誠を投じて住まる。未だ幾くならずして、侍司に歸す。甲寅の夏、曹源信上龜峰の命あり、復た其の行に從ふ。留ること三年にして淛を出づ。松源は虎丘よりして靈隱に遷り、遯庵は華藏に住し、肯堂は淨慈に住す、皆往いて之に從ふ。松源の靈隱に在るや、門庭孤峻にして、八たび月を

㋗せずば其れ迄、するなら突ぎり也。
㋘釘は釘の誤、看核を爲するなり、山盛にして出すなり。
㋙三德とは輕輭と淨潔と如法なり、六味とは苦酢甘辛鹹淡なり。
㋚癡絕は曹源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ。

閲して後歸堂を得。凡そ掛搭を求むるもの、必ず呵斥せられて、親くを得ず。一日忽ち曰ふ、『我れより ㋺八字に打開して、他を掛搭せしむるは、みづから是れ蹉過し了るなり。當下始めて知る、昔し龜峰に在ること三年、曹源の怒罵喜笑、皆爲人の方便なるを、此れより天下の老宿の、㋩到ると到らざると、我れを瞞じ得ざるを疑はず、』と。已にして緣に隨つて放曠す。曹源順寂の後二十年、人の爲めに推し出され、辨香敢へて忘れず、凡そ六處に聚まる所の兄弟、無しと謂ふべからざるも、只だ是れ ㋥驪睛の方を用ふるもの少し。苦なるかな、吾が宗喪びん矣。今年八十二、時節將に至らんとす、病を扶けて筆を執つて、直に得法の由を叙し、諸れを龕陰に刻して、以つて至信を昭かにす。㋭淳祐十年庚戌の歳なり。」鳥庫、癡絶は世に其機用㋬盤珠の如しと謂ふもの、且つ能く益々光彩を鏟り、其の師の殁後二十年に於て、方に瑞世す。眞に所謂、色の㋮まゝに斯に擧り、翔ふて後集るなり。九萬に摶つこと立つて竢つべきなり。名字他人の㋯夾袋中に入るを肯はず、其の識又人に過ぎたり。所以に聲一世に轟き、中峯の道を起せり。亦驗此にあり。曉に吾が宗の喪ぶるを以つて憂となす。此れを聞いて痛心せざるを得る者あらんや。

㋺悉學の希望により壓すべきものにて、我れより門を八字に開きて他を掛搭せしむべきにあらずとの意ならん。

㋩到る到らざるは、既に行きしと未だ行かざるとの意ならん。

㋥驪睛は韜晦の意、此嘆古今一徹なり。

㋭淳祐十年は建長二年なり。

㋬白樂天の琵琶の音を形容するに、大珠小珠玉盤に跳るの句あり。

㋮論語鄉黨の篇にあり、下の句を採りしならん。

㋯夾袋は袋入れなり、呂蒙正夾袋中に册子あり、四方の才人の名を分類して之を疏し、朝廷賢を求むれば之を夾袋に求む。

絶照鑑㋩禪師測より歸る者に因つて上堂して云ふ、「相別るゝ一に何ぞ久しき、相逢へば只だ舊時、眉毛は八字に分れ、鼻孔は大頭に垂る。諸方鍋兒の大小、杓柄の長短、直に是れ他を瞞ずること一點も得ず。且く道へ、鎭州の㋥蘿蔔頭、無底の㋦籃に幾箇を盛り得たる。」喝一喝。冷を待つて來り看ることを放す。上堂に云ふ、「古佛と露柱と相交ること第幾機ぞ。南山雲を起し北山雨を降す。㋨金剛土地神のために背を揩ること、一擦して骨出づ。謂つべし、家の貧なるゝ、猶ほ自ら可なり、路の貧なるは、人を愁殺す。汝諸人面を仰いで天を看、口を開いて氣を取る。這箇の消息に非ざるはなし。甚によつて不覺不知なる。若し也知り去らば、三世の諸佛身を容るゝの地なからん。苟も或は未だ然らずんば、乾元口を留取して飯を喫せん。」拄杖を卓して下座。大抵の宗師家と吐露自ら㋧迥別なり。然りと雖も、須らく是れ言說の相を離れて、方に老絶照の用處を見ん。

石田薫禪師、初めて潭州に到り、石霜の㋡雷遷塔を禮す。偶に曰く、「一念の慈容元隔てず。何ぞ須ひん、特地に肆に㋪乖張するを。高きを平げ下に就いて、婆心切なり。雷公を惱し得て、一夜忙はし。」名此れによつ

㋩絶照國鑑は觀物初に嗣ぐ、初は北磵に嗣ぐ、磵は佛照に嗣ぐ、大慧下絶照宗鑑とは別なり。

㋥大根なり、饅州の大根は尾張大根の如く名物なり。

㋦途に死蛇に逢ほど打殺することなかれ、無底の籃子に盛りもち來れの古句あり。

㋨二王さんが土地神の背を擦すると、骨がによつきりと出た何あんのこつたい。

㋧また迥然別なり、作る處もあり大に相違するなり。

㋡道吾の諸禪師期望必す石霜の塔を拜す、相去ること百二十里、老に至るも輟めず、偶〻一夕大雷雨あり、塔自ら遷就す、故に雷遷塔と云ふ。

て彰る。破庵に蘇の穹隆に見ゆ。室中に世尊拈花を擧するを聞いて、答へて曰く、㊁「焦塼打着す連底の凍、㊀赤眼撞着す火柴頭、」と。菴之れを奇とす。石田嘗つて僧馬祖に問ふ、如何なるか是れ西來的々の意を拈じて、雲巢癡絕爲めに擊節す。傳へて徑山の老佛心に至る。亦云ふ、老僧只だ㋐路を避くるを得んのみ。

眞淨大師德英は、建溪の楊文公億五世の女孫なり。性聰にして、善く傳く會す。達庵により、四威儀の中に於いて悟入あり、徑ちに徑山に上り、佛照に投ず。應對飛蓬の風に隨ふが如し、照許すに㋑再來の毒種を以てす。後に蘇の朱明に說法し、常の淨慧に㋒委蛻す。自讃に云ふ、「みづから贊して贊し出さず。みづから畫いて畫けども成らず。箇の本來の相あり。如何んか人に呈似せん。活潑々、本無生。鼻孔は依然として上唇に搭ず、」と。叢林之を傳ふ。癡絕其の錄に跋して世に行ふ。

月窟の淸㊂禪師は、福州福淸の人なり。㋓少長のとき、因に鄉閭の者の焚化を見て、乃ち曰く、「我れ願はくは作佛して、猛火の爲めに燒かれず」と。火母之れを訝る。十四歲、許して以て出家せしむ。湖州の何山に往く、復庵法器たるを知つて、落髮受具せしむ。久しうして

㊀乖張は「はだはだ」になるを云ふ。
㊁焦塼は燒けた瓦、連底は底の底迄、撞着は「つきあはす」なり。
㊂鼈の目は赤き故鼈を赤眼と云ふ、赤眼がたいまつと撞着した、成程面白い下語ぢや。
㋐路を避くるは遠慮して一頭地を拔かしむるなり。
㋑生れかはりの命とり。
㋒委蛻、委順、順寂、順世は皆死なり。
㊂月窟は華藏の宗演に嗣ぐ、演は大悲の法子。
㋓少長は「幼き」なり、治亂大小長短も時に偏用す、焚火は火葬なり。

所證なく、寧息に遑あらず。一夜僧堂中に、琉璃燈を放つを見て省徹す。偶を述べて曰く、「琉璃放下し、また放起す。一點の光明常に已まず。若し人這の光明を識得せば、㊃姐々は元來是れ阿姉。」遯庵に華藏に謁す、開室に値ひ、欣躍して進む。復た踵を旋して曰く、「我れは是れ無罪の人、這の地獄に入らず」と。後遯庵と酬酢し、水乳相合す。嘉定の間、江右の憲使、陳公貴謙、臨汝の天寧を以つて之を延く、何山の請に赴くに及び、道聲益々著はる。平生氣剛介を尙び、㋔諭合苟容を厭ひ、多く人を面折す。叢林之が爲めに肅整す。此れ大法を衞護するものゝ然るべき所なり。

淸烈庵主は天台の人なり、臨安の餘杭縣、湖西山の煐氏庵に居る。年已に九十、㋕昏瞳眊瞀、晝夜惟だ枯坐す。將に示寂せんとするとき、蔬飯を具し、村落百餘人を會して、相訣の語を述べ、同じく山頭に詣り、㋖引手長揖して、龕に入つて趺坐し、偶を說いて曰く、「這の漢無知、是と說き非と說く。拳頭竪起、佛も也窺ひ難し、」と。化火してみづから焚く。頂と、兩肘と、兩膝の、五處より熾然として三昧の火光を起し、五色璀璨たり。堅固舍利計ふるに勝ふべからず。寶所山主、能く詳かに之を言ふ。烏摩淨性の心宗は、常光熾然たり。無壞無雜にして法界に周遍す。故に烈公死生の際に遊戲すること此くの如く奇特なり。豈平生履踐の明驗に非ずや、㋗

㊃姐姐は姉なり、阿姉は姉なり、矢張り泣く時には「ぎや」と云ふ。
㋕「ぬらり」「くらり」となまこの樣に世を渡るなり。
㋖「ひとみ」が「サルミ、」目がぼんやりするなり。
㋗引手は長揖の形容語なり。
㋗提多迦は天竺傳法の第五祖なり、示寂の時遺偈を說き了つて、身を虛空に騰して十八變をなし、三昧火を發して自ら其身を焚く。婆須密は遺偈を

抑抑提多迦、婆須密の發現か。

諸庵元肇㋐禪師、師範規とすべきあり、道に精一なり。雪に因つて上堂に云く、㋑「普賢昨夜醜を呈し、一片の寒光畫の如し。憐むべし妙用の些子。石人を引き得て失笑せしむ。且く道へ箇の什麼をか笑ふ。㋒金烏飛んで欄干に上る。看よ儞が一場の漏逗。」仲冬嚴寒年々の事を頌して云く、「野老元來放懷を解す。兒孫更に酒を以つて相陪す。只だ知る好景の長時に在るを。覺えず老は頭上より來るを、」と。師に愧るなし。昔し諸庵開掩室と與に、伴を結んで松源に參ず、源も亦針箚に倦まず、故に盡く其妙を得たり。是れ賢師友無かるべからざるなり、後學の法と爲すに足れり。

漢陽軍鳳棲の古月祖照㋓禪師、生緣は東川廣安の趙氏なり。祥甫山主を禮して落髮の師となす。敏にして㋔疾見、遍く講肆に遊び、至る所㋕席を奪ふ。忽ち所習を棄てゝ、閩を歷て浙し、㋖肯堂に依り、狗子無佛性の話を明得す。のち破庵の室に入り、其の㋗直視の勢を作すを見て、乃ち咄して云く、「野狐精。」破庵劈耳に一掌して云ふ、「畢竟是れ者箇の道理にあらず。」また應聲して曰く、「野狐精。」破庵また一掌を與へ、示すに偈を以つて

戢き了つて三昧に入り涅槃の相を示す、天竺傳法の第七祖なり。

㋐諸庵は松源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ、密庵は鹿庵に嗣ぎ、鹿庵は虎丘に嗣ぐ、虎丘の師は圓悟なり。

㋑普賢は白象に騎る。

㋒金烏は日光なり、日中に三脚の烏あり。

㋓此人世系肯堂下にも破庵下にも無し、未詳。

㋔疾見は蓋し五行並べくだると云ふ如く、書を讀むの速かなるを云ふ。

㋕席は他人の席なり、義通ずれば通ぜざるものの席を奪ふ、昔し斯くして五十餘席を奪ひし者あり。

㋖肯堂充禪師、上卷に出づ。

㋗目をさか立てて見すゑるを直視と云ふ、仍つてこの「ばけものめ」と咄せしなり、劈耳は耳へ掛けてほり飛ばすなり、畢竟の二字古來不明とす、蓋し畢竟歷歷を早口に言ひしならん。

㋘識に結構な御垂示なり、破庵も意氣込は買ひしなり。

㋙謝郎は支沙和尚なり。

㋚日本寛元四年なり。

㋛警地は「ちらり」とした、摩竺は目を「こする」なり、阿底は「おやぢ」なり、底と爹と同聲、警は過目なり。

㋜張載字は子厚、橫渠と號す、虎皮を徹して二程に學びしは儒林の佳話なり、東銘西銘等の著書あり。

して云く、「一掌幾たびか曾つて痛痒を知るや。頭を回らし、腦を轉じて口喃々たり。直饒舌は風雷の疾きに似たるも、㋝也落つ機前の第二三、」と。

照嘉定の間、唐興の聖果に出世す。後に鳳栖にあり、室中に三句を垂れて學者を驗す。一には和煙釣月の句、頌に云く、「煙水茫々として釣艇橫ふ。日盈月昃未だ分つべからず。㋞謝郎は是れ絲綸の客ならず。爭でか免れん時人の見聞を錯るを。」二には、截水停輪の句、頌に云く、「正眼豁開すれば天地窄し、機輪停まる處海濤乾く。等閑に拶出すれば驪珠現ず。無限の邪魔心膽寒し。」三には、不入驢耳の句、頌に云く、「儂が家の一句三句を分つ。馬を見、牛に逢ふて、伊れに擧似す。只だ此れ更に親切の處なし。眼中に聞き得て始めて應に知るべし、」と。順世の時、後事を以て侍郎楊公恢に囑す。曰く、「子徵つせば、孰れか予の心を知るものあらん」と。楊公之が爲めに嗟嗟して食を輟め、特に其語に叙して謂く、「脊骨の硬きこと破庵に減せず」と。

寒齋林公公遇、晩年世俗を遺外し、宗門に造入す。齋傍に隙地あり、草庵を架し、以つて少林の誠公を延き、而して風日佳時必ず之を過ぐ。二子同と合とは侍立して其の談論を聽く、余間々果藏主と庵に到り、亦竊かに預る。㋟淳祐丙午九月、公疾を以て家に卒す。且つ偈を書して云ふ、「五十八年の

熟睡、且喜すらくは今朝㊁瞥地なるを。試みに老眼を將つて摩挲すれば、只だ這の阿底便ち是。」㊂張横渠亦云ふ、「學者但だ心識を養ふて明淨なれば、自然に生死存亡を見るべし、胷中瑩然たること疑なし、寒翁之を得たり」と。

龍溪閒禪師、初め遊方して南康に至り、雲居に詣で、半嶺に至つて、笠頭風の爲めに掀げられ、嶺に沿ふて下り、笠所に尋ね到つて省あり。常の保安に住し、孤硬清約なり。僧問ふ、「如何なるか是れ和尚爲人底の句。」溪曰く、「鵝鳩枝上に啼く。」僧曰く、「某甲不會。」溪曰く、「鼓已に堂前に響く、喫飯し去れ」と。無準謂ふ、「徑にして直、簡にして峭なるものなり」と。頃ろ龍溪の道一方に重く、衲子響ひ臻つて、堂中の被位鱗次す。夏旱に丁つて未だ解制せざるに多く起單す。溪曰く、「道ふなかれ、諸人の拄杖子跨跳す」と。後の五日に、山僧が拄杖子も亦跨跳せん、越えて五日、沐浴陞堂し、方丈に歸つて坐亡す。茶毘して設利を迸らす、五色のもの計るなし。保安の耆宿しか云ふ。

呂翁淳禪師は福の石呂の人、賦性㊄好奬、人の善を稱す。晩進は力を悉して薦藉す、未だ開法せざる時、妙語已に叢林に遍し、慶成に住する跼室に云ふ、「這裡に打開し、那邊に塞路す。甚に因つて此の如くなる。膏肓を活し必死を起す。」道舊に謝するに云ふ、「劍池の邊り松峰の下、幾度か同じく歩して、懸崖に至り、驢兒を牽き得て、喚んで馬と作す。」喝して云ふ、「是れ何の語覇ぞ。」又云ふ、「二月初一、好箇の消息。桃花愨だ紅に、李花愨だ白し。劍池邊の㊆楊大伯、笑中に攔腰白を打失し、直きに如今に至つて尋ね得ず。」喝して云く、「甚の交渉かある。」又云く、「冷坐して㊇枯椿を守り、身を轉ずる底なし。多くは是れ時に違ひ候を失ふ。一回寒骨に徹し、親しく暢快する底ならば、十分に和氣春風。衲僧家兩眼鈴の如く、斗を嗔り地を唱り、神機を翫弄し、風雲自ら異なる。儘數酒を酹り㊈錢を燒き、低頭して歳を賀せんには。風は蕭々たり。墻頭に桑條動き、柳條最も苦む。北禪は村田樂を唱へ、露地の牛を烹、波々絜々。伊れを奈何せん。人を惑き得て皮角を收め、笑裡に刀を藏す。咄、清平世界に干戈を用ひず。」之を誦すれば、㊉玉粘を飲むが如く、自然に漿苻を薄んぜしむ。於戲、枯禪は其傳を得たりと謂ふべし。了に知る、法乳の一源、異味なきことを。

㊀好奬とは人を推奬するを好むなり。

㊆楊大伯は役者の名、攔腰白は役者の「こし」に卷くものならん。

㊇椿は橛也、枯木のかぶを枯椿と云ふ。

㊈紙錢を燒くなり。

㊉玉粘は飴なり、漿苻は菜の汁なり。

㊊絲を「ふたこ」によりてすぎはひとす。

㊋當時僧膳を得るには錢を要す、之を檀施に仰ぎしなり。

㊌龜山は陳沈二和尚に成る、陳は初代、沈は二代なり。

㊍楷撫は楷模に同じ、手本の意。

辟支巖主立堅は、三山漁溪の人なり。初め雙㊋線を以つて活となす、俠ちに省覺して、應林山中に入り、粮を休めて大樹の下に居る、妻子之を追捕すること急なり。遂に髮を剪り、莆の甕山を過ぎ、辟支巖に遁る。後に亦㊌檀施に從つて僧と爲る。淳祐の間、郡主林公希逸延くに㊌龜山陳沈二禪の道場を以てす。迫つて後に就く、未だ幾くならず、舊巖を思ひ、同道に書を與へて云く、「夫れ住持と稱するものは、衆の㊍楷撫

となり、佛に代つて化を揚ぐるなり。我れに道德言行の譽れなく、未だ仁義禮法の㋒由を知らず、草庵麻衣木食磵飲すら、且つ以て愧と爲す。人前に推向せば、實に何を以てか堪へん」と。衣を拂つて徑ちに歸る。堅の出處、緇林に於いて亦助けありと、しか云ふ。

東谷光㋓禪師は、風神清拔にして、精識あり、祚明極に見え、實齋蔣公と法喜の遊を爲す、蔣、西庵の三偈を錄して以つて寄す。和酬に云ふ、「道ふこと莫れ西庵小なりと。了に㋔邊と表となし、還す他の親しく至り來るに。一一方に分曉なり。」「道ふことなかれ西庵靜かなりと。鐵牛吼聲震ふ。露柱と燈籠と、點頭相共に應ず。」「道ふことなかれ西庵窮まると。空を呑んで復た空を吐く。㋕金粟老に相逢ふて、臘月に春風を鼓す。」靈隱に住す。已にして㋖罷勸して澄然たり。東澗の湯公祭るに文を以てして曰く、「維れ東谷師、㋗昂然たる鶴質、冷泉の主となつて、曾つて多日ならず、病を示すこと已だ早く、滅を示すこと何ぞ疾きや。我れ乍識なりと雖も、口を開きて實を吐き、問訊殷勤、迹は疎なるも情は密なり。忽ち手書を遣り、㋘古畫名筆、聿に來つて行を告ぐ。之れを覽て自失す、諦かに點畫を見るに、宛然として逍遙なり。是れ過量の人は、生死齊一なり、而も我れ凡情にして、悲涕爲めに出づ。雪は湖山に滿ちて、羸馬叱し難し。聊か辨香を持して、往いて其室を弔ふ、」と。一時の講道相往來するもの、皆名公卿なり、是れを

㋒由は義と同意ならん。
㋓東谷妙光は明極に嗣ぐ、極は暉自得に嗣ぐ、得は宏智に嗣ぐ、智は丹霞淳に嗣ぐ、曹洞下。
㋔邊幅なく表裡なし。
㋕金粟老はお釋迦さま。
㋖寺務に疲れて示寂す。
㋗風神清拔と云ひ、昂然鶴質と云ふ、皆身體瘦せたるを云ふ。
㋘蓋し遺物ならん、遺物を送り來つて圓寂を告げしなり、生前に死後の事を處理せしなるべし。

し。㋙同人門に手てすと曰ふ。

蒺藜曇㋚禪師、初め湖州の普濟に居る。荒寂にして傳舍の如し、夙夜にみづから㋛聖僧に對して、坐禪すること凡そ九年、後に蘇の穹隆に住す。門風愈々高峻にして入者有るなし。室中常に云ふ、「穹隆に句子あり。裨子下語と不下語と。一例に打罵せん。」無準時に會中にあつて藏主となり、少しく忤ふて趣ひ出さる。且曰く、「他をして徑山に住し、却り來つて老僧に見えしめん」と。後無準徑山に住し㋜遺漏によつて吳門に行丐す。蒺藜猶ほ虎丘にあり、二老相見て撫掌大笑す。

鎭江府金山の掩室開㋝禪師は、成都の人なり。講肆に遍歷し、忽然として樂まず。嶺を出でゝ大事を了せんと欲す。樞使安公亦勉むるに、偶を以つてして曰く、「吾れに大患あるは身あるが爲めなり。是の身假合にして亦眞にあらず。維摩の病を示すは元病にあらず。好し南方に向つて、更に問津せよ。」室番陽の東湖に抵つて、松源の開室に値ふ、「明眼の裨僧、什麼によつて、鼻孔を失却す。」と擧するを聞いて、言下に領解す。一日連案の僧、其の看經するを見て、問うて曰く、「向後得㋞座披衣せば、如何んか爲人せん。」室經を將つて僧に度與す、僧經を將つて案に擲

㋙易の同人の卦初九の語なり、剛陽の德あり、門外に交はるに其德をかへざるなり。
㋚蒺藜曇は松源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ、密庵の師は應庵なり。
㋛聖僧堂內に祭れる文殊大士なり。
㋜寺院敗壞して雨漏るなり。
㋝掩室は松源に嗣ぐ、源は密庵の法嗣、密庵は應庵に嗣ぐ。
㋞得座披衣とは一方の宗匠となるを云ふ。

うつ。室復た取つて朗聲に誦す、僧休し去る。㋓嘉泰辛酉、始めて廬山雲居の請に赴き、未だ幾くならざるに金山に補す。藍田の法語の如き、皆參禪の捷徑なり。平生接する所の人、獨り㋺佛海を得て、大いに松源の道を昌にす。

雙杉元㋐禪師踞室に云ふ、「報恩の方丈、百無一有。爲人を贏ち得て、㋒推門入臼。」示衆に云ふ、「衲僧家は月の大小と歳の閏餘を知らず、三角の粽子を喫着して、便ち道ふ是れ端午と、忽ち報恩に一日を移上せられて、他に背いて只管半信半疑す。今朝舊に依つて盞茶を點じ、伊れに與へて口を濕さしむ。驀然として菖蒲を咬破して、一身の冷汗を出し、失聲して道ふ、啞、㋕福建子、人を激惱殺す。大衆、這箇は豈に是れ通靈の藥にあらずや、三十年後切に忌む拈却するを。」嘗て三門に入つて云ふ、「鬧市門頭に箇の入處あり。只だ諸人の爲めに㋖見頑了也。新長老は行に因つて掉臂を妨げず。」大衆を顧視して云ふ、「我に隨ひ來れ。」雙杉只だ目前に據つて、手に信せて拈じ來つて、㋗耆黃の妙劑に非ざるなし。換骨の法、起死の方、何ぞ必ず他に覓めんや。

荆叟玨㋘禪師、夏を靈巖になす、時に癡鈍其れに狗子無佛性の話を看せしむ、言下に旨を領す。因つて潛無隱と㋙通吐す。無隱曰く、「是なることは則ち是なり、只だ是れ命根未だ斷せず、更に須らく出で去つて、人を見て、始めて得べし。」且つ其れに囑して㋚淳庵に謁せしむ。叟、華藏に至つて半年、所得なし。一日忽ち火板の響を聞いて、凝滯釋然たり。淳庵に告ぐ、庵卽ち鼓を鳴して開室す、叟趨り入る。庵問ふ、「如何なるか是れ佛。」叟曰く、「野花開いて路に滿つ。」問ふ、「如何なるか是れ法。」叟曰く、「私酒醉人多し。」問ふ、「如何なるか是れ僧。」叟曰く、「鉢盂口天に向ふ。」庵曰く、㋛「未在出去。」後に叟癡鈍の室中に在つて、如何なるか是れ佛と擧するを聞いて、震聲して答へて曰く、「爛冬瓜。」且つ偈を述べて曰く、「如何なるか是れ佛、爛冬瓜。氷霜を咬着して齒牙に透る。根蔕然く窖子なしと雖も、一年一度一たび花を開く。」荆叟衆に處る時、無隱雙杉の力を得ること尤も多し。

福州雪峰の㋝北山信禪師は、本州の人、性方嚴にして、機は迅敏なり、初學之に見ゆれば、應對多く失す。次いで鼓山に在る時、僧あり相看す。山問ふ、「近離甚れの處ぞ。」僧曰く、「西禪。」山曰く、「西禪に何の言句かある。」僧曰く、㋟「話墮せり。」山曰く、「儞甚れの處より這の些子を學得し來る。」僧曰く、「今日㋠不合に和尚に觸忤す。」山拄杖を拈じて便ち打つ。僧拄杖を奪つて、㋡軒渠大笑して出づ。遂に請じて茶を喫せしむ、是れ老宣首座なりと傳

㋐日本の建仁元年なり。
㋑石溪心月禪師佛海と諡す。
㋒雙杉萬庵柔に嗣ぐ、中卷出。
㋓臼は門樞の下の「うけ」なり、門を推して臼に入れたりとの緣語。
㋔雙杉は福建の人。激惱殺は人を上げたり下げたりやくたいにするなり。
㋕見頑了は「大層六づかしくなる」なり。行に因る云云は步むたびに手を掉ふなり。
㋖耆婆、黃帝調合の妙藥。換骨脫體起死回生の手術。
㋗荆叟は癡鈍に嗣ぐ、癡鈍は或庵に嗣ぐ、或庵は此庵に嗣ぐ、此庵は圓悟に嗣ぐ。
㋘通吐は自狀するなり、潛無隱に本領を話せしなり。
㋙淳庵は上卷に出づ。
㋚未在出去はらちあかぬ出て往け。
㋛北山信、月窟に嗣ぐ、月窟は遯庵演に嗣ぐ、演は大慧に嗣ぐ。
㋜話墮は話しに取られたと云ふ文字なり。
㋝不合は思ひ掛けなくの意、觸忤は御無禮しましたなり。
㋞ほがらかに笑ふを軒渠と云ふ。

へて去る。初め北山、月窟と同じく浙を過ぎて遯庵に華藏に見ゆ。月窟先づ契證あり、故に山吝決を得るの後、里に歸り、明晦堂を訪ひ、鼓山に分座す。漳の守趙公以夫、其道を聞いて、南寺を以て之を招く。山遜謝して曰く、「公之を聞くこと過てり」と。使者三反して乃ち行いて開堂す。同行月窟の爲めに拈香す、時論之を高しとす。

枯禪鏡禪師、天資淡薄にして、一も嗜好なし。惟だ衲子と提撕敲磕して倦まず、「如何なるか是れ祖師西來意」と問ふものあり、枯禪禪床を打つこと一下す。「今の人、語言千百を吐露するも、皆前輩の地位に到るを得る能はず、且く利害什麼の處にある、會す麼。」

癡絕の沖㊐禪師、嘗つて福州雪峰の請に赴く。尙書陳公韡と㋒宿素の雅あり、招いて私第に飯し、項王の像を以つて讃を求む。卽ち筆を拈じて書して云く、「拔山は力にあらず。蓋世は氣にあらず。八千の子弟、同じく謀り共に濟ふ。人皆謂ふ天下は大器。力を以て爭ふべからず。必ず仁義を先にせよと。殊に知らず天其手を假つて以て暴秦を誅し、然る後寬仁にして人を愛するものに帝たらしむ。吁、其れ亦斯の世に補あり、」と。公大いに之を奇とす。癡絕慧辯恢廓なり、此れ特に㋓緒餘のみ。

介石の朋㋔禪師は秦溪の人、性高簡なり。僧曰く、「寶劍未だ匣を出でざる時如何。」答へて曰く、「杜鵑鳴く處花狼藉たり。」僧曰く、「匣を出でゝ後如何ん。」答へて曰く、「人をして長へに㋕李將軍を憶はしむ。」僧曰く、「出と未出との時如何ん。」答へて曰く、「劍去つて久し㋖汝方に舟を刻す。」解夏の夜參に曰く、「九旬の禁足、禽を網して巢に宿せしむ。三月の安居、狐を驅つて塚を守らしむ。生殺不到の處に向つて、三頭六臂を見ん。圓覺伽藍を掀翻するも、猶是れ樁を抱いて㋗泊浮を打す。雲黃山前の㋘雙檮樹下、九十日の內、風は時を以てし雨は時を以つてす。一六時中少も添へず多も減せず。一年三百六十日、日々に安居し、時々に自恣す。圓なるものは自ら圓、方なるものは自ら方、長なるは自ら長、短なるは自ら短なり、未だ淨地に塵を揚ぐるを免れず。畢竟如何ん、大鵬翅を展べて天路遙かに、巨鼇身を轉じて海水窄し。」示衆此に頹す。晚年杭の冷泉に寓し、其室に扁して青山外人と曰ふ。㋙景定の間、丞相秋壑賈公、尤も佛法を崇敬し、爲に奏す、旨を得て㋚淨慈に住す。後其席を繼ぐもの、皆澗東より起る。

石田薰㋛禪師曰く、「薰上座の靈隱に住する、亦是れ奈何ともせざるなり、人に東に拶し西に拶せられ、禪床角頭に拶到して、回避し及ばず。只得祖師の爲めに、箇の門戶有らしめんとし、㋜面皮を劈破して出で來る、喚んで此の地に朱砂なし、㋝赤土以て上と爲すとなす。然りと雖も、今時を看却せ

㊐癡絕、靑源に嗣ぐ、密庵下。
㋐宿素の雅は古きなじみなり。
㋓緒餘は一端と云ふが如し。
㋔介石禪師は浙翁琰に嗣ぐ、琰は佛照光に嗣ぐ、光は大慧の法嗣。
㋕李廣、刀折れ矢盡きて胡に降る。
㋖舟を刻して劍を求むるを拈す。
㋗泊浮、水を游ぐなり、木の株を以て游ぐは尙ほ尼弁物が涵ふて居る、自由の場に至らざるなり。
㋘二本の枯木、蓋し實兼ならん。
㋙南宋理宗の末年なり。
㋚淨慈は代代浙翁の法系住持す、浙翁の塔は澗東にあり。
㋛石田は破庵に嗣ぐ、應庵下。
㋜面皮を劈破するは恥を忍ぶの意、上卷に出づ。
㋝丹沙なきを以て赤土を用ふ、赤土も無了して泥となり土となる、一代は一代よりも低下するなり。

ば、漸々に赤土も亦無了し、漸々に泥を食ひ土を食はんとす。說着すれば、眞箇に人をして寒心せしむ、」と。噫、道に志すもの、此を聞いて當に如何すべき。

雙杉元㊀禪師は、嘉熙の間、乃ち石田堂中の第一座なり、丞相に上る書に言ふ、朝廷の新指揮、師號金環象環を買ふは不便なり。書に云ふ、『正月十三日、景德靈隱禪寺、前堂首座、前住持嘉興府天寧寺の僧中元、謹んで薰沐して、書を樞使、大丞相國公に獻ず。竊かに以爲らく、佛老の敎は救世の計なり、其の儒道と天地の間に相參る所以は、能く性眞を開悟し、邪見に墮ちざるを以つて、其の功量り易からざればなり。我朝の太宗皇帝嘗て曰く、「釋氏の道は敎化に補ひあり」と。孝宗皇帝も亦曰く、「佛を以つて心を修め、老を以つて身を治め、儒を以つて世を治めば、斯に可なり」と。張文定謂ふ、「儒道淡薄にして、一時の賢聖盡く釋氏に歸す。而して關洛の諸公も、また必ず釋氏の書を玩味して、後能く㊁洙泗不傳の祕を接續す」と。然して、敎は必ず主あり、必ず師あり、國家度牒を以て人の承買を許す。凡そあらゆる僧は、各〻師を尋ねて以つて歸依をなす。師苟くも道行あらば、則ち迷者は悟り、塞者は通せしむ。其の世敎を裨助する要らず小補にあらず。近世は貨賂公行し、住持たるを求むるものは、吾が敎の罪人なり。若し以つて例して傳へば、天下の賢者は深藏遠遁せんのみ、其れ出でゝ師たるを肯はんや。夫れ師廢すれば則ち正法微なり、正法微なれば則ち邪法熾なり、

㊀元雙杉萬庵に嗣ぐ、應庵下前出。
㊁洙泗は二水の名、孔子此間に敎授す。

清淨の門を以てして、利慾㊄交々征るの地となすは、國家の福にあらざるなり。譬ふるに家熟黨庠の師なき能はざるが如し。其の能く道を傳へ惑を觸く者の、之を爲すを求めずして、惟だ賄を是れ視ば、則ち弟子何を以てか仰がん。孔門の敎亦熄むに幾し、佛老の道も何を以て是れに異ならん。若し佛老の徒、身大厦に居り、日に膏腴を享け、蠶せずして衣、耕さずして食ひ、世の嫉む所と爲ると謂はゞ、然く天下の人、世に無用にして、坐して膏腴の奉を享くる者ある尤も多し、何ぞ獨り僧道のみならんや。寺觀の創立常住の供養は、官の之を與ふるにあらざるなり、以ふに衆人の樂施して之を與ふるなり。寺觀に田あれば稅賦尤倍し、又㊂非泛不時の需あり、正に㊃大家と相似たり。今既に度牒を買ふに錢を以つてし、㊅丁を免ずるにも又增すに錢を以つてす。官府は絲毫の給無くして、徒に其の利を無窮に責む、則ち僧道は謂つべし不幸なりと。國家名器を愛惜すること泛濫ならば、何を以つて天下を勸勵せん。僧道若し賄を以て金環象環を得て、諸處の住持たるを得ば、則ち㊆囂頑無賴の徒、皆賄を以て進まん。何を以て風俗を整齊せんや。況んや寺觀多しと雖も、其常住闕乏のもの甚だ多し。縱令此の令一たび行はるゝも、第能く率ね寺觀の大なるものに斂して、其の小なるものは亦豈能く其需に應せんや。此くの如くなれば、則ち得る處幾何ぞ。況んや僧道能く自ら己の財を出すにあらず、住持た

㊄孟子に上下交征して國危しとあり。
㊂非泛不時の需は臨時の誅求なり。
㊃大家は豪富なり、寺院の取立富豪に准ず。
㊅兵役免除の爲めに錢を收めざるべからず。
㊆「れぢけもの」「ならずもの」を囂頑無賴と云ふ。

るを求むる、必ず將に之を寺觀に取らんとす。師徒相殘ひ、常住必ず壞れん。所謂膏腴㊂は將に蕪穢を見んとす、所謂大厦は將に丘墟を見んとす、所謂溫飽は將に凍餒を見んとす。都には牒ありと雖も、誰れか將に之れを請けん、歲に丁ありと雖も、誰れか將に之れを㊃輸せん。今日の軍需は本を糴して諸穀を秤提す、爵を鬻ぐにあらざるなし。爵を鬻ぐものは或は國に累あり、牒の多きは官に病なし、乃ち一時不卹の事に從つて、千載の利源を剉喪せば、殆んど理財の長策にあらざるなり。伏して觀れば、近ろ指揮を降し、錢を增して爵を鬻ぐこと、識者之を病み、事果して行はれず。㊁總所今來の陳請は、正に亦此に類す。伏して望むらくは、鈞慈利害を詳酌して、敷奏盡行あらんことを。服號の命を寢罷し、僧道に幸甚に勝へざらしめよ、伏して惟みるに鈞慈、俯して鑒念を賜へ、不備。』時に江西の粲無文も亦書あり、是れより先、朝省總領岳柯の奏に因つて、紫衣師號の二等を降し、金環象環幷に四字禪師の法號を賜ふて、以つて大寺觀に住し、服師號の綾紙を賜ふ毎に、三百緡を出賣して、仍つて品官條制に附し、官あるにあらずんば差注するを得ず、賜服あるにあらずんば、住持を得ざるべきを乞へり。此の書上つて、事果して寢む、豈大法を祕護する者の用情にあらずや。雙杉の住山能く枯淡を極め、行道に專一なること、機簡堂の如く、私居暗室に居ると雖も、大賓に臨むが如きは、證老禪

㊂膏腴は肥えたる地、蕪穢は荒れ地、丘墟は家跡なり、凍餒は「ひもじがる」なり。
㊃輸は金錢を輸入するなり。本は現金。糴は取入るるなり、其れに對する手形を渡すなり。
㊁總所は總領。
㊀官度の任用例に準ずるなり、差注は善向くるなり。

に似たり。此れ亦哲人の身を律する、また微細に見ゆるものなり、賢なる哉。

枯椿曇㊄禪師、清介寡言、㊅瘦坐竟日す。越の大禹寺に開法す。亦澗東より出づ。僧問ふ、「和尚未だ佛心に見えざる時如何ん。」答へて曰く、「人貧なれば道に歸す。」問ふ、「見て後如何ん。」答へて曰く、「色窮つて㊆皂に歸す。」嘗て擧す、「現成の公案道ひ得るも三十棒、道ひ得ざるも也三十棒」と。侍僧曰く、「望むらくは師慈悲、箇の方便を開け。」答へて曰く、「將に謂へり、儞は是れ箇の出廬の良駒」と。僧省㊇あり。枯椿は闘の人、後に姑蘇の虎丘に住す、緇素翕然として之を宗とす。

雲巢巖㊈禪師、訓學倦むことなし、且つ能く節を折つて士に下り、慰藉良に厚し。雋彥之れに歸す。開爐の日、示衆に云く、「是句も亦刻り、非句も亦刻る、雪峯は輥毬、睦州は擔板、惟だ趙州老漢のみあつて、火爐頭に向つて、香匙火筯を拈起して、東撥西撥す。忽ち一塊を撥ひ得たり、恰も是れ饒州の景德、人家の壁角頭、多年の破磁碗、三世の如來、只管に見る、」と。㊉運庵曰く、「此の語酷だ父翁の松源に似たり。」

南翁明㊋禪師、初め入衆の時、便ち能く決志參禪す。嘗つて天台の石橋に宿し、異僧に遇ふ、指して老佛心に見えしむ。翁太白に至り、誠を投じて其の法席に預る、然れども室中纔に口を開けば、

㊄枯椿曇漸翁に嗣ぐ、翁佛照に嗣ぐ、大惠下。
㊅瘦坐は兀坐の意ならん。
㊆皂は黑なり。
㊇此坊さん自分が厩を出て居るに氣付かじと見ゆ。
㊈雲巢巖松源に嗣ぐ、松源下別に運庵巖あり、同名異人なり。
㊉運庵巖は虛堂愚に傳へ、愚は我が大應國師に傳へ、大應は大燈に傳へ、此一流日本に瀰漫す。

便ち叱せらる。私かに自念して曰く、「今生に了せずんば、則ち來生あり。」已にして泪下つて顧に交はる。後に癡鈍の會中に在つて侍者となる、晩參侍立して、鐘聲を聞く。鈍曰く、「什麼の聲ぞ。」翁曰く、「鐘聲。」鈍曰く、「聲耳畔に來るか、耳聲邊に往くか。」翁薄遽にして未だ答へず、大に叱せらる、汗流れて體を浹す。始めて自語して曰く、「元來浙翁平日我れを叱罵するは、皆是れ徹骨徹髓なり。」鈍尋常只だ其れに百丈野狐の話を看せしむ。一日鈍曰く、「不落不昧の時如何ん。」翁應聲して曰く、「不落不昧、鴛鴦一對、水上に浮沈す。如意自在。」鈍撫して之を印す。翁は泉州黃氏の子、隆南山と同じく嶺を出づる者、里に歸つて溪上の敎忠に住す。莆中の囊山に住するに至つて、方に入寂す。

西山亮ㇾ禪師は福州の人、枯硬儉約なり。嘗つて紙被一張を蓄ふ、補粘殆んど遍し、寒暑易へず。鼓山の首座寮より雲門の請に赴き、黃檗に遷るに、未だ曾つて別に換へず。侍僧一夜潛かに絹衾を以て之に易ふ。亮驚叫、責めて曰く、「我れ福鮮し、平生未だ曾つて縑素を服せず、況んや此の被、相隨ふこと三十年なり、其れ棄つべけんや。」聞く者謂ふ、「其の住山古人の風あり」と。後に退席して永陽の雁湖山中に入り、道者とㇾ刀耕火種して、終る所を知るなし。

平江府萬壽の訥堂辯ㇾ禪師、同參に寄する偈に曰く、「猿と龜と交る、割けども開かず。兄呼弟應、

チ南翁凝鈍に嗣ぐ、圓悟下四世。
リ西山亮は華藏の宗演に嗣ぐ、大惠下なり。
ヌ刀耕は刈り取り耕すなり、火種は草を燒いて植ゑ付けるなり。
ル訥堂淨辯は雲巢道巖に嗣ぐ、巖は松源に嗣ぐ。

忘懷に似たり。話して㋐諸訛の處に到るに及び、却つて道ふ、心肝帶來せず、」と。時に亦之を稱す。後八たび道場に坐し、提唱阪に丸を走らすが如し、眞に㋖巖獸の子、岳聾の孫たるを辱しめざるなり。

介石朋禪師曰く、「別峯珍和尚、鼓山を退いて育王に詣り、大慧に見えんと候ふ。一蒲團佛殿の後に於て、坐することを七十九日、因みに、㋕秦國太夫人大慧を請じて陞座せしむ。私かにみづから喜んで曰く、『今日見るを得ること必せり』と。果して一見を得、語室中に合ふ。復た三轉語を投じて去る。大慧大に之を奇とし、遂に宏智と同じく之を擧げ、岳林に住す。今寺中に塔あつて存す。別峯徧身に長毫あり、時に珍獅子と號す。」介石其の墨跡に題して、略々言ふこと此の如し。別峯既に法を佛心才に得、雄席に高踞して道顯著す。復た妙喜に見ゆるを求むるに勇なり、其意謂何ん、㋟璞と懿の其行を遲々すると、同日にして語るべからず、是れ一代宗師の標準たる所以なり。噫今は只だ一後學、七十九日まで、尊宿を見るを俟つを欲するも亦難し。

守懋庵主㋝は莆の人、㋡滿年具戒し、囊山の下巖に居る。巖に就いて屋を縛し、聊か風雨を蔽ふの

㋐諸訛は入り組みなり。
㋖巖獸は岩雲巢なり、當時蘇州の人を呼びて獸と爲す、巖は蘇州の人、岳聾は松源なり、松源諱崇岳老いて耳聾す、故に云爾。
㋕秦國夫人計氏、法名法眞、大惠に嗣法す、紫岩居士張浚の母なり、浚は飛南軒の父。
㋟道璞曇懿皆大惠に嗣法、曇懿初め圓悟に參じ自ら是とし出てて興化の祥雲に出世す、時に道璞懿を佐輔す、大惠其所見の未了を知つて書を致して召ぜども往かず、是れ其行な遲々するなり。
㋝嗣法を知らず。
㋡滿年具戒は年二十を過ぎ初めて具足戒を受くるなり。

み。父は郡の㋐胥吏たり、歲々給するに糧を以てす。凡そ客至れば佛法と世法とを論せず、皆瞪目して之を視る。僧あり問ふ、「如何なるか是れ庵主の家風。」忽ち答へて云く、「巖に就いては屋を縛し、澗に掬んでは糜を煮る。」問ふ忽ち人あり、西來の意を問はゞ、如何んか祇對せん。懲袂を反へして哭して云く、「苦屈」と。其雅趣を觀、其幽旨を探るに㋑契如の流亞にあらざるか。

石溪の佛海月㋒禪師曰く、「余年三十の時、方に再び㋓南す。聞ならく空叟言ふあり、『二十にして行脚し、此事休也』と。初め此語を得て心甚だ不平なり。二聖を過ぎ、座元の几案間に、窮谷の語、雲門の話墮を擧するを見て、光明寂照の中に於て、便ち歇泊の地頭あり。甌峯に登るに及び、旬日の間、隊を趂ふて入室す。先師擧す、『達磨熊耳に葬在す、甚に因つて隻履西に歸る』と。余答ふるに、㋔『一點の水墨、兩處に龍となる』を以てす。復た一日、㋕龍袖拂開して、面目全く顯る。遂に㋖倒跟すること四載、然して後、江の南北、浙の東西、師友に親しみ、甘苦を甘じ、動轉施爲、未だ曾て向背せず。今に又三十年なり、尚ほ未だ依俙彷彿する能はず。信に

㋐胥吏は山役人、瞪目は目を見張るなり、糜は粥の薄きもの、苦屈は「くるしや」「くるしや」なり。
㋑嗣州大章の契如、庵主は玄妙の室に預る、小界山に隱れ大朽杉を穿つて居る、身を容るるのみ。
㋒石溪の佛海は掩室開に嗣ぐ、開は松源に嗣ぐ、鹿庵下。
㋓南すとは南觀するなり、當時禪道南方に盛なり、故に明師に就かんと欲するものは皆南詢す。
㋔昔し奚道子二龍を畫いて睛を點ぜず、人偶々其一に點ずれば忽ち飛び去る、點ぜざるものは尚存す、是れを兩處に龍となると云ふ。
㋕龍袖の龍は籠なり、籠袖は袖をこむるなり。
㋖倒跟墜跟同意なり、尻を落ちつけるなり。

知る、此事は大に容易ならざるを。休也の二字は、眞に吾の一知識なり。」秀上人に示すの語に見ゆ、今の學者、多く之を見て、之を思はず、悲痛すべきなり。㋗佛智老師、其の錄に跋して云く、「石溪の未だ雲頂を離れざるや、行脚未到の處には、到るべきを要す。既に雲居に見えては、口を開き得ざる處、須らく道ふべきを要す。執侍すること半年、矢弦上にあつて、知つてみづから發たざるが如し。龍袖拂開するに至つて、箭の的中にあり、發つて自ら知らざるが如し。」早年松源に北山下に見ゆ。是れ此の話已に行はる。若し口を開き得と謂はゞ、後方に此の錄あり、腦後猶ほ石溪の一錐を欠くこと在り。烏虖佛海の親しく法門を證悟する、斯に於て見ゆ。語多からずと雖も、大いに㋘控人の入處あり、錄せざるべからず。

王孔大は福州徑江の人、太學博士宗合が猶子なり。年二十のとき、㋙冑を發して春官に薦上す、售られず。辛亥の年、毅然として古塔主の風に効ひ、冠を裂いて剪髮し、莆の辟支巖主㋚立堅に依り、杜多の行を修す。已にして人知るものあり、益々絕巔に上り、茆を編んで居る。父母㋛勸勸すれども回らず。甫めて二歲、泉南の明敎忠の法道を聞き、庵を燒きて之に詣り、頌を獻じて云く、「燒却す山頭破草庵、圖らず遊歷して咨參せず。師に

㋗佛智は枯崖の師。
㋘控人入處は人を引きこむ策略と云ふ如し。
㋙宗子を發して禮部の試驗を受けしとき落第せしなり。
㋚立堅前出、妻子を捨てて辟支巖に住す。
㋛勸は止なり歸るを勸め出家を諫止するなり、甫めて二歲は二歲に滿つる時の意ならん。
㋜博飯は又團博飯とも用ひて、めしを食ふ時匙で丸めるなり。
㋝蓋し行路の人に施行せしなり。

依る別に也貪着なし。㋐博飯栽田も又諸ずるを要す。」時に敎忠、風亭通衢に於て、㋑接待庵を開く。孔大、衆底に泯々として、節を折いて服勞す。施主之を聞いて、勸めて大僧となし、名を惟玉と改む。敎忠亦嘗て偈あり、之に示して云く、「老ゆ我が居山已許時ぞ。着衣喫飯只だ宜しきに從ふ。子來つて將に謂へり奇特ありと。笑倒す東家の㋒小廝兒。」後又發明あり、但だ久しく住世せずして寂す。初終㋓祖麟楊道者と略々相類す。烏虖惜しいかな。

西巖惠禪師、衆に示して云く、㋔「彌勒眞彌勒。㋕水銀無假。分身千百億。㋖阿魏無眞。㋗長汀子來也。眼に三角を生じ、頭に五嶽を峭す。好は未だ必ず好ならず。惡は未だ必ず惡ならず。布袋頭開くや。㋘隈々隯々たり。骨々董々たり。㋙輕きことは毫毛の如く、重きことは丘山の如し。㋚拈得して便ち擲ち、拏得して便ち用ふ。拂子を竪てゝ云く、猶是れ兜率陀天底。只だ彌勒未生以前の如きは如何んか剖露せん。床を擊つて云く、雨聲を收拾して舊樹に歸す。放敎秋色の梧桐に到るを。」五祖六祖の像に題して云く、「恨殺す此の頭陀。山は磨すとも恨磨せず。吾れ今㋛檐頭重く、汝が爲めに、松を種うる多し。」㋜西巖三十餘年、佛鑑の處に所得する底、拈出して人に示す、涓滴の滲漏なし。後の三十年、點眼の藥なり。

丞相鄭公清之、㋝嘗つて妙峯の善禪師に謁す、坐定まつて、峰曰く、「相公心を此の道に留む、還つて歡喜する處ありや、また無きや。」公曰く、「且坐喫茶。」峰曰く、「不是心、不是佛、不是物、相公作麼生。」公曰く、「低聲低聲。」峰曰く、「也須らく子細にすべし。」公曰く、「描也描不成、畫也畫不成。」峰默然たり。㋞老師嘗て此を言ふ、因つて之を識す。

福州越山の法深禪師は、本州の人なり、未だ落髮せざるとき、已に見處あり、月窟に梅嵓に依つて得度す。浙遊して、雙徑に至る、無準一見して之を器とし、翰墨を掌らしむ。議者其の㋟年抄を以つて、未だ職に稱はずとす。遠上座の爲に起骨に云ふ、「末後の一着、始めて牢關に到る。山遙かに水遠く、火は冷かに雲寒し。啞、是れ髑髏眼活するに非ずや。遮の一步を進むるも、也大難大難。」衆始めて伏膺す。里に歸つて梅嵓に居ること十餘年、自ら雲山畊叟と號す。樞相鄭公㋠性之、尙書陳公華、閑居の日、相與に講道し、郡に白して致して釣臺に主たらしむ。寶祐の間、越山に遷

㋐小廝兒は「こわつぱ」と云ふ如し、或は小丁稚と見るも可なり。

㋑大惠育王に在りし時、楊麟自ら髮を剪りて得度を求む事は雲臥紀談に審かなり、名を祖麟と改む、人は楊道者と呼びしなり。

㋒彌勒眞彌勒、分身千百億、此二句は布袋の作なり。

㋓藥象銀は似ぜものなれども水銀には似ぜものなし。

㋔魏曹操は油斷ならぬ男故、人阿魏無眞と云ふ。

㋕長汀子は布袋和尚自ら稱せし名なり。

㋖隈々隯々は「ヂヂムサ」きなり、骨骨董董にはつまらぬものの「ゴロゴロ」するなり、布袋の內には飯の食ひ殘しや雜具などが一緒に入れてある故なり。

㋗布袋は岳林寺の檐下の磐石上に死せり、平生大層布袋を辱しめし役人が懺悔の爲に棺を作りしが、如何にしても重く丸で丘山の如くであるから他の布袋信向の人が、別に棺を作り之に移せしに輕きこと滅毛の如くなりし。

㋘白鹿和尚如何なる布袋と問ひしに、布袋和尚袋を擲つて立つ、又如何なるか布袋下の事と問へば、布袋和尚袋を肩にして去る、是れ拈得擧得なり。

㋙六祖母に事へて孝なり、安貧なりしかば、樵採して母を養ふ、檐頭重くとは是れなり、五祖は破頭山の栽松道者の再來なり。

㋚四巖は無準の法子、無準は破庵に嗣ぐ、破庵は密庵に嗣ぐ、支那にては此系盛なり。

㋛鄭清之は理宗の朝に丞相となり魏國公に封ぜらる、妙峯の塔銘を撰す。

る、未だ幾くならずして逝く、故に名顯著せず。

祖昌庵主は何の許の人なるを知らず、天目山中に隱る。庵を結んで㋺陳墳に取る、約二十里餘あり、雙徑の榮首座嘗て山中に遊んで、偶ま其庵に至る、荊棘は蒼密し、墻壁は傾斜す。昌頽然として路口に於て杖に倚つて立つ。㋑雪眉霜髯、壞衲弊履、人物畫くべし。且つ欣然として揖入し、共に坐す。榮左右を視るに、瓶に儲粟なく、竈に餘煙あり、心甚だ異しむ。問ふ、「山に居ること今に幾年ぞ。」遂に名を稱して答へて曰く、「年を記せざるなり」と。益々之を奇とし、「粮食は誰れか供ずや」と問ふ。答へて曰く、「給を陳氏に仰ぐも今は無し」と。問ふ、「何ぞ行脚し去らざる。」答へて曰く、「達磨東土に來らず、二祖西天に往かず。」問ふ、「如何なるか是れ隱者の家風。」答へて曰く、「猛虎の一聲山月高し。」遂に㋺屏息して敢へて復た問はず。少焉して昌茗芽を出し、水を掬して之に嚥ましむ。徐ろに雙徑歷代の尊宿を叩けば、咨嗟すること之を久しうす。蓋し嘗て㋩典午塗毒に見え來る。若し其の前輩に見ゆるより言はば、翅だに百齡のみに非ず。又曰く、「路遠し、宜しく卽ち歸るべし。」榮明年同道を拉して之を訪へば、已に其處を失ふ。豈世出世間の異人なるものに非ざるか。要するに、當に懶殘西山亮輩の中に於て求むべきなり。

㋺老師閑遠齡なり。
㋻年抄は年少きなり、蓋し抄は妙眇と同用せしならん。
㋼性之は清之の譌ならん。
㋽陳墳は人の名、此の人より衣食の給を受くるなり、其の往復の道里二十里程あり。
㋾雪のまゆ霜のひげ破れ衣に切れ草履、畫中の人の如し。
㋿機鋒俊邁に屏息せしなり。
㌀典午の游、塗毒の策、黃龍派の古人なり。

溫陵の黃允、字は孚中、晚年に參請を喜び、罪福を知る。嘗て言ふ、「昔し護國主首の爲めに、開堂の疏を撰し、曾て其潤筆の資を受く」と。懺悔の疏を作り、元物を備へて寺に詣り、供設して還謝す。事を叙すること㊁簡核なり。署に云ふ、「誣長老の護國に住する。劉大卿の溫陵に守たる。允や、時に㋷計僧に預り、當に省試に趨くべし。開堂の撰疏は府命の嚴を逃れ難く、潤筆の貽資は實に僧儲の有より出づ。昔しは貧の爲めにして受け、今は數の如くにして以て之を還す。二十三年常に懷慚の客となり、七十五年方に了事の翁と成る、」と。聞くもの嗟服す。

平江府開元の別翁甄㌁禪師は、西蜀の人なり。初め閩に入つて、枯禪に見えて、其機用を悟り、後癡絕に從遊して、其至要を得。淳祐の間、衢の南禪に開法す。臘八の上堂に、「世尊正覺山前に、夜明星を見て、忽然として悟道し、乃ち云ふ、奇なるかな、一切衆生、如來の智慧德相を具有す。但だ妄想執着を以て證する能はず」と擧して拈じて云く、「釋迦老子明星を觀ざる以前、人をして疑着せしむるを妨げず、卽に明星を觀るの後、許多の肝五臟拋べて別人に覷破せらる。還つて釋迦老子の爲めに、主となる底ありや、」と。別翁徒だ此語あつて、只だ釋迦老子の心肝五臟、別人に覷破せらるゝを知る。殊に知らず、㋣別翁の心肝五臟も、又

㊁簡要核實。
㋷計僧とは會計を上る吏と僧にすとて、擧人は計と俱に都に上りて試驗を受くるなり。
㌁別翁甄禪師は癡鈍に嗣ぐ、癡鈍は曹源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ。
㋸不才淨は潔淨ならざるの文字にて「ぢぢむささ」を云ふ、五時八教の寒言なり。
㋣枯崖さんあなたの尻の赤いのも矢張人から笑はれて居はせぬか、さうぢや、さうぢや。
㋺不才淨を說き出し、心肝五臟拋べて別人に覷破せらる。別翁徒だ此語あつて、只だ釋迦老子の心肝五臟も、又

別人に覷破せられ了はんぬ。

國譯枯崖和尚漫錄卷の下　終

跋

此集の記する所は、皆近世の善知識なり。中間、柔萬庵元雙杉の如きは、皆予の舊方外の友なり。曰く、篠塘の賢辟支の堅は、則ち余其塔に誌せり。㊀悟兄儒を舍てゝ釋に入り、其前輩を敬慕すること此の如し、進々として未だ量るべからず。論ずる所の金華の元首座、㊁前後の話頭已に眼目を具す。大慧の所謂顚倒の禪とは、正に此病を道着す。悟能く是を以て之を求めば、他日此集の諸老と共に、僧寶傳に入らん。㊅竹溪鬳齋林希逸題す。

景定四年夏四月。

㊀枯崖は後出世して興福寺に住す。

㊁前に佛道を答へし時は聞くもの皆笑ふ、後に佛道に答へしには傳者皆喜ぶ、悟首座論じて曰く、斯の如く答話を辯驗せば、己靈を埋沒し前輩に辜負す。

㊅希逸官は中大夫に至る、老莊列三子の口義あり、世に行はる。

枯崖和尚漫錄序

石谿偃谿愛人物崇風教賢於端嘉諸老暮年靈徑於余尤親密評商述作一語無諱嘗道枯崖仲簡于二老厥後俱掌記徑山簡富於文惜早世而枯崖清苦憤發正宗有聞余居喝石嵓夾路玉簪花一開秋風騷然或笑曰禪和子纔見此花則憂禦寒無計東馳西騖獨枯崖坐破窓怡然每携被嵓上同宿月涼登閣雪霽看山相與胷中耿々余出錦谿報慈歸延平含清數年稍睽間聞枯崖集古成錄偃谿喜其所取機緣皆有控人入處後村謂何時煮茗得重論竹谿謂它時共入僧寶傳枯崖南歸携錄相訪適余遷光孝卒爾過目而別今枯崖瑞世泉南興禍而起藏主爲之刊梓欲叙夫參方正眼爲人峻機逸致高標激貪立懦備見乎此因思石谿閑居太白欲刻仲宣孚非庵光艮嵓沂勝叟定諸人舊作及捧黃住山酬應不韻亦不果枯崖當搜扶其遺繼々彙集俾五燈之後復見一燈光明燭天下豈漫錄云乎哉枯崖名悟福之福清人咸淳八年仲春北山紹隆書于鼓山老禪庵。

昔偃谿佛智禪師、住靈隱、予客臨安、相與往來、神交道契、非一日、知枯崖之名久矣、未曾眉毛厥結、偶寓于泉、因過興福寺、一見、元是屋裏人、恬淡寡言、眞脫偃谿印子來、頃聞、枯崖癸亥歲、歸徑山蒙堂、裒集平昔所聞見、宗宿入道機緣、示衆法語、及殘編短碣、名字未上于燈者、隨所筆、名曰漫錄、其志有在、呈似偃谿、被叱擊下無事閣裏、是歲夏五、忽謂曰、將謂所述者、効紀談雜錄、資談柄耳、今閱之則異、是所收機語、皆有控人入處、已用筆點下、餘則刻卻、且囑、宜珍藏之、予雖欲見是錄、而未暇扣、忽得起座元携元藁過我、欲爲鋟梓、請信庵一轉語、予詳復數四、雖枯崖得之所聞所見、然編集成傳、或讚或拈、或着語、或紀實、一々自胷襟流出、豈是依本葫蘆、則知枯崖和尚所集者、皆發蘊積之美玉、而非鼠璞、佛智禪師所點者、皆還走盤之遺珠、而非魚目、予更贅語、恐反生玉之瑕、而爲珠之類矣、起兄請之力、不獲已、再垂一足、助彼畫蛇、噫漫錄一出、何異揚雄之草玄、取譏於人、雖然後世必有子雲者出、咸淳壬申夏、清漳信庵陳叔震序。

枯崖和尚漫錄卷上

圓通宗照庵主、因木庵初到泉南、館是庵、一日具威儀問曰、某甲愚鈍、乞師指箇見處、木庵指面前香爐曰、見麼、照曰見、庵曰見處如何、照曰某甲不會、庵曰又道見也、照悚悟流汗浹背、自此杜門四不出、一衲百結、韻致高古、莫能親疎之。

蕅藕祖派禪師、溫陵張氏子、祝髮於開元羅漢寺、參文關西之嗣宗岱餘、宗舉僧問雲門、如何是正法眼、答曰瞎、子作麼生會、派罔措、由此焦慮忘飢寢、一夜坐至子刻、聞山禽叫一聲、省悟、黎明求宗印證、纔入門便喚曰、和尚、宗曰、子來作麼、派曰、東家杓柄長、西家杓柄短、宗曰、子夜來發顛耶、派曰、是和尚顛、是某甲顛、宗下禪床擒住曰、見什麼道理、派曰、伏惟和尚尊候萬福、宗托開曰、還我前日話頭來、派作女人拜、復呈頌曰、問正法眼、答曰瞎、萬里清風、一溪明月、今香泥像、留於里之四松、爲緇素欽仰焉。

蕭莊定公祖舜晚尤淡薄、留心禪宗、因覩傳燈悟入述偈曰、六載留心讀釋書、幾回紙上被模糊、今朝放下都無事、只是從前箇老夫、仕至執政、爲紹興名臣、且能證徹此道、未許裴李專美於前矣。

浙翁佛心禪師、初到雙徑、見大慧之嗣仁公、扣以當時千七百衆、咨決之要、得狗子無佛性話、默領去、過台之報恩、求決於佛照、夜參、聞舉世尊鞭影語、曰、見鞭影而行非良馬也、言下省悟、

且日入室問、不思善不思惡、正恁麼時、如何是琰上座本來面目、曰佛手遮不得、復隨侍證老衲於番陽、聞旁僧商量雲門話墮話云、那裏是這僧話墮處、豁然洞見佛照從前機用、佛照每語人曰、我握拂柄以來、的契吾機者、惟琰爾、後佛照佛心接武住凌霄、法席俱盛、如佛日猶在時也、佛心塔在澗東、詳見誌銘。

興化軍瑞香烈庵主、本郡人、號幻住叟、妙年奇逸、飽叢林、久參等庵、後得東庵、發明心要、歸鄉居虎丘巖、餘十年、有山居小詠、其一曰、客來詢秘密、幽鳥語聲喧、此意分明甚、何消我再言、嘉定間、郡守以東塔招之、不出、及移錫瑞香、得東庵訃、舉哀拈香云、向來信采遊江外、業風吹到明州界、墜着磬頭老拙庵、驀遭毒手相殃害、猛虎出林不足威、蚖蛇當路未爲怪、虛空激拶火星飛、流布叢林惡聲在、死中得活復歸來、冷地思量眞難耐、近聞筋斗已倒翻、且喜昇平吾道泰、炷香聊以表殷勤、償却拳頭竹篦債、大衆只如佛照和尚、既然與麼、且道、只今是雪屈耶、是酬恩耶、說着雖非直半文、誰知却有通人愛、瑞香得處分明、確守其志、不肯應世、伽梨勃窣於水光林影中、想見其高風逸韻、令人意消。

鐵鞭韶禪師、因密庵開堂、直趨前曰、箇是選佛場、心空及第歸、今日相見處、大地起風雷、作麼生是相見底事、庵不答、又曰、十二時中有箇漢、把劒來截將儞頭去、爭奈渠何、亦不答、遂摑一坐具曰、遇這寃家、不打更待何時、亦不答、退身唱三聲喏曰、捉得賊頭袁達李磨、到請鈞旨、庵方豎一拳示之曰、領鈞旨、翻筋斗便出、庵入室罷、告衆曰、適來有箇漢、牙如劒樹、口似血盆、手把一條垂條、如鐵鞭相似、老僧親遭一下、汝等諸人、切須照顧、自此號曰鐵鞭、六年爲不釐務侍者、

萬庵柔禪師示衆云、有句無句、如藤倚樹、荊棘林中開活路、樹倒藤枯句歸何處、生鐵秤鎚被蟲蛀、泥盤放下笑呵呵、殺人劒與活人刀、若是金毛獅子子、三千里外見新訛、佛生日云、周行七步、已入邪路、目顧四方、開眼尿床、指天指地、有甚巴鼻、唯我獨尊、猶是兒孫、畢竟浴他、圖箇什麼、良久云、珊瑚枕上千行淚、半是思君半恨君、閱此數語、履霜知氷、踐露知暑矣、密庵雖門戶嚴緊而接人甚盛、豈有吞舟之鱗、能漏網耶。

芥堂璁禪師、預木庵室、一日侍次、忽逢其怒、曰儞在此作什麼、夏制將滿、西來意作麼生會、幾擬答、被劈口打一掌、且厲聲曰、速道速道、幾擬答、又被打一掌、忽省發汗下、禮謝而去、自此諸方號弘法道者、莫不往參激、晚住吳門聖因、益馳聲譽、白髮垂肩、叢林呼爲璁白頭也。

眞源慧日禪師、字明可、方峻超卓、頗黃龍三關云、我手佛手、糞箕掃帚、拈起便行、誰分先後、我脚驢脚、步步踏着、踏破虛空、一任卜度、人人有箇生緣、屋漏望見青天、昨夜泥牛勃跳、帶累金剛發顚、應庵見之歎曰、眞黃龍的骨孫也、頗竹篦子云、半載出師當古塞、將軍疋馬意崢嶸、不知打破重城了、空把牢關不放行、大慧聞曰、此黃龍兒孫、亦解我楊岐下說話、眞源嘗問僧曰、佛以一大事因緣出見於世、如何是一大事因緣、僧無語、復引諭而謂之曰、如一顆明珠頓在朝天門瀾頭市裏、千人萬人、行過不見、忽有一箇漢、遇着便叫云、我快活、只是這箇道理、會麼、初住杭之多福、後住昇之興教、明之香山、乃天台萬年雪巢一村僧嗣、語言宗旨、木水之有本原也、雪巢別帖云、專介之來、收書且喜、被臨安命、遷選出世、仍審別後新領住持、道體康安、深

以爲慰、中間赴長蘆、欲得相見、知已入院、人言多福政在於潛新城深山中、只成悵然而已、我身畔別無人、甚望汝歸來、奈何已出佩空王印、事要兩全則難矣、且勉力向前行道、不可恣縱自己、令厚却薄他人、軟暖淡薄、汝亦深悉之、今之住院、多如此、可相信也、若到秋間、我定要歸天台萬年觀音別院、必作長往計、無因見汝、且自保順世間人情、使祖道光顯、至祝、普灯只戴其嗣法法常首座。

愛堂妙湛禪師、依水庵於杭之淨慈、爲水頭淨頭、一日於寺前、舉扇化鏹、忽然猛省、因忘縮臂、旁僧訶曰、獃子、扇上有錢丁、通身汗出、掖歸白水庵、而印可之、亦有頌示之云、一堆屎上一尊佛、放出毫光照天地、鑊湯爐炭裏生蓮、只因洗面摸着鼻、爲肯堂首衆日、新福帥王公度遊山、與論契合、到福以黃檗招之、後赴吳門守趙公彥樾承天之請、方順寂、愛堂安吉人、朴野絕文飾、聞發語言、如枯柴、人不及見、惜哉。

臨安府徑山少林佛行崧禪師、生於建之浦城徐氏、受業於夢筆峰等覺、瑞世於安吉報本、嗣東庵、道聲四馳、未幾起住杭之淨慈、上堂、擧僧問鹽官、如何是本身盧舍那、官云、與我過淨餅來、僧提淨餅至、官云、復安舊處、着拈云、鹽官八萬四千毛竅、竅竅俱開、三百六十骨節、節節欲斷、可惜這僧、如夢相似、上堂、擧洞山云、初秋夏末、兄弟東去西去、直向萬里無寸草處去、後來瀏陽庵主道、出門便是草、大陽云、不出門亦漫漫地、拈云、同聲相應、同氣相求、則不無三大老、子細檢點將來、總是藤蛇繞足、且利害在什麼處、誰知雲外千峰頂、別有靈松帶雨寒、上堂云、是法不可示、言辭相寂滅、春葩千萬叢、春山千萬疊、正與麼時、釋迦老子、打失鼻孔、是汝諸人還知麼、喝一喝下座、上堂云、欲得大用見前、直須頓忘諸見、諸見若盡、昏霧不生、大智洞明、更非他物、遂擧拂子云、看看、若道見頭上安頭、若道不見、斬頭覓活、畢竟如何、良久云、泊合錯下注脚、喝一喝下座、既退席過武康宴山接待寺、□寧廟尤重佛法、嘉定間、再得旨董南山、卽詔延和殿、登對、賜號佛行禪師、金襴袈裟、寵榮至矣、

臨安府淨慈肯堂充禪師、餘杭人、嗣顏萬庵、風規肅整、望尊一時、頌卽心卽佛云、美如西子離金闕、嬌似楊妃下玉樓、終日與君花下醉、更嫌何處不風流、曹山喫酒云、販海波斯入大唐、先將珍寶暗埋藏、却來伸手從人覓、爭奈難瞞有當行、擧萬庵先師有語云、坐佛床斫佛脚、不敬東家孔夫子、却向他鄉習禮樂、拈云、入泥入水、則不無先師、爭奈寒蟬抱枯木、泣盡不回頭、卓拄杖云、灼然有不回頭底、肯堂向升子裏、禮爾三拜、昔大潙佛性謂、頌古拈古、要奢儉得所、如人解使錢、不必多也、善讀肯堂語者、當自知之。

寶峰端庵主、久侍佛照、見其頌女子出定因緣、有悟入處、一日造丈室、於座左側、叉手而立、少頃便出、照呼來前曰、有什麼辨白、端又於右側、叉手而立、照喝、端趨出、照頷之、端恂恂如鄙人、居小庵無宿給、戶外之屨常滿、同門如權孤雲印鐵牛、致書招之不出。

安吉州烏回月林觀禪師、性純誠無嬌飾、福之候官黃氏子、初爲牧童、鞭叱牛有省、屏葷血、投雪峰忠道者、出家、謁荊南二聖戒準、得度、見澧州證老衲、獲其法、初造室、聞擧話、云、若能轉物、卽是如來、面前香臺、作麼生轉、曰築着磕着、被叱去、復隨侍、過饒之薦福、看雲門話墮、又十年、一日繞蓮池行、自誦云、那裏是這僧話墮處、忽大徹、塗毒在徑山、遯庵在華藏、皆有書致之分

座頌洞山麻三斤云、脣上碧斑賓豹博、舌頭當的帝都丁、頻呼小玉元無事、只要檀郎認得聲、嘉泰間、瑞世吳門聖因、遷承天萬壽、學者輻湊、住烏回示疾日、猶再鼓入室、且曰、桂花開時、吾將行、俾其徒預結夏制、已而桂花盛開、嘉定丁丑、四月十三日也、參前入室、再鳴鼓普說、衆集定、拈拄杖云、有拄杖與拄杖、無拄杖奪拄杖、衆中莫有會底、出來道看、衆無對、擲下拄杖、危坐書偈而寂、閱世七十五、坐夏五十一、闍維舍利不可計、烏虖命世宗師、處死生如雲行鳥飛、初無留礙、烏回夏中入滅、桂盛開如其言、此尤見其超絕奇瑞明驗處、非荷負大法精一力乎。

曹源生禪師、在信之龜峰示衆云、從朝至莫、鍾魚鼓板、爲諸人發上上機了也、若信得及、塵沙諸佛、在諸人脚跟下、跌跳、若信不及、龜峰拾得口喫飯、拍禪床下座、眞黃龍所謂、如數世富人一錢不虛用耳。

松源岳禪師、初入閩見乾元木庵、久之辭去、木庵舉有句無句如藤倚樹、源曰裂破、曰琅邪道、好一堆爛柴虀、曰矢上加矢、曰吾兄下語、老僧不能過、其如未在、他日拂柄在手、爲人不得、驗人不得、曰爲人者、使博地凡夫一超入聖域、固難矣、驗人者、打向面前過、不待開口、已知渠骨髓、何難之有、庵舉手曰、明明向汝道、開口不在舌頭上、後當自知、逾年源見密庵於衢州西山、隨問卽答、庵笑曰、黃楊禪爾、後在徑山、聞庵問旁僧、不是心不是佛不是物、忽大徹乃曰、今日方知、木庵道開口不在舌頭上、源生處之龍泉吳氏、開法蘇臺澄照、慶元間、被旨住靈隱、門庭高峻、入者鮮不爲大器、烏虖、松源破庵曹源萬庵、豈非起中峰之道者耶。

大梅止翁祥禪師、無用嗣子、示衆云、瑞岩示衆、絕支離、栗棘金圈劈面揮、直下有人呑透得、更須來喫頂門鎚、語言質直、如其人、住山規模尤過人。

月林觀禪師會中、有一杜多行、明得俱胝一指話、且曰吾老矣、須再來、歸寂後三十餘年、月林在湖之報本、夜夢開室舉俱胝話、見杜多行造室、竪一指、明旦室內舉前話、孤峰秀公、時在旦過中、趨入亦竪一指、月林曰、杜多行再來矣。

福唐明首座號寂照、飽參聰敏、久侍空叟於四明玉几、叟感風疾累年、左右相繼辭去、照服勞益勤、叟常囑、以福鮮不宜出世爲人、歸里爲鑑絕照、首衆鼓山、帥李公俊以大雲峰招之、辭以偈云、箇是皇朝無事僧、談禪說道總無能、頹然送日猶嫌贅、敢把虛名玷祖燈、絕照勉其出、復曰、願做閑人逃、偈云、恰露半頭原畔立、故人底事又相逢、柴門去此無關鑰、佛若來時却弗容、卽日遁去、後寓閩清白雲、學者景向、又數年、帥趙公希靜、盡禮以雪峰迎請、照以書授小師圓庵主、辭謝不赴、帥封沈香爲供、將以四句云、道人高臥挽不來、凜凜清風起儒頹、太守無由親問道、辨香聊寄小師回、寂照三十餘年、守一破紙被、見地明白、遵記荊而恥表襮、依林藪而安寂寥、始卒不易、使爭競名位、販賣佛祖者、聞其風、亦可以少愧矣。

浙翁佛心禪師、示如璨法語云、本色道流、十二時中、六根門頭、空牢牢地、如一面軒轅寶鑑、胡來胡現、漢來漢現、選甚眞如涅槃菩提煩惱、以至世間虛幻、情欲逆順是非、一一照破、直是汙染不得、若也六根門頭、纖有纖毫異念、便被許多爲障爲礙爲寃爲懟、使得七顚八倒、凡聖之岐、由此而分、然凡聖初無兩種、只是一箇了事人、了底喚作聖、不了便是凡夫、龐居士云、不是聖人了事凡夫、此之謂也、既知得了、更須子細、不可目前輕結裹着、箇裹方要見人咬定牙關、

且崖將去、驀然崖到懸崖撒手處、正好、入人爐鞴、受人鉗鎚、稱箇本色道流、不爲分外、忽爾時緣所迫、出來與人解粘去縛、內亦無愧、自然綽綽有餘裕也、閱此眞臨濟宗骨髓耳。

常州華藏明極祚禪師、嗣暉自得、嘗舉保壽開堂語、拈云、保壽開堂、爲衆竭力、三聖推出、故園春色、保壽便打、可知禮也、瞎却鎭州一城人眼、三聖重重露肝膽、保壽下座、便歸方丈、千古叢林爲榜樣、喝云、喚作榜樣、得麽、明極以大父事宏智、拈提如山濤論兵、闔合孫吳、亦可爲叢林榜樣。

安吉州鳳山資福破庵先禪師、王氏、蜀廣安新明人也、參密庵於烏巨、隨衆入室、見其爲旁僧舉、不是風動、不是幡動、忽然朗悟、復隨侍過蔣山、五載不自衒鬻、亦未嘗得其許可、遂辭歸蜀、密庵潛乘小肩輿、前詣五里、袖中出語餞之曰、萬里南來川嘉苴、奔流度及扣玄關、頂門歡瞎摩醯眼、去住還同珠走盤、破庵住夔府臥龍、始通法嗣書、時密庵在天童、謂育王佛照曰、元來川僧有道義、佛照曰、待儞知得遲了、蓋密庵平生怕川僧、不肯掛搭、而佛照喜川僧、堂中太半是也。

妙峯善禪師、住台州惠因、開爐示衆云、翠雲隨例也開爐撥盡寒灰、火也無、竪起拂子云、拈起死柴頭上底、吹云、不知誰是赤鬚胡、高原聞之、薦於靑山鄭公、公云、見說他住壞人院子、原云、佛法也要人撐拄在、後居臨安永敎、公果付下省箚、請住小瑞岩、再見佛照於育王、以風旛語、直箭鋒機、佛照贈之以偈云、今日爲君通一線、斬丁截鐵起吾宗、妙峯劉氏、晚年叢林、以老劉呼之。

衢州報恩百拙登禪師、和州烏江人、族閔氏、應庵晚子、初有見時言、夜半如白晝、示學者曰、道人相見莫週遊、大地都盧是一州、信手拈來信手用、始知大地一毫收、又曰、道人相見勿哆哆、一句可以定干戈、得失是非都拈却、不知那事復如何、住報恩三夏、賦性絕彫飾、機語皆質直、故有百拙之號。

野雲南禪師、會稽人、表裏端勁、先於無用會中爲園頭、有契悟、後瑞世、示衆云、霜風落木、鴈陣驚寒、生身父母、露出心肝、觀音菩薩、嗔霍不盡、失却鼻孔、且喜諸人、天下太平、又云、百計推尋、永不見面、一時休去、在處逢渠、長連床上、喫粥喫飯、取飽爲期、我且問儞、常住一粒米、是幾番過手、烏虖、楊岐之道、至大慧大振、語言機辯、胥江八月之濤、莫能遏者也、無用祇以其親切底、接人、亦無敢湊泊、晚始得野雲、此等示衆、眞無用親切語、未知孰爲優孟、孰爲孫叔也、不忝爲佛日之子孫矣。

淳庵淨禪師、蜘蛛頌云、立處孤危用處親、一絲頭上定乾坤、渠儂不是誇機變、要與衆生斷命根、爲人所誦、尤能節儉省事、不勞役人、亦如舜老夫炙灯掃地皆躬爲之。

退庵奇禪師、預印別峯室于徑山、別峯纔望見其來、失喜下床接之、不復爲衆舉話、退庵恐妨衆、後惟未至、住金山、普說云、便恁麽散去、早是辜負平生了也、那堪更進前咨詢、某甲等、爲生死事大、無常迅速、不堪爲種草、若是互爲賓主、成法爲人、却較些子、此爲已徹證者說、或者久在叢林、非不用心、不能得箇透徹者、過在什麽處、過在信根不重、半信半疑、似做不做、只是無決定志、又不能全身放下、縱使放得下做得、理路絕處、情識盡處、靜境不戀、鬧境不拘、只與麽

浸在死水裏、分明死了活不得、往往多、只向這裏着到、若能猛烈靠將去、一撞撞着始得、此爲久在叢林打未到頭者說、若是乍入叢林兄弟、信根純淨、諦聽此事、恰似箇白練絹相似、不受他人點汙、得遇明師、發一片誠心、不願出人前、唯只是要參禪學道、發明心地、資之勇猛、確然以生死大事爲念、十二時中、時時覷捕、驀然泯慮絕知解、如晴空萬里、不掛片雲、何患日頭不出也、日頭纔出、無不照處、日頭出時、恰似箇什麼、山野老婆心切、向壁角頭、拈出一片陳橘皮、與諸人作樣子、豈不見、壽禪師因普請次、拋下一片柴頭、驀然契悟、便道、撲落非他物、縱橫不是塵、山河及大地、全露法王身、這箇時節、還計較得麼、如人飲水冷暖自知、法眼和尚、也曾恁麼打發一回、便解道、物物到心上、全心物自閑、古今城郭裏、得者住如山、可謂眞語者、實語者、當恁麼時、不用求殊勝、殊勝自然至、非但壽禪師大法眼如此、至於三世諸佛、六代祖師、天下老和尚、皆不出此、若有別證別解、卽是外道法、非是佛法、金山恁麼切切怛怛、恰似箇媒人相似、東邊說一歇西邊說一歇、兩邊說一合、及至到家相見、儞自理會、不干媒人事、儞若實到家相見一回、更不忍捨也、參禪學道、須到不忍捨處、底田地、正好做工夫、如人上山、各自努力、鳥庠入大爐鞴、上大鉗鎚、等閑發一機、示一境、自不尋常、此等普說、恰似賣田立契相似、東西南北四至、一一爲人指出、別峰三十餘年、坐曲彔床、只得退庵一麟足矣、

南嶽方廣照禪師、淳素鄙朴、以罵詈爲佛事、學者憚之、有二僧至、照問曰、天寒歲暮、上座何來、僧曰、一家有事百家忙、照曰、相見底是阿誰、僧曰、某甲與和尚、照指香臺曰、面前是什麼、僧曰、香臺、照曰、將謂牧番猛將、元來是行間小卒、僧喝、照便打、問第二僧曰、天寒歲暮、上座何來、僧曰、不得氣力祇對、照曰、聞儞攪衆出院是否、僧曰、和尚幾時得者消息、照曰、近前來與儞道、僧吐舌、照便打、且含糊詬罵曰、我這裏無米無菜、也來亂統、以拄杖趂之、照西蜀人、佛照會中、號照白眉者、垂示機語、不在空叟鐵牛之下。

橘洲曇禪師、字少雲、嘉定府人、出峽住明之仗錫、暇日著論、發明佛祖機緣、名曰大光明藏、筆勢宏濶、惜未成全書而寂、論贊丹霞云、剗殿前草、騎聖僧項、天寒燒木佛、三事併案、夫豈他人所能、如衡山之雲、軒豁呈露、遽見突兀、不自爲能也、然時有觀顧悸怖、而喪其所守者、院主是也、等閑放過南陽侍者、而直擒取南陽國師、所謂挽弓須挽强、是此手也、重哀末世疲癃之疾、增損古人必効之方、成大法藥者、宜用元和津嚥下、和平之福、可立而俟也、余見佛智老人、偶閱此且曰、學者亦宜於此、用元和津嚥下、洲嘗自撰龕志、略云、初聽楞嚴圓覺起信、復捨去、依成都昭覺徹庵白水庵、挈包南來、從先大慧於育王徑山、後見東林萬庵蔣山應庵、辛苦艱難、始畢平生之願、則知其涉歷尤艱辛、未聞容易而得也。

慶元府天童無際派禪師、嗣佛照、生於建安張氏、慶元四年、開法常之保安、上堂云、說卽無功有過、不說又是罪過、自今各省己過、無以責人之過、拄杖不應放過、也要從頭按過、卓拄杖云、內卦已成、再求外象、又卓三下、占得風山小畜、變成澤風大過、卓一下下座、初預密庵法席、有剪紙塔戲俾頌、頌云、當陽拈起剪刀裁、七級浮圖應手回、堪笑耽源多口老、湘南潭北露尸骸、一衆服膺讃船子云、三寸離鈎摵一橈、百千毛竅冷颼颼、雖然兩手親分付、要在渠儂自點頭、讃靈照女云、老爺喪盡生涯後、累汝沿街賣笊籬、不是家貧兒子苦、此心能有幾人知、叢林稱

之、嘉定間、在天童示疾、辭衆上堂云、十方無壁落、四面亦無門、淨躶躶赤洒洒、沒可把、喝一喝云、幾度賣來還自買、爲憐松竹引清風、下座、入丈室、端坐泊然而化、壽七十六、腘五十二、佛果下、大慧接人多如馬祖、今獨東庵下爲盛。

螺庵肇禪師、住雪峰、日、贊祖師云、德山棒下桶底脫、蟭螟眼裏乾坤濶、坐斷東南第一峯、百川倒流闍聒聒、自題照子曰、陰崖鳥滅槎頭雪、午夜猿啼竹外煙、莫惟住山無伎倆、騎牛踏破水中天、余己酉夏、在石翁玉和尚會中、耆宿猶能言之、今僅憶此二贊云、

金華元首座、剛峭簡嚴、叢林目爲飽參、見等庵於白雲、始了大事、僧問如何是佛、曰卽心是佛、問如何是道、曰平常心是道、問如何是祖師西來意、曰趙州道底、聞者皆笑、後有僧問、如何是佛、曰南斗七北斗八、問如何是道、曰猛火煎麻油、問如何是祖師西來意、曰龜毛長數丈、傳者皆喜、噫若如此辨驗答話、不惟埋沒己靈、抑亦辜負前輩。

蒙庵聰禪師、生福州長樂朱氏、少長不侵侮好狎、年十九依信之龜峰光晦庵、二十七得度、卽告以欲隨衆專一體究己躬大事、免以衆務爲役、庵笑曰、汝要緊參禪耶、佛法在一切作用處、尋常行履處、何懼事務奪、卽今且限一月日、如不了了、決罰不恕、退以佛法在尋常行履處、寫貼於牕上、脇不至席者半月、庵時時默探之、見其作意太猛烈、私念云、此子若不悟、恐狂去、一日聞搐鼻有泣聲、云啞、壞了此子、詢問乃知俗家訃音至、庵擧意曰、這裏好與一槌、卽喚來問曰、汝有什麼事、且道以父亡、聲未絕、庵扭住與一掌、云、許多無明煩惱、甚處得來、又一掌、當下疑滯氷釋、卽禮謝、衝口呈偈曰、了了了了徹底了、無端赤脚東西走、踏破晴空月一輪、八萬四千門洞曉、庵曰、這鈍漢、且放三十棒、曰、某甲亦放和尚三十棒、曰、儞看瞎漢、便敢亂統、自此機鋒峻捷、無敢當者、庵臨寂時、付以法衣并偈、曰、再來毒種、元聰侍者、難耐吾宗滅、汝邊也、且曰、異日不得辜負老僧、曰、卽今亦不少、曰、恁麼則三十年後、此話大行、曰、蒼天中更添冤苦、瑞世龜峰、爲晦庵嗣、後遷六處、被旨住徑山、十四夏而寂、烏虖、蒙庵於晦庵之門、燒尾鱗也、如烏窠得會通、無三登九到之勞、雖曰師資緣合、顯微一貫、如印印空、了無朕迹、非介而勇、願而專者之驗歟。

笑翁堪禪師、初遊方抵明之太白、無用問曰、汝行脚僧耶、遊山僧耶、曰行脚、又問、如何是行脚事、翁以坐具撼之、無用曰、此僧敢捋虎鬚、參堂去、一日室中、擧狗子無佛性話、擬開口、無用起擧竹篦、翁應聲曰、大茶毒鼓、轟天震地、轉腦回頭、橫屍萬里、無用然之、翁平生未嘗以言徇物、以色假人。

自牧謙禪師、西蜀人、溫雅博喻、雙徑蒙庵之嗣、入閩住鳳山、遷鼓山、時高州文學劉鎭叔安、謫居最久、間往咨參、一日問曰、某甲參得禪麼、曰人人有分、曰卽心是佛、如何是非心非佛、曰不許夜行、投明須到、劉因此留心佛法、自牧後在雪峯、室中問學者、雪峯有句子、僧曰、請和尚道、自牧以拄杖趕出、如此爲人、契機者少。

妙峰善禪師、住杭之靈隱、丞相青山鄭公因天童闕人、奏勉其行、答以年踰耄矣、尚夜行不休乎、述二偈辭免、一曰、剝啄敲門定眼開、驚傳釣翰入山來、倚岩枯木摧殘甚、空費陽和到一回、二曰、鼻繩掣斷已多年、老倒松楸澗草邊、相國恩波如海濶、何妨乞與日高眠、嘗拈魯祖見僧

面壁云、費力不少、瑞岩主人翁云、卽今亦不少、妙峰晚年、足不越限、晝夜惟擁楮衾兀坐、垂示語言、皆發藥人、鄭公題其錄云、師於佛法中、橫騖直貫、曾無留難、如方圓器滿貯虛空、不可執着、如七寶山湧智惠泉、悉具法味、可謂知言矣、

慶元府天童如淨禪師、頎然豪爽、叢林號曰淨長、禮眞歇塔偈云、歇盡眞空透活機、兒孫相繼命如絲、而今倒指空腸斷、杜宇血啼花上枝、示衆云、心念紛飛、如何措手、趙州狗子、佛性無、只个無字、鐵掃帚掃處紛飛多、紛飛多處掃、轉掃轉多、掃不得處、拚命掃、晝夜堅起脊梁、勇猛切莫放倒、忽然掃破太虛空、千差盡豁通、宗趣可知矣、有問瑞世嗣誰、曰如淨、問道號謂何、曰淨長、後於太白山感疾退席、下涅槃堂、始大哭爲鑑足庵、燒香入寂、時侍者告以法堂寶蓋鏡墮於座上、曰鏡枯禪至矣、如其言、

高原泉禪師、令聞素著、瑞世慶元梨洲、有問、囊錐已露、至寶難藏、四衆側聆、願聞法要、曰截舌有分、問恁麼則一句超今古、禪徒息萬機、曰又恁麼去也、問如何是梨洲境、曰猨啼古木、月照高峰、問如何是境中人、曰匙挑不上、問人境已蒙師指示、向上宗乘事若何、曰且待驢年、四衆拭目傾耳、

空叟印禪師、詣育王、時佛照法席鼎盛、頌善財者累紙、空叟有云、童子纔生、河沙福聚、凜然氣宇如王、覺城東際、智願已全彰、展轉參尋知識、不移寸步、歷遍南方、無窮事風高月冷、煙水渺茫茫、一聲彈指處、毗盧樓閣門戶盡開張、塵塵頓現、法法圓常、都是夢中境界、惺惺後滿面慚惶、歸來也重遭摩頂、□□雪上更加霜、衆推之、後空叟道益聞著、亦住育王、

浙翁佛心禪師云、空東山答余才茂借脚書、眞閱老子殿前一本赦書也、今之諸方、道眼不知若何、果能受持此書、則他日大有得力處、書云、空本巖穴間人、今雖作長老、只是前日空上座、常住有無、一付知事、豈敢涉私、盜用常住、結好貴人、或用資給俗家、或用接陪知己、今之帶角披毛、償所負者、皆此等人也、先佛明言、可不懼哉、願公勿置我於此輩中、則公之入帝鄉、求好事、前途未易量也、逆耳之言、不知以爲如何、佛心每以此、擧似於人、璨隱山亦云、常住金穀、除供衆之外、幾如鴆毒、住持人與司其出入者、纔需着、則通身潰爛、律部載之詳矣、古人將錢就庫下、回生薑煎藥、蓋可見、今之踞方丈者、非特括衆人鉢盂中物、以恣口腹、且將以追陪自己、非泛人情、又其甚則剜去、搜買珍奇、廣作人情、冀遷大刹、只恐他日鐵面閻老子、與計算哉、因併錄之、

臨安府淨慈退谷雲禪師、初在鐵庵一大禪會中、爲侍者、値其開室、問、國師三喚侍者、谷以手揜其口、又問、侍者三應、又作麼生、谷拂袖徑出、後得佛照印可、且謂其機語如雪堂行、及得旨住明之育王、時佛照居東庵、父子相從之樂、昔未有也、退谷生福州閩清黃氏、

寂照明首座、孤風超絕、生緣福州長樂、多見宗匠、嘗有頌曰、大事未明喪考妣、既明雪上又加霜、曾聞三峽猿啼苦、鐵作心肝也斷腸、晚自浙歸閩幹漏澤園、頌曰、劒及翻身能有幾、無端平地死人多、從頭喚起重烹過、未免依然埋沒他、可見其人矣、不肯出世、終老於白雲古寺閑房中、樞相鄭公性之尙書陳公韡居私第、嘗躬詣而問道焉、瑩雲臥謂臨卬復首座、曾見尊宿來、演祖待以父執、始終一節、亦足以增懿緇林、豈特高踞雄席、然後爲榮哉、吾於寂照亦云、

瀾翁佛心禪師、雙徑法席、人物林立、嘗撫膝云、爾向這裏下得轉語、不空過一夏、有云、覿面相呈、更無回互、有云、疑殺天下人、皆被叱、謂不可趣口快、佛智老人、時在侍旁、緘嘿而已、老人後爲拈香云、千鈞上絃、當時遼天索價、一言道盡、不合貼地相酬、只今驀路相逢、諱不可得、避亦無由、禮拜燒香、將醋就錯、何故覆水難收、又云、說大脫空、用無轉智、當時打向面前過、驀被以手一畫、三十年悔不可追、恨不可消、曲不可直、只今白浪堆中、我遮一鍬、揷香云、莫惟拈出、大宗師家、拈出一絲毫、牽動四世界、更無一絲毫疎漏處、此語皆是相見時話、入道時之因緣也、

泉州法石隱山璨禪師、上堂云、德山棒如雨點、臨濟喝似雷奔、隱山當時若見、一時趂出三門、爲什麼如此、當門不用裁荊棘、後代兒孫惹着衣、佛涅槃云、我佛本不降生、今日何曾入滅、若道非生非滅、也是眼中着屑、汝諸人、暫不暫、畢竟喚今朝作甚麼時節、一度風來一度寒、一回飲水一回嘘、請看陌上桃花紅、盡是離人眼中血、垂示類此、隱山泉之晉江人、性褊躁、好貶剝、自謂叢林一害、瑞世下生、嗣涼峰空退庵、此庵乃其大父云。

高原泉禪師、住梨洲、荒陋寂寥、無準爲首座、荊叟爲維那、雙杉在會下、原夜坐、舉江月照松風吹、永夜清宵何所爲、荊叟曰、覷着氷河連底凍、雙杉曰、牽來好與頂門槌、原默然、壯歲時已得奇退庵許與矣。

丞相蔣公芾居建昌、時號莫齋居士、妻詣光孝寺、問道於璨隱山、聞舉狗子無佛性話、擬下語、被喝住、呈偈曰、眼前一座鐵壁、拄天拄地黑漆、今朝瓦解氷消、一段孤明歷歷、又被喝出、後請益、得示以清素侍者語、兜率悅、可能入佛、不能入魔、渙然氷釋、述偈曰、翻着禰衫倒着靴、橫拈豎放摠由他、入魔入佛尋常事、一段風流出當家、又曰、婬坊酒肆飽經過、一曲尊前囉哩囉、打鼓看來君不會、大家把手上高坡、隱山深肯之、卽陞堂告衆、有隱山撾鼓爲證明、千古叢林、一盛事之句。

天目禮禪師、在鄮峰、時佛照開室舉、風動幡動、者僧如何、答曰、物見主、眼卓竪、照曰、不是風動、不是幡動、甚處見祖師、答曰、揭翻腦蓋、印空叟隨後入室、照復舉前話、叟答曰、貪觀白浪、失却手中橈、照曰、老老大大、作者箇語話、儞看適來後生子、下此一轉語、天目在佛照會中、依止三年、因不受書狀職、過靈嵓時、癡鈍亦舉前話、答亦如前、鈍曰、此語只育王會中用得、我者裏飯水也未到、儞喫在、烏虖、二大老接人如此、宜爲萬世師也。

少室睦禪師、在瑞嵓、偶鳳山礪老持松源像、請贊、贊曰、開口不在舌頭上、話墮也、大力量人、擡脚不起、未爲分外、平生用者些兒、却被鳳山捉敗、瑞嵓與廢贊揚、也是送賊入界、少室宗眼端正類此、示人非徒從事於語言之末也。

本眞書記、福唐朱氏子、棄儒依資福山主祝髮、出嶺遍參叢席、有特立操行、晚得天童慈航印記、卽歸里之松溪、卓庵居焉、奉己甚約、食僅足而已、嵓谷幽遠、水木清華、眇然絕俗、離世若將終身、有偈曰、茆庵卜築向溪南、踪跡惟饒野鹿參、昨夜滿簷霜月白、最憐松葉落鬖鬖、又曰、高懸樓拂與筇枝、覿面相呈早費辭、此外更無親切句、不知若箇解尋思、豈非高尚其志者歟、或議其不得激發後學、爲不幸、予謂以樓拂筇枝示人、止此足矣、又何必別求語言哉。

秀嵓瑞禪師曰、大慧和尚擧、趙州一日在佛殿上、見文遠禮佛、以拄杖打一下、遠云、禮佛也是

好事州云、好事不如無、頌曰、文遠脩行不着空、時時瞻禮紫金容、趙州拄杖雖然短、腦後圓光又一重、大圓見曰、妙喜作用不減嵓頭死心、肯來商搉可謂光前絕後、今爲改末句必來、但恐不得相見矣、改云、劃破華山千萬重、大慧聞之、果欲詣見、而大圓已遷化、只題其錄云、七佛命脈諸祖眼睛、但看此錄、一切現成、二老相敬如此、今無復見其人、氣燄猶迫人、烏虖、二大老故無復見秀嵓亦已矣、因錄而識之、有能於筆語外着得隻眼、庶免三人證龜也。

枯崖和尚漫錄卷上終

枯崖和尚漫錄卷中

祖賢首座、撫之金溪人、人品高妙、得法於癡鈍、久留閩、南欲歸鄉、至義江、有感而反、焚綾牒、與歸竟嘉編茅、隱於莆之土囊山、嘉既赴福帥長生之招、卽遷于黃山篠塘、自朽土室、僅容膝、扁曰樂此、遠近者聞之、始供以粟焉、居二十年如一日、郡侯曾公用虎、高其風、以囊山慈壽虛席、禮請不赴、嘗譔十不去、以見意、末章云、十不去、止此便爲諸佛土、假饒天子詔書來、向道不須生事故、復齋陳公宓、與論持敬二字、答云、敬足矣、何用持爲、遷化後、玉堂林公希逸祭以文、畧曰、六經之外、得此良友、余近與方劉諸公遊石室、晚造其故廬、月色淸朗、松聲蕭騷、慨然想見其高標逸致也。

鐵鞭韶禪師、直諒不寬密、福州緜亭人也、赴溫陵光孝請、開堂祝聖、拈香罷乃云、喚什麼作第一義、莫有旁不甘者麼、出來道看、時有僧出問、頂顙摩醯眼卓竪、拈拄杖卓一下云、住住、今日開堂、不比尋常佛事、設問答到彌勒下生、鉤鎖連環、盛水不漏、也只是鼓粥飯氣、於自己了沒交涉、所以道、問不在答處、答不在問處、問答交馳、如青天轟霹靂、看者不容眨眼、那堪更向言中定旨、句下明宗、大似緣木求魚、守株待兎、殊不知、我宗無語句、亦無一法與人、這裏徹去、皇恩佛恩一時報畢、其或未然、更爲錦上添花、復卓拄杖下座、有八會錄行世、審聲以知音、審音以知樂。

覺庵趙贊府、看釋書有省、休官依翠微、乞名惟覺、裂冠薙髮、具毗尼、後居山、有偈曰、氣衰力爛不堪言、得意濃時便息肩、棄俗棄官兼棄欲、由人由命更由天、飢來爛煮黃粱飯、困後和衣白日眠、山鳥一聲驚夢覺、不知今夕是何年、可謂幽人貞吉、中不自亂也。

破庵先禪師嘗曰、今時兄弟、做工夫、不索性、所以不見效驗、我行脚時、密庵住衢川烏巨山、我在彼中、充知客、解職了、往見水庵于雙林、兩廊長、我每夜不睡、從東廊行到西廊、提起話頭做工夫、行三兩匝了、歸堂中、打一着、上下間兄弟、一似爛冬瓜相似、覷了自思量道、我若不着、便也似者一堂爛冬瓜、討什麼椀子、我在那時、做得些工夫、室中也開得口、只是命根未斷、心下畢竟不穩、遂起單至平江、萬壽僧堂前歇、那時是灯止庵住萬壽、是無鼻孔長老、粥罷打鼓入室、我心裏欺他不去、有同行去入室了、却來問我、儞去入室、也未、我謾同行云、我去入室了、又却自思量道、他是我同行、我謾他、心下未穩當、漸要歸川去、却是如何、如此思量、心中躁悶、遂行入僧堂後去、忽然舉頭見照堂二字、從前疑情頓釋、迤邐上蔣山、再見密庵、室中無不契合、破庵參禪如韓信軍孤在水上、必死無二志、所以勝也。

秀巖瑞禪師、上堂舉、馬祖日面月面、後來水庵頌云、日面月面、胡來漢現、胡漢不來、清光一片、拈云、見馬大師、未可、秀巖也有頌、日面月面、磚頭瓦片、踢倒淨缾、撼動門扇、舉老宿一夏、不與僧說話語、拈云、者僧正是飯籮裏餓死漢、老宿着甚死急、恁麼見解、喚來痛打一頓、趂出三門、爲甚如此、爲人須爲徹、殺人須見血、烏虖、爲拙庵拈出底、木庵處得來、語在叢林、話在人口、雖然要見秀巖、猶隔海在。

江西雲臥瑩庵主曰、徑山謙首座歸建陽、結茅于仙洲山、聞其風者、悅而歸之、如曾侍郎天游、呂舍人居仁、劉寶學彥脩、朱提刑元晦、以書牘問道、時至山中、有答元晦、其略曰、十二時中、有事時、隨事應變、無事時、便回頭、向這一念子上、提撕狗子、還有佛性也無、趙州云無、將這話頭、只管提撕、不要思量、不要穿鑿、不要生知見、不要强承當、如合眼趂黃河、莫問趂得過趂不過、盡十二分氣力、打一趂、若眞箇趂得、這一趂、便百了千當也、若趂未過、但管趂莫、論得失、莫顧危亡、勇猛向前、更休擬議、若遲疑動念、便沒交涉也、謙嘗從劉寶學請、住建之開善、向與雲臥同侍大慧、最久、劉朔齋云、文公朱夫子、初問道延平、篋中所携、惟孟子一冊、大慧語錄一部耳、臨安府淨慈北磵簡禪師、贊茶陵郁云、進步竿頭顯斷橋、太虛凸處水天凹、古今喫顯人多少、不似閣梨這一交、贊靈照女云、屋裏橫機抗老爺、門前斂手揖丹霞、娘生爺養好兒女、也有許多無賴查、叢林多誦之、淳祐丙午三月晦日、書偈云、平生無伎倆、赤脚走須彌、一步闖一步、三更過鐵圍、且曰、塑日可行矣、至期趺坐而滅、中書舍人程公許、奠以文、略曰、跖南山頂、垂綸千尺、湖水渺瀰、魚寒不食、示病及期、體癯神逸、維莫之春、參徒雲集、師顧而笑、吾歸有日、題四句偈、玆爲絕筆、及孟夏朔、泊然入寂、師昔所證、本自緜密、末後一着、乃見眞實、是爲實錄、噫老磵神情秀特、博學强記、而喜爲文、得法於東庵佛照、昔甘露滅、瑩仲溫、皆見地明白、其可以文字多之、老磵委順時、尤殊特若此。

參預眞文忠公德秀、與雙徑崧少林同里閈、相與講道、翰帖往來、無歲無之、一帖云、甲子乙丑年間、在延平、嘗夢至一所、十六羅漢在焉、其中相好端嚴者、忽開目相視、微笑曰、得大堅固力、

俄而天樂浮空而至、音節之妙、絕異世間、遂窘今將三十載、佩服不忘、近於夢寐、得閑山一片、築小庵其上、欲以大堅固力爲銘、擬得吾師一偈、以開發蒙滯、等覺亦舊遊也、其能忘情乎、余見此帖於徑山三塔庵、烏虖、西山可謂三十年一夢而覺矣、欲銘大堅固力、竊語作麼、何必佛行重說偈言。

慶元府小靈隱柏巖凝禪師、性簡亢、無所交接、乃息庵法嗣、住金文日、提綱云、盡大地是箇住處、不用强安排、盡大地是箇當人、何須求影迹、東邊住喚作東邊長老、西邊住喚作西邊長老、翻來覆去、橫倒竪直、一月之間、做出許多不唧溜、雖然、儞要見凝上座、又却在那邊、更那邊、儞不要見、又却在儞諸人眉毛眼睫上、如是而住、如是而說、一箇舌頭、分作兩橛、且道、那箇舌頭、顧左右云、了、大抵步驟熱、如簷雲汗血、無塞態也。

秀巖瑞禪師、與無用松源入閩、見乾元木庵、問、近離甚處、曰鼓山、曰恰欲得鼓山信、將得來麼、巖展兩手、庵曰、參堂去、俾其執庫務、亦不憚勞、庵陰奇之、洗衣次、庵曰、作什麼、巖提起衣、庵曰、答話也不會、巖擬議、庵便掌、忽省發、後住明之育王、爲佛照嗣、庵聞之寄以偈曰、媽媽年來齒髮疎、心心只是念奴奴、一從嫁與潘郎後、記得從前梳洗無、余昔預石門會和尚法席於九峰、聞其言如此。

鐵鞭韶禪師、剛正孤硬、以大法爲重任、住吳門承天、廣架僧堂、以延衲子、室中舉狗子佛性話、驗之少有契者、元雙杉時在會中、投偈云、狗子無佛性、一正一切正、寰中天子勑、塞外將軍令、鐵鞭領之。

笑庵悟禪師周氏、居蘇之常熟、久侍才無等、復與松源同扣密庵、密庵曰、爾平生見處、試語我來、隨通所見、曰未在、參堂去、笑庵後於僧堂中、見剔燈省悟、室中橫機無所讓、頌德山入門便棒云、倒嶽傾湫與麼來、小根魔子謾疑猜、神駒一躍三千界、空說門前下馬臺、密庵聞而喜、昔松源在衆時、疎於世事、笑庵微細、皆任責、及源住靈隱、庵在里之靈巖、具舟抵杭訪之、到門三日、方得相見、無慚色、後源赴法華招、又以靈隱、力擧自代、前輩所見、異於流俗、與今人一語或訛、終身爲恨者、大有逕庭也、併書此爲後來龜鑑。

笑翁堪禪師、門風壁立、氣蓋諸方、初住台之報恩、台舊無律宗、師與郡守齊公碩、議合十寺爲一、築壇唱南山開遮持犯之法、風厲後學、及遷平江虎丘、閩帥王公居安、復以雪峰招之、且貽書廟堂、謂南方佛法不競、須賴作興、得旨乃行、未幾、詔住杭之靈隱、忽僧持釋迦出山像請贊、卽書云、半夜逾城、全無肯重、端坐六年、久靜思動、衲卷寒雲下雪山、與人相見又何顏。

松源岳禪師、由虎丘遷靈隱、老而聵、叢林呼爲老聵翁、以所傳白雲端和尚法衣、亟欲付人、垂三轉語云、開口不在舌頭上、大力量人爲什麼、擡脚不起、大力量人爲什麼、脚根下紅線不斷、而無契者、留衣塔下、曰、三十年後、有我家子孫、來住此山、以此付之、遂告寂、石溪後亦由虎丘奉旨而至徑、拈衣云、大庾嶺頭、黃梅夜半爭之不足、讓之有餘、而今公案現成、不免將錯就錯、捧起衣云、敢問此衣、白雲傳來、松源留下、明什麼邊事、惱亂春風、卒未休、今佛海留於雙徑傳衣庵、其復有所待耶。

絕照鑒禪師、初住里之乾元、佛生日上堂云、老鼠雖無三寸光、徧天徧地起災殃、命根落在乾

元手、消得當頭一杓湯、由是名播叢林、後遷鼓山、學者淵趨雲萃、晚年玉几論薦、惜乎命將下而寂矣、絕照福州人、嗣訥庵。

肯庵圓悟禪師、建寧人、天姿閑暇、居武夷山、餘十年、因聽牛歌悟道、嘗有偈云、山中住不識、張三并李四、只收松栗當齋粮、靜聽嶺猿啼古樹、瑞世於福唐大目禪苑、嘗授儒學於晦庵朱文公、與師辛公棄疾、爲同門友、因以黃檗延之、入寺有讖、其行李數十檐、辛聞之、蹙然不樂、後過都運黃公瓌、同訪之、且曰、有道之士、三衣外無長物、多多益辦、不爲道人累乎、庵笑不答、徐而共觀諸老手帖、因盡揭籠篋示之、皆古德墨蹟、紫陽書翰、辛有慚色。

寒齋高士林公公遇字養正、棄官無經世意、惟與山林負大法者講明此道、寄竹溪林公希逸云、此事何須向人說、有耳如聾眞祕訣、此事何須向人語、有口如瘖眞活句、盲聾瘖瘂是仙方、箇中別有長生路、長生路、亦無朝亦無暮、亦無今亦無古、亦無萬象與森羅、亦無山河并國土、長生路在何許、不待丹成自輕舉、只在目前無尋處、要尋只在無尋處、寒齋所著逸心鑑錄有補於吾教、後村劉公銘其墓云、猗公所立、與天壤俱、起乎畫前、復于性初、以爲釋耶、則踐乎實、以爲老耶、不放乎虛、探千古之祕寶、而獨得、叢一世之苦淡、以自娛、余所述者、迹之區區、若君之心、不可擬摹、有欲求之、于君之書、此名言也、勿問元吉。

東山源禪師、初在癡鈍室中、聞舉如何是大道之源、下一喝、述偈曰、大道之源立問端、老魔徹底自欺瞞、誰知家醜難遮蔽、一喝當陽雷破山、久從老佛心於徑、山證徹闡域、歸閩投以偈曰、揭驢腦蓋、笑談間、槃走珠兮珠走槃、一段風光攔不住、堂堂擺手出長安、時凌霄會中、人物如林、清鑑脚、阡都寺、咸在焉、皆趂韻餞之、後出世嗣佛心、東山與參與徐公清叟爲方外友、公帥閩日、以雪峰招致、離蘇之虎丘、至建上、順寂于光孝、悲夫、

雙杉元禪師、戒行嚴潔、住秀之天寧、小參舉應庵室中問密庵、如何是正法眼、庵云、破沙盆、拈云、者些說話、如三叉路口多年一條爛木頭、風吹日炙、誰敢覷着、忽被箇健兒馱將去、上面元來有官印、且道印文在什麼處、五陵公子少年時、得意春風躍馬蹄、不惜黃金爲彈子、海棠花下打黃鸝、薰石田特稱之、雙杉生於福州福清鄭氏、先有溫蘿庵後有密庵、繼而遷僻雙杉也、遷僻即其俗門叔父、法門落髮師、清如源者、見趣操行、尤卓然、鄭氏所出尊宿、可謂盛哉、

枯禪鏡禪師、清苦古朴、太師史衞王、尤致敬之、初接見、即問曰、疎山曹家女、始末如何、枯禪厲聲曰、相公與麼問、失却一隻眼、然則祖師垂示、可得而箋注耶、左右愕然、王笑而已、遂進席徵詰論辯、至夜分方散、惜當時無人與記錄耳、枯禪每見求掛搭者、則先令撤去白領、剪除濶袖、

鼇峰定禪師、福之長溪人、嘗過毗陵時、思庵依無際、値開堂、舉釋迦彌勒是他奴、他是何誰、定曰、不會、又舉似之、又曰、不會、無際擯住曰、一不會二不會、定失聲答曰、泥團土塊、後於永嘉龍翔文絕象會中分坐、無際在明之大白、詒書趣歸、昔佛智老師、亦侍無際、故嘗言之、

安吉州道場別浦舟禪師、師事老佛心、後爲空叟嗣、佛成道上堂云、釋迦老子二千年、摩竭陁國自云、明星見時、豁然悟道、胡人多詐、知他是實是虛、後來眞淨道、今有克文比丘、於東震旦中、赫日見時、又悟箇什麼、關西人沒頭腦、爭知是有是無、川僧開口見膽、一句是一句、拍床云、

是那一句、曾經巴峽猿啼苦、不待三聲也斷腸、又云、百丈三日耳聾、馬祖有過無功、臨濟三遭痛棒、黃檗有始無終、虎嵩不行棒不行、喝成蛇底成蛇、成龍底成龍、拍床云、不見道、鶯遷楊柳岸、蝶舞海棠風、見處穩密、拈出示人、如春行花、月在水、了無朕跡、空叟之門、嶄然而絕出者也、老藏云、別浦嘉定間、與癡絕並驅爭先、惟壽不及癡絕、烏虖、惜哉、

雙杉元禪師、乃柔萬庵之嗣、國史陳公貴謙與弟參預文定公貴誼、於武康龍山、搭雙杉庵館焉、答國史公編宗鏡書云、正欲詣台屏、恭致問訊、藻翰寵臨、伏審、深入宗鏡三昧、辯才機用、悉無畏、就揭所錄數板、聯珠貫璧、眞擇乳鵝王眼腦、深用降歎、但恐日新之證、將棄舊習、於此去取或未一定、如欲啓發多聞强識、使知聖賢地位、不容以智力可挾、用此爲致道之具、求無入非自得之妙、庶時濟物、浩然無窮、是以用佛爲眞儒之効也、世有局於見聞者、主張門戶者、心是而口非之、不得其詳、意在恐人、而不知其自欺、眞所謂可憐憫者、觀此亦可意解也、室中三轉語、禪和子第平生工夫、如應舉三場文字相似、通日夜爲之、猶恐未暇、豈是好趁難而捨易、棄彼而取此、蓋不專工體究、未到大休歇田地、徒成知見解會、障自己眼、倒行逆施、前輩有言、若眞箇要打透此事、切不可看此錄、將來意識先行、未擧便會、更無可疑、失佛方便、則無入頭處、雖曰利之、其實爲害、陳操尙書、是个參禪樣子、對雲門敎意、尙自拈出、口欲言而詞喪、心欲緣而慮忘、被雲門一期籍沒了家財、是也、今居士要爲法施大檀越、須金圈栗棘鐵酸餡子、用事、勿引人入草窠、反增其粘縛、如何、因筆忉怛、稍暇當請、拄杖以謝多口之罪、國史公、因此開悟。

西山亮禪師、頌趙州勘婆子云、飢時定開飢、飽時定開飽、婆子在臺山、趙州勘破了、遜庵可之、出世金陵清眞、提唱語言、發若機括、寄天童癡絕云、潦倒西山百不能、隨身賴有一枝藤、東撐西拄消閑日、甘作荒山小院僧、住四明小靈隱、而終、西山蜀人、性方雅不喜、與俗流交、無準敍其語、稱爲本色宗師者也。

無準佛鑑圓照範禪師、少穎悟、以機辯自將、謁蒙庵于雙徑、庵問、何處人事、曰劒州人、問還將得劒來麼、佛鑑下一喝、庵曰、烏頭子、也括嘆人、佛鑑髮黑、時呼爲烏頭、後隨侍破庵、因謙道者入方丈、請益、躊躇而往、破庵見謙至、便問、近日胡孫子如何、謙曰、胡孫捉不住、破庵曰、用捉作麼、佛鑑聞之、胷次豁然。

井山密禪師、至節小參云、正令全提、十方一團鐵、冥樞坐斷、大地絕行蹤、不是禪、不是道、摩竭提國、三七日中、鐵壁鐵壁、少林山下、九年冷坐、浣盆浣盆、自餘臨濟德山、總是衆盲摸象、一向與麼、荒草連天、拂子俯徇、時宜、曲開方便、以拂子劃云、一劃爲陽、又劃云、一劃爲陰、陰陽交感、歲功乃成、忽若乾坤窄、乾坤窄、日月星辰一時黑、且道是陽耶、是陰耶、擲下拂子云、待石筍抽條、卽向汝道、井山乃枯禪俗門之姪、法門之嗣子也、自幼至長、羽翼之、如鷹兒出窠、便有冲天志、明師出賢資、信矣、恨不能盡其設施而早世。

建康府保寧卽庵覺禪師、嘗與無準同參破庵、後因無準山居、寄以偈云、吸松風飽山色、浩養未妨清徹骨、夢覺千嵩杳靄分、與來一笑乾坤窄、霽霞凝雪翠滴滴、泉瀉斷崖聲瀝瀝、故人斯樂我何知、遐跂白雲抱幽石、送高源住梨洲云、小玉聲中認得些、至今兩眼尙眯麻、阿師不雪

鄉人耻、鼎鼎敎誰辨正邪、蜀諸老如高源、卽庵、石田、無準、道價皆爲一時之重、猗歟盛哉。

慶元府雪竇無相範禪師、參松源、開法焦山、龍象駢集、爲新雪竇、無準上堂、擧楊岐和尚出世、陞座罷、九峯勤和尚、握其手曰、且喜得箇同參、岐云、如何是同參事、峯云、楊岐牽犂、九峯拽耙、岐云、正恁麽時、楊岐在前、九峯在前、峯擬議、岐云、將謂同參、元來不是、頌云、楊岐左眼半斤、九峯右眼八兩、一對無孔鐵鎚、至今收拾不上、叢林咸以大範呼之、蓋與無準行道同一時也、赴雪竇請、遂遷寂先、是紹定辛卯歲旦上堂云、春來萬彙悉皆新、一段風光畫不成、無事妙高行一轉、不知誰是境中人、明日齋退巡寮、登妙高峯、且云、會吾意否、又明日赴堂喫粥罷、索湯沐浴、端坐而寂、衆議峰頂建窣堵波、見於佛鑑所記云。

平江府雙塔無明性禪師、性端潔疾詐謬、頌開口不在舌頭上、云、明脩棧道、暗度陳倉、刻舟猶覓劍、夜雨過瀟湘、大力量人、擡脚不起、云、只許老胡知、不許老胡會、白雲盡處是青山、行人更在青山外、大力量人、脚下紅線不斷、云、放兩抛三、瞞神罵鬼、換盆換盆、誰不識、頌趙州見二庵主、云、南枝向暖北枝寒、一種春風有兩般、寄語高樓莫吹笛、大家留取倚欄看、松源首肯之、無明一生眠食、不離清衆、老益精進、惟此一節亦可書、況祐子資其決擇乎。

柏岩山禪師、福之玉融林氏子、飫遊叢林、所至輒前席、題畫水波壁、云、波浪鼓時無點滴、風濤息處卽瀰漫、明牕紙罅休尋覓、壁上行船方好看、同輩皆稱歸里住、洋嶼雲門、嗣息庵、砥節礪行、衆所畏服。

中巖寂禪師、天性孤高、示衆云、過去諸如來、塡溝塞壑、現在諸菩薩、棍無頭薄無口、未來修學人、推不向前、拽不向後、若也會得、同坑無異土、若也不會、君向西秦、我之東魯、又云、行亦禪坐亦禪、終日擧頭不見天、出乎爾反乎爾、認着依然還不是、拈起則充塞太虛、放下則纖塵不立、不拈起不放下、鎭州蘿蔔頭、趙州索盡遼天價、又云、今朝七月旦、夏制將垂滿、更上曲彔床、擧切忌咯啄、此數語如含沙工於射影、吾恐見之不中其毒者幾希。

天目禮禪師、訪同參不值偈云、庭前一樹紫荆花、老子何嘗不在家、若謂弟兄相見了、先師門戶隔天涯、爲叢林誦、頌野狐話云、墮落知何處、憑君子細看、潮來無別浦、木落見他山、爲癡鈍喜嘗與北澗同在佛照會中、相與提衡、故有簡川禮竅之呼、余景定間、寓保寧、始見全錄、天目預老職許可、豈苟然者哉。

短蓬遠禪師、平生不設臥具、晝夜枯坐、得遠鐵橛之稱、開法餘杭永壽、爲明極嗣、中秋寄同輩云、一點孤明徹太虛、體無盈缺任方隅、光含萬象珠懷蚌、影落千江井覩驢、馬祖翫時迷向背、長沙用處絕名摸、衲僧直下忘標旨、吐七吞三總自如、不害筆墨遊戲、後住吳門承天、一日上堂云、承天一句、言前分付、達磨不會、隻履歸去、越宿無疾坐逝、時光東谷亦道行、一力起洞上之宗、無謂無人。

石田薰禪師、眉山彭氏、嘉定間、出世高峯、屋老僧殘、先是高原、無準、卽庵、中嵓、石溪諸老徐之、然後請從、開爐上堂云、高峯門戶如灰冷、多謝諸公有歲寒、些子死柴頭上火、大家看力試吹看、石田住吳門高峯、寥寞荒寒、過於法昌在分寧、時開爐、高原宿德咸集、又差勝、以一力撾鼓

爲十八泥人說法也。

臨安府淨慈混源密禪師、天台盧氏子、遊泉南、參敎忠光晦庵、乃大慧所謂禪狀元者、久而盡得其道、後有示衆云、恁麼恁麼、掘地覓青天、不恁麼不恁麼、虛空揣出骨、釋迦老子、以僧伽梨正法眼藏、分付摩訶大迦葉、生錢放債、換水養魚、世尊傳金襴外、別傳何物、倒却門前刹竿着、不行官路、只販私商、內外中間、覓心了不可得、與汝安心竟、家財俱籍沒、磉下獲黃金、德山棒臨濟喝、官拗不如曹拗、情親不如義親、腰間曆日已多時、不用攢龜打瓦、楊岐三脚驢兒、入僧諸人鼻孔、雲門以黑漆竹篦、斷衲僧命根、東勝神州、火發燒着帝釋眉毛、西瞿耶尼人、忍俊不禁、連聲叫屈、初三十一、中九下七、掛起鉢囊、放下柳棟、山河大地、日月星辰、三月安居、諸佛菩薩、畜生驢馬、九旬禁足、以大圓覺爲我伽藍、寂滅現前、據款結案、去年梅今歲柳、顏色馨香、依舊、喝但願春風齊着力、一時吹入我門來、閱人語句、須是眼正、究其密說顯說直說曲說、如恒山之雲開遮自在、須是同一眼觀、同一意見、方不辜負前輩、混源出處、已備于嘉泰普燈、此數語未載、石田謂、受虛中只能詳類事跡、愚謂、聯燈去取、眞不放過也。

國史陳公貴謙、答舍人眞公德秀書曰、承下問禪門事、仰見虛懷樂善之意、顧淺陋、何足以辱此、然敢不以管見陳白、所謂話頭、合看與否、以某觀之、初無定說、若能一念無生、全體是佛、何處別有話頭、只緣多生習氣、背覺合塵、刹那之間、念念起滅、如猴孫拾栗、相似、佛祖輩不得已、權設方便、令咬嚼一箇無滋味話頭、意識有所不行、將蜜菓換苦胡蘆、陶汝業識、都無實義、亦如國家兵器、不得已而用之、今時學者、却於話頭上、强生穿鑿、或至逐箇解說、以當事業、遠之遠矣、稜道者二十年、坐破七蒲團、只管看、驢事未去、馬事到來、因卷簾大悟、所謂八萬四千關捩子、只消一箇鑰匙開、豈在多言也、來敎謂誦佛之言、存佛之心、行佛之行、久久須有得處、如此行履、固不失爲一世之賢者、然禪門一着、又須見徹自己本地風光、方爲究竟、此事雖人人本有、但爲客塵妄想所覆、若不痛加鍛煉、終不明淨、圓覺經云、譬如銷金鑛、金非銷固有、雖復本來金、終以銷成就、蓋謂此也、來敎又謂、道若不在言語文字上、諸佛諸祖、何故謂留許多經論、在世、經是佛言、禪是佛心、初無違背、但世人尋言逐句、沒溺敎網、不知有自己一段光明大事、故達磨西來、不立文字、直指人心、見性成佛、謂之敎外別傳、非是敎外、別是一箇道理、只要明了此心、不着敎相、今若只誦佛語、而不會歸自己、如人數他珍寶、自無半錢分、又如破布裹眞珠、出門還漏却、縱使於中得小滋味、猶是法愛之見、本分上事、所謂金屑雖貴、落眼成翳、直須打併一切淨盡方有、小分相應也、某向來雖不閱大藏經、然華嚴圓覺維摩等經誦之、亦稍熟矣、其他如傳燈、諸語錄、壽禪師宗鏡錄、皆翫味數十年間、方在屋裏着到、却無暇看經論也、楞伽雖是達磨心宗、亦以句讀難通、不曾深究、要知吾人皆是誠心、非彼世俗自瞞以資談柄而已、姑以日用驗之、雖無濁惡麁過、然於一切善惡逆順境界上、果能照破、不爲他所移換否、夜睡中夢覺一如否、恐怖顚倒否、疾病而能作得主否、若目前猶有境在、則夢寐未免顚倒、夢寐既顚倒、疾病必不能作得主宰、疾病既作主宰不得、則生死岸頭、必不自在、所謂如人飲水、冷暖自知、待制舍人、於功名鼎盛之時、清修寡慾、留神此道、可謂火中蓮花矣、古人有言、此大丈夫事、非將相之所能爲也、又云、直欲高高峰頂立、深深海底行、更欲深窮遠到、直到不疑之

地、來敎謂、無下手處、只此無下手處、正是得力處、如前書所言、靜處鬧處、皆着一隻眼看是什麼道理、久久純熟、自無靜鬧之異、其或雜亂紛飛、起滅不停、却舉一則公案、與之厮崖、則起滅之心、自然頓息、照與照者、同時寂滅、卽是到家也、某亦學焉而未至也、姑盡吐露如此、不必他示、恐儒釋不謀者、必大恠之、待制舍人、他日心眼開明、亦必大笑而罵之、國史公多見宗匠、大川濟禪師、荷法爲事、狷介無當意者、在四明寶陀、有三句語、曰寶陀一路、來來去去、撞着聾頭、風波無數、曰寶陀一玄、掣臂揎拳、打失鼻孔、蒼天蒼天、曰寶陀一妙、無人能到、喫飯着衣、阿屎放尿、住冷泉示寂、遺囑撤骨不造窣堵、說偈曰、地水火風先佛記、冷灰堆裏無舍利、掃向長江白浪中、千古萬古第一義、眞一代宗師之模楷、起澗東之道者也。

山陰淸首座、得心法於無用、有椒頌云、含煙帶露已經秋、顆顆通紅氣味周、突出眼睛開口笑、這回不戀舊枝頭、諸方猶能誦、不知爲淸所逃、或載爲無用作、非也。

夢堂升禪師舉、雪竇示衆云、立賓立主、好肉剜瘡、擧古擧今、拋沙撒土、直下無事、正是無孔鐵鎚、別有機關、定入無間地獄、拈云、這般漢、須是具緇素眼、始得、活句下明得、堪與佛祖爲師、死句下明得、自救不了、且道、雪竇恁麼說話、是活句是死句、待雪竇出地獄、卽向汝道、又云、達磨示衆、各言所見、小兒鬬百草、到處去尋討、黃昏鬬罷却歸來、不知狼藉敎誰掃、平生提唱、如人倫之有周孔、鱗羽之有龍鳳、晚年閉戶、不喜交接、衲子見之、如登龍門、昔雲蓋智、疾禪林便軟暖、道心淡薄、來參者、掉頭不納、聞其容入室、則堂室爲滿、夢堂有之矣。

石田薰禪師曰、破庵老和尙言、禪和子室中下語、總是知見解會、如何了得、須是向言句外臨時別有意智、去離泥水方得、我舊時行脚歸去、與一同行、在合州釣魚掛搭、彼中亦是一員前輩尊宿、我去入室、再三免我、不肯擧話、及至同行去、却不免他、但拊膝一下云、儞向這裏下轉語看、同行無語、番番入室、只是如此問、他同行云、難耐這漢、番番只如此問、我無可應他、儞爲我下一轉語、老和尙云、儞待他今番又如是問、儞但將兩指、夾鼻聲、他一聲便出、同行果去入室、依所敎、尊宿云、有人敎壞儞了、信知此事、得底人如兩鏡相似、自然彼此不相瞞、做工夫須是省要處做、令到這般田地、方堪爲種草。

笑翁堪禪師、行丐到泉南、休于洛陽、與一僕夫山行、偶至下生院、古屋數十間、廊卷風葉、寂無人聲、惟見一老僧、雪頂厖眉、負暄于殿陛、徐起止客、坐於僧堂前破木床、曰、何所而來、翁曰、來無所來、僧曰、因什麼在遮裏、翁曰、早晨喫白粥、如今肚裏飢、僧曰、不是遮箇道理、速道、翁指屋角樹曰、好一株木、得恁麼蒼翠、二人大笑、相就語移刻、始知老僧嘗見無用來、雪峰玢侍者、言此甚詳、惜乎、老僧偶忘其名爾。

鐵牛印禪師曰、正堂辯和尙、與日書記書云、若要道行黃龍一宗、振擧、切不可絺章繪句、晃耀於人、禪道決不能行、古有規草堂、近有珪竹庵、更有箇洪覺範、至今士大夫、只喚作文章僧、其如奈何、如公頌三日耳聾與女子出定、非徹見淵源、何爲至此、勿以小小而礙大法道、不獨明辯一己之私、諸方宿老、皆如此議、知我罪我、在于此書、萬萬察之、此語切中今時之病、學者不可忽也、鐵牛紀載、誠有補於後學、所謂草堂諸老者、見處非不穩當、當時亦未免有此議、嘉定間、薰石田博學能文、痛自掩抑、以此故也、璨隱山初見元城語錄、喜甚携歸、閱之未竟、卽掩卷、

侍僧曰、何初喜之遽棄之、曰衲僧家、念念常在乾屎橛上、尙爲雜用心、況世間議論文章乎、此亦堤防之法、當如是也、先德云、學者漁獵文字語言、正如吹網欲滿、非愚卽狂。

閩山居士俞景賢、入浙謁參知識、後見鄧峰用首座問、如何是祖師西來意、用曰、我欲向汝道、汝還信否、士曰、請師道、安敢不信、用曰、汝要緊參禪、不可問西來意、士曰、何也、用曰、西來有甚意、士豁然了解、拂衣便出、用復召曰、見什麼便出去、士回顧、而用喝一喝、士曰、住住、便行、自此歸里、割棄親眷、顒顒獨居嶼上別墅、述偈曰、錯脚游洪歷淛歸、更無一法可思惟、柴門高掩長江上、誰管風濤鼓是非、用見誰庵。

長樂珪藏主曰、向在南北山、與元雙杉同住、見其淸約介靜、四威儀中、不忘究竟己躬大事、日間偏要尋僻寂去處、孤坐兀如枯株、夜間睡夢、亦提起古德話頭、若瞻語喏喏略可辨、可見其做工夫精專純一、那時便知、其必爲法門大器也、每思其人、未嘗不面熱汗下、見於斷橋答雲谷手帖。

嘉興府光孝石室輝禪師、僧問、明招見勝光、纔跨門、光垂一足、意旨如何、室曰、乞兒弄飯椀、問只如招云、伎倆已盡、拂袖便行、又且如何、室曰、鈍鳥逆風飛、室久侍明極、後嗣無準、性介烈、貴勢不敢干以私、住慶元彰聖、官府科擾無節、棄去、府公聞之、雖勉留不回矣、嘗掛牌首衆徑山、其語穩實。

國史陳公貴謙、嘗在鳥回、與月林觀禪師夜坐、林曰、如何是賓中主、公曰、頭腦相似、林曰、如何是主中賓、公曰、橫按鐵鎚行正令、太平寰宇斬癡頑、復隨聲曰、如何是賓中賓、月林搖手而笑、噫公之機辯、猶可想見也。

無量壽禪師、撫州人、答太師史衞王云、佛法在一切處、奏事書判處、着衣喫飯處、致君澤民處、納士用賢處、第一不可擬心尋覓、纔是如斯、又不得也、嘗首衆鄱陽刁峰、太師以京口金山招之不出、卽遁于隆興咸山、晚年始赴台之瑞嵓請、是亦不失爲比丘之大體者矣。

石田薰禪師曰、既入佛門、喫佛飯、潑天門戶、要人扶持、亦須是箇漢始得、況稱長老、名既如此、實當如何、具向上眼目、得大機用、可以開鑿人天饒益後學、方不孤負出世二字、就中下機言之、亦要識因果、勤香火、早晚禪誦不懈、掀新補舊、一切處運眞實心、方有少分相應、不可坐方丈領見成、勞者責人、逸者歸己、瞬息之間、頭白齒黃、前頭大有事在、前輩長老、時節因緣、既至不奈何、劈破面皮、多是住院後、却進得一步、蓋不問院之大小、衆之多寡、千人萬人叢中亦如此、單丁去處亦如此、二六時中、專以此道爲懷、長久工夫不間斷、故能打發、石田此語、可謂毒藥苦口利於病也。

潭州石霜竹嵓印禪師、隆興府人、道味苦嚴、見者莫不肅然心服、抑齋陳公韡、帥潭日、以龍牙福嚴招致皆不赴、後以石霜請、不得已而應命、僧問、如何是和尙家風、嵓曰、問家風作麼、問、如何是佛法大意、嵓曰、湘潭雲盡暮山出、巴蜀雪消春水來、同門秀孤峰開無門、皆推遜之、平生機鍵縝密、語言粹夷、豈非親見月林之力歟。

大川濟禪師、嘗與弃山侍老佛心、弃山偶外幹不及請假、洎歸佛心曰、阡兄兩日何往、答曰、未嘗出入、大川適在旁叱曰、參禪人、何得妄語、弃山面赤汗下、自此尤謹語言、昔昭默受死心責、

亦類此、湛堂歎其皆良器也。

平江府虎丘坳堂濟禪師曰、毛髮爪齒、皮肉筋骨、髓腦、謂之地、唾涕膿血、津液涎沫、痰淚精氣、大小便利、謂之水、暖氣謂之火、動轉謂之風、此四緣假合、而成幼身、須有主宰、始得、何謂主宰、試道看、坳堂蜀人、嗣息庵、與別浦瘞絕、頡頏一時、惜壽俱不及瘞絕也。

枯崖和尚漫錄卷中終

枯崖和尚漫錄卷下

蒙庵聰禪師、嘗歸福州、謁木庵於乾元、木庵問曰、莫是聰侍者麼、蒙庵稱名未竟、木庵曰、此事非聰明智慧之所能辯、如何、蒙庵曰、通身是口吐不出、曰中毒了也、蒙庵曰、莫掩彩他、曰且坐喫茶、茶罷木庵又曰、須知此事不在方冊上、不在口皮邊、蒙庵曰、畢竟在什麼處、曰鐵蒺藜當面擲、蒙庵曰、大好不在口皮邊、庵便打、蒙庵喝一喝而出、蒙庵既得法於其落髮師、光晦庵、以大父事雪堂、復謁木庵於乾元、見密庵於烏巨、水庵於淨慈、誰庵於高亭、始深徹淵奧、是未嘗一日無師友也、欲其法道不昌得可乎。

無準佛鑑範禪師曰、木平參洛浦、便致一問云、一漚未發時如何、浦云、移舟諳水脈、舉棹別波瀾、平不契、却往問盤龍、一漚未發時如何、龍云、移舟不別水、舉棹卽迷源、木平便悟去、後來雲峯悅和尚拈云、木平若向洛浦言下悟去、猶較些子、後來不合向盤龍死水裏浸殺、住後有問、如何是木平、平云、不勞斤斧、果然只坐在這裏、爾道、他恁麼說話、意在於何、多見兄弟往往商量、移舟不別水、舉棹卽迷源、便是死水、如何是木平不勞斤斧、所以坐在遮裏、若恁麼會去、驢年也未夢見在、遮裏須覷見他古人一些子得人憎處、始得、佛鑑此語、發藥學者不淺、晚年唱中峯之道於雙徑、機用迅駛、如擊石火閃電光、卽此語也、不惟英雋鱗集、今上皇帝、亦思問道、紹定六年七月十五日、御修政殿引見說法、賜徽號金襴、亦此語也、豈有他術哉。

伊巖玉禪師、嚴州人、初稱名儒、有篤行、中年厭習舉業、專究洛學、忽曰、是不可以了吾事、遂裂縫掖、薙鬚髮、學出世法、登徑山、謁老佛心、而師事之、久無所契、復往見癡鈍于雪竇、依止三年、一日忽明得卽心卽佛話、故有無毛鷄子貼天飛、千山萬山高突兀之句、嘗看劉元城語錄云、所謂禪一字、於六經中有此理、但不謂之禪、爾及達磨西來、此話大行、據此事不容言、則夫子不答是也、且西來意不必問、而話亦不必答、向上老和尚、好玩弄人、故以不答答之、所謂柏樹子者、乃繫驢橛也、後人不知、只守了樹、尋祖師西來意、可一笑也、讀至此處、曰、若是當時、得聽此語、這裏正好與一錐。

眞源日禪師曰、馮侍郎濟川、張侍郎子韶、問道於徑山妙喜禪師、師問、隔物不見道時如何、子韶對之曰、今日親覩慈顏、妙喜云、隔、子韶云、雖然如是、瞞他一點不得、妙喜却問濟川、對之曰、不較多、妙喜曰、二公對答、非不親切、但未見道、如有一物頓在臥房裏、只隔一重壁、爲什麼不見、禪和子說道理、便道、十方無壁落、四面亦無門、隔箇什麼、饒儞眼似銅鈴、也須是悟始得、又曰、禪和子檐板、纔下得轉語、未能依稀彷彿、便言我百了千當、余頃見佛智老人、亦曰、妙喜橫說竪說、切中今時之病、近來欺世盜名、未得謂得、遞相狐媚、更相印受、視東山直下、不爲佛法罪人者幾希、斯言學者並宜識之。

東山源禪師曰、往年出嶺、初上徑山、其時枯禪做首座立僧、破庵西堂掛牌、一時龍象畢集、如石田無準、皆同在衆寮、破庵尋常室中偏愛、舉經行及坐臥、常在於其中、如何是其中事、亦曾去請益他、一詞不措、臨起單、却作一頌相送云、換骨抽筋一句、只缺點頭自許、若能自解知非、便見平吞海宇、箇便是爲人、抽了釘拔楔、自此過平江靈巖、見癡鈍、時茂業海做前堂立僧、今大慈笑翁育王大夢、皆在彼中、同住、叢席甚盛、癡鈍常云、詢佛燈四十九日夜、抱露柱悟去、次上蔣山、見浙翁、因室中舉卽心是佛、下語云、抱橋柱澡洗、翁云、有什麼快活、下語云、請和尚放下着、披他打出、後復見巖雲巢皎中庵、上衢州祥符、見穀六巖、歷扣二十餘員知識、看來無出應庵下兒孫、直截緊峭、所以宗枝繁衍、烏虖東山於悟門、雖大廓徹、猶如先聖得一善、則拳拳服膺而弗失之矣。

眞源日禪師曰、雪巢和尚入室、問僧不是風動、不是幡動、仁者心動、那箇是儞心、又云、不是風動、不是幡動、仁者心動、儞向甚處見六祖、又云、不是風動、不是幡動、仁者心動、是什麼動、發明臨濟之奧旨、證驗衲子之眼目、如運斧臨風之手、其妙在於一斲、爾雪巢當金虜之亂、曾與大慧、同渡江者、大慧笠中藏一金釵、爲路費、時時視之、雪巢伺其不意、取而投諸江、大慧愧謝與之結交、眞源嗣雪巢、以草堂爲大父、故平生語言、挺拔有父祖風烈。

隆首座號南山叟、清源南安人也、壯歲游方、多見尊宿、罷參後禮業海塔、偈曰、業火煎熬業海乾、尙餘劫石影團團、我來笑罷吞聲哭、昔日船從此處翻、播癡鈍塔、偈曰、生苕帝柄背時貨、樹倒藤枯舊陣圖、一代年來低一代、灼然邪法實難扶、南山與無隱雙杉荆叟、同侍癡鈍爲最久。

西蜀保福晦嵓暉禪師、通泉白氏子、嘗與肇諾庵、道谷源、開掩室、同參松源、密契眞要、歸里三主道場、遠近敬鄉、道化益盛、散夏小參云、大智洞明、十方融會、騎聲蓋色、邁古超今、不可以寂默通、不可以語言造、是以大覺世尊、於摩竭提國、三七日中、無啓口處、及至四稜蹋地、盡力提

持、只道得箇是法非思量、分別之所能解、又道、是法不可示、言辭相寂滅、恁麼揭示、譬若斷崖落石、相似、看者不容眨眼、除是一念知非、前後際斷、全體擔荷得去、是眞精進、是名眞法、供養如來、一會靈山儼然未散、如是時時禁足、念念護生、又何必九十日中、無繩自縛、然雖如是、被蒙頭萬事休、此時山僧都不會、語悉類此、癡絕在蔣山題其錄云、大隨和尚道、我參七十餘員善知識、具大眼目者、只得一二、其他皆具正知見、予三十年前、在叢林中、與晦嵒游、當時具大眼目者、惟老松源一人而已、歲次庚寅仲秋、其徒寶日、携主東林提唱之語、乞予編次、由是開帙縱觀、一字一句、造次顛沛、皆有從上大眼目體裁、非徒從事於語言之末、是知松源之道盡在是矣、烏虖、去古既遠、師法益壞、正知見者、覯其人、大眼目者可知矣、晦嵒雖話行於吾蜀、此錄流播江湖、是可爲斯道之畝盟、若善觀者始信、吾言之不妄、癡絕亦有所激而云。

福州聖泉岊翁淳禪師、天姿軒特、嘗坐夏雪峰、値重架鼇山閣、作偈曰、夜半天崩地陷休、一莖草上現瓊樓、儂雖先後不同步、月幌風櫺一樣愁、時競傳誦、雲集無準、向嘗與同行、皆誠敬心服、叢林間、禪者與決可否、議論鋒發、戲以禪判官呼之。

潭州大潙泉山初禪師、字子愚、泉州陳氏子、始業儒、稱鄉先生、後因看趙州語有省、剃髮受具、遍參知識、爲永木庵高弟、嘗記里之承天寺僧堂、云、承天大僧堂再造、百餘歲、外嚴中蠹、人莫知者、住持了空、揣其壞而新之、施者樂役者悅、不半年而成、擁以照堂、明樓在前、任其勞者道本從賁、經始於秋、迄事於冬、了空於是涓辰率徒、入而居焉、寔嘉定六年、十二月十九日也、比丘太初記、僅九十二字、西山眞公典是郡、見而喜、後在湖南、專書招之、住潙山二十年而寂。

嘯巖蔚禪師示衆云、一年三百六十日、今朝恰是結交時、且道、天衣將甚與人分歲、拈拄杖云、一不做二不休、爛烹石虎活剝泥牛、已是滿盤釘出了也、卓拄杖云、三德六味、施佛及僧、法界有情、普同供養、若是粘牙帶齒漢、應笑家風冷淡、一咬見骨底、自然樂以忘憂、雖然如是、明年更有新條在、惱亂春風卒未休、嘯巖語言、如毬康長七尺八寸、美音氣好容色、土木形骸、不自藻節、人以爲龍章鳳姿、天質自然也、烏虖、可不敬哉。

癡絕冲禪師曰、予紹熙壬子出峽、夏於公安二聖、時松源倡密庵之道、於饒之薦福、旱暵艱於着衆、適西湖妙果虛席、松源舉雲居首座曹源應選、亦密庵之嗣也、聽其入門提倡、有省、遂投誠而住、未幾歸侍司、甲寅夏、曹源有信上龜峰之命、復從其行、留三年出、淛、松源由虎丘而遷靈隱、遷庵住華藏、肯堂住淨慈、皆往從之、松源在靈隱、門庭孤峻、八閱月而後得歸堂、凡求掛搭、必呵斥不得、親、一日忽曰、我八字打開掛搭他、自是蹉過了、當下始知、昔在龜峰三年、曹源怒罵嬉笑、皆爲人之方便也、自此不疑、天下老宿、到與不到瞞我不得、已而隨緣放曠、曹源順寂後、二十年、爲人推出、瓣香不敢忘、凡六處所聚、兄弟不可謂無、只是用翳睛法者少、苦哉吾宗喪矣、今年八十二、時節將至、扶病執筆、直敘得法之由、刻諸龕陰、以昭至信、淳祐十年庚戌歲也、烏虖、癡絕世謂其機用如盤珠者、且能鑒鑑光彩、於其師歿後二十年、方瑞世、眞所謂色斯舉矣、翔而後集、搏九萬可立而竢也、名字不肯入他人夾袋中、其識又過人、所以聲譽一世、起中峯之道、亦驗在此矣、晚以吾宗喪矣爲憂、聞此得不爲痛心者哉。

絕照鑒禪師、因淛歸者、上堂云、相別一何久、相逢只舊時、眉毛分八字、鼻孔大頭垂、諸方鍋兒

大小、杓柄短長、直是瞞他、一點不得、且道、鎭州蘿蔔頭、無底籃盛得幾箇、喝一喝、放待冷來看、上堂云、古佛與露柱、相交第幾機、南山起雲北山下雨、金剛與土地神、揩背一擦骨出、可謂家貧猶自可、路貧愁殺人、汝諸人仰面看天、開口取氣、無非這箇消息、因甚不覺不知、若也知去、三世諸佛、無容身之地、苟或未然、乾元留取口喫飯、卓拄杖下座、大抵宗師家、吐露自是迥別、雖然須是離言說相、方見老絕照用處。

石田薰禪師、初到潭州、禮石霜雷遷塔、偈曰、一念慈容元不隔、何須特地肆乖張、平高就下婆心切、惱得雷公一夜忙、名由此彰、見破庵於蘇之穹隆、開室中舉世尊拈花、答曰、焦塼打着連底凍、赤眼撞着火柴頭、庵奇之、石田嘗拈僧問馬祖、如何是西來的的意、雲巢癡絕爲擊節、傳至徑山老佛心、亦云、老僧只得避路。

眞淨大師德英、建溪楊文公億五世女孫、性聰善傳會、依達庵於其四威儀中、有悟入、徑上徑山、投佛照、應對如飛蓬隨風、照許以爲再來毒種、後說法於蘇之朱明、委蛻于常之淨惠、自讖云、自贊贊不出、自畫畫不成、有箇本來相、如何呈似人、活潑潑本無生、鼻孔依然搭上脣、叢林傳之、癡絕跋其錄行世。

月窟清禪師、福州福清人也、少長因覩鄉閭者焚化、乃曰、我願作佛、終不爲猛火所燒、父母訝之、十四歲許以出家、往湖州何山、復庵知爲法器、俾落髮受具、久無所證、不皇寧息、一夜見僧堂中放琉璃燈、省徹、遞偈曰、琉璃放下又放起、一點光明常不已、若人識得這光明、姐姐元來是阿姊、謁遯庵于華藏、値開室、欣躍而進、復旋踵曰、我是無罪人、不入這地獄、後與遯庵酬酢、水乳相合、嘉定間、江右憲使陳公貴謙、以臨汝天寧延之、及赴何山請、道聲益著、平生氣尚剛介、厭諛合苟容、多面折人、叢林爲之肅整、此衛護大法者所當然也。

清烈庵主天台人、居臨安餘杭縣湖西山淡氏庵、年已九十、昏睡眊瞀、晝夜惟枯坐、將示寂、具蔬飯、會村落百餘人、叙相訣語、同詣山頭、引手長揖、入龕趺坐、說偈云、這漢無知、說是說非、拳頭豎起、佛也難窺、化火自焚、由頂兩肘兩膝、五處熾然而起、三昧火光、五色璀璨、堅固舍利、不可勝計、實所山主、能詳言之、烏虖、淨性心宗、常光熾然、無壞無雜、周遍法界、故烈公遊戲死生之際、如此奇特、豈非平生履踐之明驗歟、抑提多迦婆須蜜之發現歟。

諾庵元肇禪師、師範有規、精一於道、因雪上堂云、普賢昨夜呈醜、一片寒光如畫、可憐妙用些兒、引得石人失笑、且道、笑箇什麼、金烏飛上欄干、看爾一場漏逗、頌仲冬嚴寒年年事云、野老年來解放懷、兒孫更以酒相陪、只知好景長時在、不覺老從頭上來、無愧於師矣、昔諸庵與開掩室結伴、參松源、源亦不倦、針箚、故盡得其妙、是不可無賢師友也、足爲後學法。

漢陽軍鳳棲古月祖照禪師、生緣東川廣安趙氏、禮祥甫山主、爲落髮師、敏而疾見、遍遊講肆、所至奪席、忽棄所習、歷閩而浙、依肯堂明得狗子無佛性話、後入破庵室、見其作直視勢、乃咄云、野狐精、破庵劈耳一掌云、畢歷不是者箇道理、又應聲曰、野狐精、破庵又與一掌、示以偈云、一掌幾曾知痛痒、回頭轉腦口喃喃、直饒舌似風雷疾、也落機前第二三、照嘉定間、出世唐興聖果、後在鳳栖、室中垂三句驗學者、一、和煙釣月句、頌云、煙水茫茫釣艇橫、日盈月昃未容分、謝郎不是絲綸客、爭免時人錯見聞、二、截水停輪句、頌云、正眼豁開天地窄、機輪停處海濤乾、

等閑拶出驪珠現、無限邪魔心膽寒、三、不入驢耳句、頌云、儂家一句分三句、見馬逢牛舉似伊、只此更無親切處、眼中聞得始應知、順世時、以後事囑侍郎楊公、公恢曰、徵子孰有知予之心者、楊公爲之、嗟嘻輟食、特叙其語謂、脊骨之硬、不減破庵。

寒齋林公公遇、晚年遺外世俗、造入宗門、齋傍有隙地、架草庵、以延少林誠公、而風日佳時、必過之、二子同合侍立、聽其談論、余間與果藏主到庵、亦竊預焉、淳祐丙午九月、公以疾卒于家、且書偈云、五十八年熟睡、且喜今朝暫地、試將老眼摩挲、只這阿底便是、張橫渠亦云、學者但養心識明淨、自然可見生死存亡、胷中瑩然無疑、寒翁得之矣。

龍溪聞禪師、初遊方到南康、詣雲居、至半嶺、笠頭爲風掀、沿嶺而下、尋至笠所、有省、住常之保安、孤硬清約、僧問、如何是和尚爲人底句、溪曰、鵓鳩樹上啼、僧曰、某甲不會、溪曰、皷已響堂前、喫飯去、無準謂、徑而直、簡而峭者也、頃龍溪道重一方、衲子嚮臻、堂中被位鱗次、夏丁旱、未解制、多起單、溪曰、莫道諸人拄杖子跩跳、後五日、山僧拄杖子、亦跩跳、越五日、沐浴陞堂、歸方丈坐亡、茶毗迸設利、五色者莫計、保安者宿云云。

岌翁、淳禪師、福之石岌人、賦性好奬、稱人善、晚進必悉力薦藉、未開法時、妙語已逼叢林、住慶成、跼室云、這裏打開那邊、塞路因甚如此、活膏肓起必死、謝道舊云、劍池邊松峯下、幾回同步至懸崖、牽得驢兒喚作馬、喝云、是何語覇、又云、二月初一、好箇消息、桃花煞紅、李花煞白、劍池邊楊大伯、笑中打失攔腰白、直至如今尋不得、喝云、有甚交涉、又云、冷坐守枯椿、沒轉身底、多是違時、失候、一回寒徹骨、親暢快底、十分和氣春風、衲僧家兩眼如鈴、嗔斗昨地、翫弄神機、風雲自異、儘教酹酒燒錢、低頭賀歲、風蕭蕭葉飄飄、墻頭桑條動、柳條最苦、北禪唱村田樂、烹露地牛、波波挈挈、怎奈伊何、惹得人收皮角、笑裏藏刀、咄、清平世界不用干戈、誦此如飲玉粧、自然使薄漿荇、於戲、枯禪可謂得其傳矣、了知法乳一源、無異味也。

辟支巖主立堅、三山漁溪人也、初以雙線爲活、倏省覺入應林山中、休粮居于大樹下、妻子追捕之急、遂剪髮過莆之囊山、辟支巖遁焉、後亦從檀施爲僧、淳祐間、郡守林侯希逸、延以龜山陳沈二禪道場、迫而後就、未幾思舊巖、與同道書云、夫稱住持者、作乘楷撫、代佛揚化、素無道德言行之譽、未知仁義禮法之由、草座麻衣、木食磵飲、且以爲愧、推向人前、實何以堪拂衣徑歸、堅之出處、於緇林、亦有助云。

東谷光禪師、風神清拔、有精識、見祚明極、與實齋蔣公、爲法喜之遊、蔣錄西庵三偈以寄、和酬云、莫道西庵小、了無邊與表、還他親到來、一一方分曉、莫道西庵靜、鐵牛吼聲震、露柱與燈籠、點頭相共應、莫道西庵窮、吞空復吐空、相逢金粟老、臈月皷春風、住靈隱已、罷勸淦然矣、東澗湯公漢、祭以文曰、維東谷師、昂然鶴質、作冷泉主、曾不多日、示病已早、示滅何疾、我雖乍識、開口吐實、問訊殷勤、迹疎情密、忽遣手書、古畫名筆、聿來告行、覽之自失、諦觀點畫、宛然逍遙、是過量人、生死齊一、而我凡情、悲涕爲出、雪滿湖山、羸馬難叱、聊持辨香、往弔其室、一時講道相往來、皆名公卿、是曰同人于門。

蒺藜曇禪師、初居湖州普濟、荒寂如傳舍、夙夜自對聖僧坐禪、凡九年、後住蘇之穹隆門風愈高峻、尠有入者、室中常云、穹隆有句子、衲子下語不下語、一例打罵、無準時在會中、爲藏主、少

忤被迹出、且曰、教他住徑山、却來見老僧、後無準住徑山、因遺漏行丐吳門、蒺藜猶在虎丘、二老相見、撫掌大笑。

鎭江府金山掩室開禪師、成都人也、遍歷講肆、忽然不樂、欲出嶺了大事、樞使安公、亦勉以偈曰、吾有大患、爲有身、是身假合亦非眞、維摩示病元非病、好向南方更問津、室抵番陽東湖、値松源開室、聞舉明眼衲僧因什麼失、却鼻孔、言下領解、一日連案僧、見其看經問曰、向後得座披衣、如何爲人、室將經度與僧、僧將經擲于案、室復取朗聲誦、僧休去、嘉泰辛酉、始赴廬山雲居請、未幾勅補金山、如藍田法語、皆參禪捷徑、平生所接人、獨得佛海、大昌松源之道。

雙杉元禪師、踞室云、報恩方丈、百無一有、贏得爲人、推門入曰、示衆云、衲僧家、不知月之大小、歲之閏餘、喫着三角粽子、便道是端午、忽被報恩移上一日、背他只管半疑半信、今朝依舊點盞茶、與伊濕口、驀然咬破菖蒲、出身冷汗、失聲道啞、福建子、激惱殺人、大衆這箇豈不是通靈藥、三十年後、切忌拈却、嘗入三門云、鬧市門頭、有箇入處、只爲諸人見頑了也、新長老、因行不妨掉臂、顧視大衆云、隨我來也、雙杉只據目前、信手拈來、無非者黃妙劑、換骨法、起死方、何必他覓哉。

荊叟玨禪師、作夏靈巖、時癡鈍俾、其看狗子無佛性話、言下領旨、因與潛無隱通吐、無隱曰、是則是、只是命根未斷、更須出去見人始得、且囑其謁淳庵、叟至華藏、半年無所得、一日忽聞火板響、凝滯釋然、告於淳庵、庵卽鳴鼓開室、叟趁入、庵問、如何是佛、叟曰、野花開滿路、問、如何是法、叟曰、私酒醉人多、問、如何是僧、叟曰、鉢盂口向天、庵曰、未在出去、後叟在癡鈍室中、聞舉如何是佛、震聲答曰、爛冬瓜、且述偈曰、如何是佛爛冬瓜、咬着氷霜透齒牙、根蔕雖然無害子、一年一度一開花、荊叟處衆時、得無隱雙杉力尤多。

福州雪峯北山信禪師、本州人、性方嚴、機迅敏、初學見之、應對多失、次在鼓山、時有僧相看、山問、近離甚處、僧曰、西禪、山曰、西禪有何言句、僧曰、話墮也、山曰、儞甚處學得遮些子來、僧曰、今日不合觸忤和尚、山拈拄杖便打、僧奪拄杖、軒渠大笑而出、遂請喫茶、傳是老宣首座去矣、初北山同月窟過浙、見遯庵於華藏、月窟先有契證、故山得咨決之後歸里、訪明晦堂、分座鼓山、漳守趙公以夫、聞其道、以南寺招之、山遜謝曰、公聞之過、使三反、乃行開堂、爲同行月窟拈香、時論高之。

枯禪鏡禪師、天資淡薄、一無嗜好、惟與衲子、提撕敲磕不倦、有問如何是祖師西來意、枯禪拍禪床一下、今人吐露語言千百、皆不能得、到前輩地位、且利害在什麼處會麼。

癡絕冲禪師、嘗赴福州雪峯請、與尚書陳公韡、有宿素之雅、招飯私第、以項王像求讚、卽拈筆書云、拔山非力、蓋世非氣、八千子弟同謀共濟、人皆謂天下大器、不可以力爭、必先仁義、殊不知、天假其手、以誅暴秦、然後使寬仁愛人者之爲帝、吁、其亦有補於斯世、公大奇之、癡絕慧辯恢廓、此特緒餘爾。

介石朋禪師、秦溪人、性高簡、僧曰、寶劍未出匣時如何、答曰、杜鵑啼處花狼藉、僧曰、出匣後如何、答曰、令人長憶李將軍、僧曰、出與未出時如何、答曰、劍去久矣、汝方刻舟、解夏夜參云、九旬禁足、網禽宿巢、三月安居、驅狐守塚、向生殺不到處、見三頭六臂、掀翻圓覺伽藍、猶是抱樁打

泊浮雲黃山前雙檜樹下、九十日內、風以時雨以時、二六時中、少不添多不減、一年三百六十日、日日安居、時時自恣、圓者自圓、方者自方、長者自長、短者自短、未免淨地揚塵、畢竟如何、大鵬展翅天路遙、巨鼇轉身海水窄、示衆類此、晚年寓杭之冷泉、扁其室曰青山外人、景定間、丞相秋壑賈公、尤崇敬佛法、與奏得旨住淨慈、後淮海亦繼其席、皆起於淵東。

石田薰禪師曰、薰上座住靈隱、亦是不奈何、被人東拶西拶、拶到禪床角頭、回避不及、只得爲祖師、有箇門戶、劈破面皮出來、喚作此地無朱砂、赤土以爲上、雖然看却今時、漸漸赤土也無了、漸漸食泥食土、說着眞箇令人寒心、噫志於道者、聞此當如何哉。

雙杉元禪師、嘉熙間、乃石田堂中第一座、上丞相書言、朝廷新指揮、買師號金環象簡、不便書云、正月十三日景德靈隱禪寺前堂首座、前住持嘉興府天寧寺僧中元、謹薰沐獻書樞使大丞相國公、竊以爲佛老之教救世計也、其所以與儒道相參於天地間、以能開悟性眞、不墮邪見、其功未易量也、我朝　太宗皇帝嘗曰、釋氏之道、有補教化、　孝宗皇帝亦曰、以佛修心、以老治身、以儒治世、斯可也、張文定謂儒道淡薄、一時聖賢盡歸釋氏、而關洛諸公、亦必玩味釋氏之書、而後能接續洙泗不傳之秘、然教必有主、必有師、國家以度牒、許人承買、凡有僧者各尋師以爲依歸、師苟有道行、則可使迷者悟塞者通、其裨助世教、要非小補、近世貨賂公行、求爲住持者、吾教之罪人、若以例傳、天下之賢者、必深藏遠遁而已、其肯出而爲師、夫師廢則正法微、正法微則邪法熾、以清淨之門、而爲利慾交征之地、非國家之福也、譬如家塾黨庠不能無師、不求其能傳道觸惑者爲之、而惟賄是視、則弟子何以仰、孔門之教亦幾乎熄、佛老之道、何以異是、若謂佛老之徒、身居大厦、日享膏腴、不蠶而衣、不耕而食、爲世所嫉、然天下之人、有無用於世而坐享膏腴之奉者、尤衆、何特僧道、寺觀創立、常住供養、非官與之也、以衆人樂施而與之也、寺觀有田、稅賦尤倍、又有非泛不時之需、正與大家相似、今既買度牒以錢、免丁又增以錢、官府無絲毫之給、而徒重責其利於無窮、則僧道可謂不幸矣、國家愛惜名器、泛濫、何以勸勵天下、僧道、若以賄得金環象簡、得諸處住持、則鬻頑無賴之徒、皆以賄進、何以整齋風俗、況寺觀雖多、其常住闕乏者甚多、縱使此令一行、第能率斂寺觀之大者、其小者亦豈能應其求、如此則所得能幾、況僧道非能自出己財、求爲住持、必將取之寺觀、師徒相殘、常住必壞、所謂膏腴、將見蕪穢、所謂大厦、將見爲丘墟、所謂溫飽、將見爲凍餒、部雖有牒、誰將請之、歲雖有丁、誰將輸之、今日軍需糴本秤提諸劵、無非鬻爵、鬻爵之者、或累於國、牒之多者無病於官、乃循一時不卹之事、剗喪千萬載之利源、殆非理財之長策也、伏覩、近降旨揮、增錢鬻爵、識者病之、事不果行、總所今來陳請、正亦類此、伏望、鈞慈詳酌利害、特有敷奏、盡行寢罷、服號之命、令僧道不勝幸甚、伏惟鈞慈俯賜鑒念、不備、時江西粲無文亦有書、先是朝省因總領岳柯奏、乞降紫衣師號二等、賜金環象簡并四字禪師法號、以住大寺觀、每賜服師號綾紙、出賣三百緡、仍附品官條制、非有官不得差注、非有賜服不得住持、此書上事果寢、豈非祕護大法者之用情乎、雙杉住山、能極枯淡、專一行道、若機簡堂、私居雖處暗室、如臨大賓、似證老衲、此亦哲人律己、又見於微細者也、賢矣哉。

枯椿曇禪師、清介寡言、瘦坐竟日、開法越之大禹寺、亦出淵東、僧問、和尚未見佛心時如何、答

曰、人貧歸道、問見後如何、答曰、色窮歸皂、嘗舉、現成公案、道得也三十棒、道不得也三十棒、侍僧曰、望師慈悲、開箇方便、答曰、將謂儞是箇出厩良駒、僧有省、枯椿閭人、後住姑蘇虎丘、緇素翕然宗之。

雲巢巖禪師、訓學無倦、且能折節下士、慰藉良厚、雋彥歸之、開爐日示衆云、是句亦剗非句亦剗、雪峯輥毬、睦州檐板、惟有趙州老漢、向火爐頭、拈起香匙火筯、東撥西撥、忽撥得一塊、恰是饒州景德、人家壁角頭、多年破磁碗、三世如來、只管看、運庵曰、此語酷似父翁松源。

南翁明禪師、初入衆時、便能決志參禪、嘗宿天台石橋、遇異僧、指令其見老佛心、翁至太白、投誠預其法席、然室中纔開口便被叱、私自念曰、今生不了、則有來生、已而泪下交頤、後在癡鈍會中、爲侍者、晚參侍立聞鐘鳴、鈍曰、什麼聲、翁曰、鐘聲、鈍曰、聲來耳畔、耳往聲邊、翁薄遽未答、被大叱、汗流浹體、始自語曰、元來浙翁平日叱罵我、皆是徹骨徹髓、鈍尋常只令其看百丈野狐話、一日鈍曰、不落不昧時如何、翁應聲曰、不落不昧鴛鴦一對、水上浮沉、如意自在、鈍撫而印之、翁泉州黃氏子、與隆南山同出嶺者、歸里住溪上敎忠、至住莆中囊山方入寂。

西山亮禪師、福州人、枯硬儉約、嘗著紙被一張、補粘殆遍、寒暑不易、由鼓山首座、寮赴雲門請、及遷黃檗、未嘗別換、侍僧一夜、潛以絹衾易之、亮驚叫責曰、我鮮福、平生未嘗敢服縑素、況此被相隨三十年矣、其可棄乎、聞者謂、其住山有古人風、後退席入永陽鴈湖山中、與道者刀畊火種、莫知所終。

平江府萬壽訥堂辯禪師、寄同參偈曰、猿與龜交割不開、兄呼弟應似忘懷、及乎話到誦訛處、却道心肝不帶來、時亦稱之、後入坐道場、提倡如阪走丸、眞不忝爲巖獃之子、岳聾之孫也。

介石朋禪師曰、別峰珍和尚、退鼓山詣育王、候見大慧、一蒲團於佛殿後、坐七十九日、因秦國太夫人、請大慧陞座、私自喜曰、今日得見必矣、果得一見、語合室中、復投三轉語而去、大慧大奇之、遂與宏智同擧之、住岳林、今寺中有塔存焉、別峰偏身有長毫、時號珍獅子、介石題其墨蹟、略言如此、別峰既得法於佛心才、高踞雄席、道顯著矣、復勇於求見妙喜、其意謂何、不可與璞懿遲遲其行、同日而語、此所以爲一代宗師之標準也、噫今只欲一後學七十九日候見尊宿、亦難矣。

守懋庵主莆人、滿年具戒、居囊山下巖、就巖縛屋、聊蔽風雨、父爲郡胥吏、歲給以糧、凡客至不論問佛法世法、皆瞪目視之、有僧問、如何是庵主家風、忽答云、就巖縛屋、掬澗煮糜、問忽有人問西來意、如何祇對、懋反袂哭云、苦屈、觀其雅趣、探其幽旨、非契如之流亞歟。

石溪佛海月禪師曰、余年三十、方再南、聞空叟有言、二十行脚此事休也、初得此語、心甚不平、過二聖、座元几案間、見窮谷語、擧雲門話墮、於光明寂照中、便有歇泊地頭、及登甌峯、旬日間趂隊入室、先師擧、達磨葬在熊耳、因甚隻履西歸、余對以一點水墨兩處成、龍復一日龍袖拂開、面目全露、遂倒跟四載、然後江之南北、浙之東西、親師友、味甘苦、動轉施爲、未嘗向背、今又三十年、尚未能依稀彷彿、信知此事大不容易、休也二字、眞吾之一知識也、見於示秀上人語、今學者多見之、而不思之、可悲痛也、佛智老師、跋其錄云、石溪未離雲頂、行脚未到處、要須到、既見雲居、開口不得處、要須道、執侍半年、如矢在弦上、知而不自發、至於龍袖拂開、如箭在的

中、發而不自知、雖然早年見松源于北山下、是此話已行、若謂開得口、後方有此錄、腦後猶缺石溪一錐在、烏虖、佛海親證悟法門、於斯見矣、語雖不多、大有控人入處、不可不錄。

王孔大福州徑江人、太學博士宗合猶子、年二十發胄、薦上春官、不售、辛亥歲、毅然効古塔主之風、裂冠剪髮、依莆之辟支巖主立堅、修杜多行、已而人有知者、益上絕顛、編茆居焉、父母勸勒不回、甫二載、聞泉南明敎忠法道、焚庵詣之、獻頌云、燒却山頭破草庵、不圖遊歷不咨參、依師別也無貪着、博飯栽田也要諳、時敎忠於風亭通衢、開接待庵、孔大泯泯衆底、折節服勞、施主聞之、勸爲大僧、改名惟玉、敎忠亦嘗有偈示之云、老我居山已許時、着衣喫飯只隨宜、子來將謂有奇特、笑倒東家小厮兒、後亦有發明、但不久住世而寂、初終與祖麟楊道者略相類、烏虖惜哉。

西巖惠禪師示衆云、彌勒眞彌勒、水銀無假分、身千百億、阿魏無眞長、汀子來也、眼生三角頭、峭五嶽、好未必好、惡未必惡、布袋頭開也、隈隈隮隮、骨骨董董、輕如毫毛、重如丘山、拈得便擲、拏得便用、堅拂子云、猶是兜率陁天底、只如彌勒未生已前、如何剖露、擊床云、收拾雨聲歸舊樹、放敎秋色到梧桐、題五祖六祖像云、恨殺此頭陀、山磨恨不磨、吾今檐頭重、爲汝種松多、西當三十餘年、佛鑑處所得底、拈出示人、無涓滴滲漏、後三十年、點眼藥也。

丞相鄭公清之、嘗謁妙峰善禪師、坐定峰曰、相公留心此道、還有歡喜處也無、公曰、且坐喫茶、峰曰、不是心、不是佛、不是物、相公作麽生、公曰、低聲低聲、峰曰、也須子細、公曰、描也描不成、畫也畫不就、峰默然、老師嘗言、此因識之。

福州越山法深禪師、本州人、未落髮時、已有見處、依月窟於梅嵓、得度、浙遊至雙徑、無準一見而器之、俾掌翰墨、議者以其年抄、未稱職、爲遠上座、起骨云、末後一着、始到牢關、山遙水遠、火冷雲寒、啞不是闊髏眼活、進遮一步、也大難大難、衆始伏膺、歸里居梅嵓十餘年、自號雲山、畊叟、樞相鄭公性之、尙書陳公韡、間居日相與講道、白郡致主釣臺、寶祐間、遷越山、未幾而逝、故名不顯著。

祖昌庵主、不知何許人、隱於天目山中、結庵取陳墳、約二十餘里、雙徑榮首座、嘗遊山中、偶至其庵、荆棘蒼密、墻壁傾斜、昌頹然於路口、倚杖而立、雪眉霜髯、壞衲弊履、人物可畫、且欣然揖入共坐、榮視左右、瓶無儲粟、竈有餘煙、心甚異焉、問居山今幾年、遂稱名答曰、不記年矣、益奇之、問糧食誰供、答曰、仰給陳氏、今無矣、問何不行脚去、答曰、逢磨不來、東土二祖不往西天、問如何是隱者家風、答曰、猛虎一聲山月高、遂屏息不敢復問、少焉、昌出茗芽、令掬水嚥之、徐叩雙徑歷代尊宿、杳嗟久之、蓋嘗見典牛塗毒來、若言其見前輩、不翅百齡矣、又曰、路遠宜即歸、榮明年拉同道訪之、已失其處、豈非世出世間之異人者耶、要當於懶殘西山亮輩中求也。

溫陵黃允字孚中、晚年喜參請、知罪福、嘗言、昔爲護國主首、撰開堂疏、曾受其潤筆資、作懺悔疏、備元物詣寺、供設還謝、叙事簡核、略云、誣長老之住護國、劉大卿之守溫陵、允也時預計偕、當趨省試、開堂撰疏、難逃府命之嚴、潤筆貽資、實出僧儲之有、昔爲貧而受也、今如數以還之、二十三年、常作懷慚之客、七十五稔、方成了事之翁、聞者嗟服。

平江府開元別翁頭禪師、西蜀人也、初入閩見枯禪、悟其機用、後從遊癡絕、得其至要、淳祐間、

開法衢之南禪、臘八上堂、舉世尊正覺山前、夜覩明星、忽然悟道、乃云、奇哉一切衆生、具有如來智慧德相、但以妄想執着、而不能證、拈云、釋迦老子、未覩明星以前、不妨令人疑着、既覩明星之後、說出許多不才淨、心肝五臟、總被別人覷破、還有爲釋迦老子作主底麼、別翁徒有此語、只知釋迦老子心肝五臟被別人覷破、殊不知、別翁心肝五臟、又被別人覷破了也。

枯崖和尚漫錄卷下終

此集所記、皆近世善知識也、中間如柔萬庵元雙杉、皆余舊方外友、曰篠塘賢辟支堅、則余誌其塔矣、悟兄舍儒入釋、其敬慕前輩如此、進進未可量、所論金華元首座、前後話頭、已具眼目、大慧所謂顛倒禪、正道着此病、悟能以是求之、他日與此集諸老、共入僧寶傳矣、竹溪鬳齋林希逸題。

景定四年夏四月

國譯感山雲臥紀談

解題

雲臥紀談は雲臥庵の曉瑩禪師、南宋の紹興年中感山に在りし日、往時の見聞幷に公卿宿衲の遺言逸跡にして、苟も修道の警策となるべきもの、數百條を蒐錄したるものにして、羅湖野錄と異曲同工の書なり。

曉瑩字は仲溫、洪州の人、その氏族を詳かにせず。歷く叢席に參じて頓に大事を明らめ、四衆に推重せらる。晩に羅湖の上に歸り、門を杜ぢて世と接せず、たゞ平生の見聞する所、諸方尊宿の提唱の語、及び朋友の談說議論、或は殘碑蠹簡の中より、善言を會萃して樂みとなす。その蒐集する所は、皆命世の宗匠、賢士大夫言行の粹美、機鋒の勁捷、酬酢の雄偉、氣格の弘曠、以て宗乘を輔け後學を訓へ、人を至善に導くに足るべし。禪師は大慧宗杲の法嗣にして、その傳載せて佛祖通載二十、五燈會元補遺、佛祖綱目三十、明高僧傳八等にあり。

國譯感山雲臥紀談自叙

始め予南閩より出でゝ、遠く江表に歸り、草木と倶に腐ちることを分甘して、茆を城山に誅り、尙書孫公仲益が書する所の雲臥庵の字を以つて、焉れに揭ぐ。公又詩を以て寄せらる。『身世兩相違。雲閑臥不レ飛』の句有り、蓋し其れ予を知れる者なり。山頂高寒にして老者の宜しき所に非ず、八たび㋑青黃を見て、病隨つて日に生ず、是れ繇り居を曲江の感山に徙す。年運既に往いて、世と日に益々疎闊なり、時に順ひ宜しきに制して、以つて渣然を待つ。或は畏る可きの暑を松塢に逃れ、或は愛す可きの日に㋺茆簷に暴す。身閑かに無事にして、賓朋の過訪に遇ひ、口を藉る可き無き時は、則ち疇昔の所見所聞の、公卿㋩宿衲の遺言逸跡を以つて、擧げて物外の談笑の樂みを資く。謂はざりき二三子剽かに聞いて、耳亦熟せりとは。遂に相與に諸れを記して、雲臥紀談を以つて之れに名づく。然も予が談ずる所、未だ必ずしも世の賢者以つて善と爲さず、會粹して編を成さしめば、無乃予が過を重ぬる歟。若し夫れ文字性空じ言語道斷して、予が終日に談ずるを以つて、未だ嘗つて談せずと爲さば、則ち焉れに庶幾からん。雲臥庵の老僧自叙す。

㋑青黃は春秋を云ふ、即ち一年のこと。
㋺茆簷に暴すは椽側にて日向ぼこりをすること。
㋩宿衲は尊宿即ち高僧のこと。

國譯感山雲臥紀談上

富鄭公、熙寧の間、亳州に鎮たり。潁州の華嚴禪苑の顒禪師を迎へ致して、心法を聞くことを獲たり。致仕して洛に居するに及んで、頌を以つて志を述べ、顒の得法の師姑蘇の圓照禪師に寄す。曰く、

『親見二顒師一悟入深。貧緣傳得老師心。東南謾說江山遠。目對三靈光與二妙音一。』仍つて書有り、曰く、「弼心を祖道に留めて、日を爲すこと已に久し。常に恨らくは明眼の人に遇ふて、蒙陋を開發せざることを。久しく盛德を聞くと雖も、而も瞻謁するに由し無し。昨に幸に出でゝ、亳社に守たり。潁州と境を接す。里人張比部景山に因つて、顒師を請じ得て下り訪る。相聚ること一月に幾し。慈悲方便の力を以つて悟處有らしむ。會々結夏日に逼る、四月の初に、遽に且く潁に歸る。其の ㊀ 揩磨淘汰に於けることは、則ち殊に未だ力あらず、衰病相仍つて昏鈍入り難し。昔し古靈師の謂はゆる、期せざりき老に臨んで、極則の事を聞くを得んとは、之を弼が今日に見る矣。天幸天幸、弼法を顒師に得たりと雖も、然も本源は老和尚よりして來れり。宗派甚だ ㊁ 的なり、必ず須らく亦成持せんことを欲すべし。更に望むらくは、慈を垂れて攝受し遠く接引を賜ひ、未だ至らざるを至らしめば、卽ち ㊂ 南嶽下の麤蘊百丈

㊀ 揩磨淘汰は工夫鍛錬のこと。
㊁ 的は的確の意。
㊂ 南嶽惠讓禪師及び門下の麤居士、百丈慧海禪師及び其門下

下の裴休と何を以つてか異ならん哉。公の貴きこと人臣を極めて、頓に此の道を明らむ。謂つべし、㊁沒量の大人なり矣と。又能く法義を㋔圓照に請じて、宗派を叙陳す。古靈師の老に臨んで㋩極則の事を聞くことを得ると云ふを援いて、以つて自ら謂ふ、豈に人を欺かん哉。」

蜀の僧祖秀字は紫芝、蚤く文を以つて士大夫の間に鳴る。㋥嵩明敎の風を慕ふて、歐陽文忠公が外傳を著す。蘇養直序を爲つて、其の首めに冠らしむ。略に曰く「君子以らく、佛の敎、堯舜禹湯の世に證せられず、而して孔子孟軻の後、歷代の先儒、國に當つて禁を少かずと雖も、亦其の寓内に横流することを聽す。古今此の論を持する者ありに禪る。湯武命を革むるに至つて、敎の始まる所なり。孔子をして事を行はしむるとも、亦何を以つてか此れに異ならん。堯より武王に至るまで、佛未だ誕生し給はざるは以有るなり。成康既に沒して、佛是に於いて跡を顯す、然れども未だ中華に被らず、以つて聖人の魯に生れて、集めて古帝王の敎を大成せんことを俟つ也甚だしいかな矣。聖人魯衛陳宋に困められて、九夷に居り、桴に乘じて海に浮ばんと欲す、此の時に當つて、外數萬里の敎を以つて、中國に加ふとも、天子諸侯疇か之を聽さん哉。佛の法苟も傳らず、㋭顯宗感じて諸れを遠きに求むるに非ずんば、恐らくは未だ速かに應ずること能はざらんのみ」と。是れ皆秀公が京師の書、其れ古を駭し今に震ふの論、數萬言に溢るれども特に未だ世に傳らず。又秀嘗て東坡の像に讃して曰く、「漢の司馬楊王、唐の太白子昂、是の五君子は皆蜀郡に生れたれども、未だ夫子の耿光あるには若かず。夫子の詩と抗衡する者は、其れ唯だ子美のみなり。子美の文と軫を並ぶる者は、其れ唯だ子長のみなり。賦は亦㋬屈賈よりも賢り、字は乃ち㋮鍾王よりも健し。此れ夫子の絶技、蓋し至道の秕穢なり。夫子の道是れを后稷伊尹と爲せば、以つて其の君を堯湯に致さしめつべし。時議將に是れに鈇鉞を加へんとす。而して夫子尤も典章を諷す、海表の遷は故郷に還るが如し。信に蜀郡の五傑なる者も、夫子の垣墻をだも窺ふことを得ること莫し」と。秀が言論風旨、特だ此れ而已ならず、一變を嘗めて以つて鼎味を知る可し。靖康の初め秀尙ほ京師に留つて、華陽宮の記を著す、極めて詳備なりと爲す。其の東都事略に以つて朱覩が傳の讖と爲す、蓋し覩役を董せばなり。之を讀む者は謂ゆる壽山艮嶽則ち昭然たり矣。豈、目を寄することを待たんや。張丞相德遠福唐に判たりしとき、秀を致して、長樂の㋰光嚴蘭若に住せしむ。後に蜀山に歸老す、翛然として燕處し、一話一言未だ嘗つて宗を衞り敎を護ることを忘れず。既に福慧に逮ばず、時論の爲に焉れを惜しまる。

新淦の東山の吉禪師は、閩人佛照の光公の受業の師なり。道學充茂にして談辯灑落なり。高明の士

㋩極則は宗門向上窮極の大事なり。
㋥嵩明敎は嵩山の明敎大師のことなり。
㋭顯宗は皇帝なり。
㋬屈賈は屈原と賈島のこと。
㋮鍾王は鍾繇と王羲之とを云ふ。
㋰光嚴蘭若は光嚴寺のこと。

の要体、何れも禪門傑出の師、並に居士なり。
㊁沒量は測ることの出來ぬ意。
㋔圓照は寺なり。

夫喜んで之れと過從す。李朝請と云ふ者あり、乃ち鄰林居士の舅氏なり。嘗て鄰林と偕つて、之れに謁して道を語る。李曰く、「家賊人を惱す時如何。」吉の曰く、「誰か是れ家賊。」李拳を竪起す。吉の曰く、「賊身已に露る。」李曰く、「和尙人を ㋐茶糊すること莫くんば好し。」吉の曰く、「贓證現在せり。」李愕眙として薦ます、吉口を銜いて偈を成して曰く、『家賊惱レ人孰奈何。千聖回レ機只爲レ他。徧界徧空無二影跡一。無依無住絕二籠羅一。賊賊猛將雄兵收不レ得。疑二殺天下老禪和一。笑二倒鬧市古彌勒一。休休不レ用將レ心向レ外求。回レ頭瞥爾賊身露。并レ贓捉獲世無レ儔。世無レ儔眞可レ仰。從レ玆不三復誇二技倆一。怙怙安レ家樂レ業時。萬像森羅齊撫レ掌。』吉又嘗て二頌を以つて德山臨濟棒喝の旨を發揮す。曰く『入レ門便棒七顚八倒匝地普天一時 ㋑勘破。入門便喝夜叉羅刹大地山河一時惡發。』吉は乃ち道場山の琳公の嗣なり、晚に南閩に於て衆に開元に首たり。㋒雲堂に就いて午齋の次で偈を說いて曰く、『八十四年老比丘。萬般施設不レ如レ休。今朝廊下忘レ緣去。任聽橋流水不レ流。』遂に泊然として逝く。其れ大變に臨んで殊異なること此の如し。

仁宗皇帝皇祐四年十二月九日を以つて、中使を遣して御問を淨因の大覺禪師懷璉に降す。曰く、『才去堅レ拂。人立難レ當』と。璉方に衆と晨粥す。遂に起つて恩を謝して中使を延いて粥せしむ。粥罷んで卽ち頌を以つて ㋓回進するに曰く、『有レ節非レ干レ竹。三星繞二月宮一。一人居二日下一。弗レ與二

㋐茶糊は欺瞞の意。
㋑勘破は看破るに同じ。
㋒雲堂は食堂のこと。

衆人一同。』是に於いて皇情大いに悅ぶ。復た頌を賜うて曰く、『最好坐禪僧。忘レ機念不レ生。無心煙已息。珍重往來今。』璉和して之を進む。曰く、『最好坐禪僧。無念亦無生。空潭明月現。誰說古兼レ今。』時に華嚴の隆公嘗て謂く、「璉が卽心是佛の頌乃ち虛空に橛を釘つ。然れども璉公仰いで御問に醻ゆ。機に應じて然り」と。隆公之を言ふも亦各々旨有るを哉。

黃龍の南禪師、平時 ㋔學者の來るを見れば、必ず ㋕生緣佛手驢脚を問ふ、故に ㋖叢林目づけて三關と爲す。亦嘗て自ら三頌を作つて其の旨を發明す。世只其の佛手驢脚を傳へて、生緣を遺却す。廬山の圓通の晏公は乃ち黃龍の法孫なり。南嶽の廣辯首座の處に於いて、南公親筆の三頌を見るに、曰く、『我手佛手兼擧。禪人直下薦取。不レ動二干戈一道出。當處超レ佛越レ祖。我脚驢脚並行。步步踏二著無生一。會二得雲收日卷一。方知此道縱橫。生緣有レ語人皆識。水母何曾離二得蝦一。但見日頭東畔上。誰能更喫二趙州茶一。』若し林間錄に載する所の佛手驢脚の頌を以つて、辯の本に校ふれば、十有一字同じからず。無乃先後改め更へて而も然るか。且だ南公の ㋗勘婆の話を頌じて、慈明に呈するが如きは、尙ほ有沒の字を以つて、工拙を見る。是に由つて觀れば、豈優劣無からんや。

春陵に水あり濂と曰ふ、周公茂叔先生の所居なり。旣に廬山の幽勝を樂んで、室を築いて、則ち

㋓回進はごへんたふ申す也、天子の外には用ひず。
㋔學者は修行者のこと。
㋕生緣、人々箇々生緣の處あり如何是汝が生緣の處。
佛手、我手何ぞ佛手に似たる。
驢脚、我脚何ぞ驢脚に似たる。
是た黃龍の三關といふ。
㋖叢林は禪門道場のこと。
㋗勘婆は禪門の話。

濂を以つて其の谿に名づく、蓋し本を忘れざることを識すなり矣。時に佛印禪師元公、鑾谿の上に寓して、相與に道を講じて、方外の友と爲る。是に由つて佛印に命じて、青松の社主と作らしめて、㋣白蓮の故事に追媲す。嘉祐中、公、灊上に通守たり。尋いで公を部使者に譖る者あり、之に臨む甚だ威なり、公、之に處して超然たり。佛因聞いて、廬山の移文を述べて、之に寄せて曰く、『仕路風波盡可レ驚。唯君心地坦然平。未レ談二世利一眉先皺。纔顧二雲山一眼便明。湖宅近分二堤柳色一。田齋新占二石谿聲一。青松已約爲二禪社一。莫レ遣下二歸時白髮一生上』公未だ歸らざる間、復之を趣して曰く、『常思湖口綢繆別。又憶匡廬爛熳遊。兩地山川頻在レ目。十年風月澹經レ秋。仙家丹藥誰能致。佛國乾坤自可レ休。況有二天地蓮社約一。何時攜レ手話二峰頭一。』公理を窮むるの學を爲すと雖も、而も佛印を推して社主と爲す、苟も道同じからずんば豈能く與に謀を爲さん耶。

廬山の湯泉は、山南に在りては小刹たり、熙寧の間、禪公住持す、叢林も亦雍肅なり。因に『南泉歸宗麻谷と同じく去つて㋤國師を禮覲せんとする路次に、地に於いて一圓相を畫して云く、『道ひ得ば卽ち去らん。』宗便ち相中に坐す、谷便ち女人拜を作す。泉云く、『與麼ならば卽ち去らじ。』宗云く、是れ、『甚麼の心行ぞ。』泉是に於いて嗔つて回る」と云ふを擧して、禪乃ち頌じて曰く、『獨掌不二浪鳴一。靈光各自有。梵刹一纔興。大家出二隻手一』と。大慧老師再び徑山を董す、因つて學徒を勉めて持鉢せしむるにも、亦嘗て此を擧す。禪公は乃ち眞淨の嗣なりと云ふ。

㋥仰山の小釋迦、豫州の觀音に住す、僧齊己爲めに庶務を總轄す。粥の疏有り、曰く、「粥を良藥と名くるは佛の讃揚し玉ふ所なり。義三檀に冠らしめ、功十利を標す。更に祈るらくは英哲各願心を遂げんことを、既に淸晨に備へて永く白業を資けん」と。昔石に刊る、既に建炎の兵火を經て、復た存すること無し矣。豫章の職方乘には但詩僧齊己が粥の疏と己が書する所の文墨觀つ可しと云つて、其の詞を收めず、今禪林晨粥に唯前の四句を唱ふ。且だ誰の作と云ふことを知らず、己が世姓は胡、潭の益陽の人、幼にして俗を大潙に捐て、祐公に依る。蓋し寂公と同門の友たり。其の後西山の金皷に居して、示寂塔尙ほ存せり。龍盤は乃ち其の書堂なり。元祐の間馬都運醇小詩有り、院の壁に題して曰く、『支遁逍遙不二我逢一。等閑下レ馬憩二蓮宮一。欲レ詢二齊己幽栖事一。七十山僧兩耳聾。』

慈照禪師聰公、襄州の石門に住す。待制査公に請ふて爲に僧堂の記を撰せしむ。曰く、「乾明寺は郡を去ること百里、古に石門と云ふ、勅に因つて之を易ふ。高山峻谷、虎豹の伏する所、岐路磽确として人煙負かに絕えたり。道に志す者に非ずんば能く其の心を栖ましむること罔し、遊官の徒は利名に羈束せられて、其の勝絕を觀ると雖も、而も能く其の境を陟ること罕なり。道、郡に守たりし日、學

㋦勸婆は趙州和尙が臺山路上の一婆子を勸破せし因緣を云ふ。

㋣白蓮は惠遠法師が陶淵明・陸修靜等と共に廬山に於て結びし社の名なり。

㋤國師は南湯白崖山の忠國師なり。

㋥仰山は惠寂禪師、小釋迦と綽名す。

者法の字は守榮と云ふもの有ることを知る、雍熙三年より參尋して至る。後安禪の堂卑隘壞せり、此に於いて心を重構に發して、克く其の志を堅うし、聚落に化を求めて多く年所を歷、良工を召して美材を市ひ、景德三年に迨んで、始めて成ることを告ぐ。凡そ㋙五間十一架、春學徒慧果と云ふ者あり、錫を携へて京に至る。余に之を識して將に石に刊らんとすと請ふ。乃ち書して曰く、「佛法廣被して達磨西來してより、信根を具するもの證を本源に求めて、星の如くに曠野に居して、身を草木に蔽ふ。衣寒を禦がず、食腹に充たず、正法漸く漓ぎ、人法替怠するに及んで、百丈禪師乃ち其棟宇を營んで以つて老病を安んせしむ。邇來禪刹競ふて宏壯を構へ、少年初學、恣に其の間に臥して、殊に化緣の者の形を勞し骨を苦しめ、施財の者の福を邀め、罪を懺することを知らず、因果を明らむる者は、鐵床に臥するが如く、寃敵に當るが若くす。朝夕密々に聖胎を增長し、其の次ぎは善知識に親んで、志解脫を求るに非ざるよりは、以つて暫くも其の形を容れて龍神に護せらる可けんや。其れ或は心蓋纏に汨り、身溫暖を利し、無明を察せず、命の縮ることを知らず。唯語言を記して自ら究竟と謂はゞ、韶蠱き遷謝して彼の惡趣に墮せん、丈夫猛利にして心を動せざることを得る者ならん哉。榮公は鳳翔の虢邑に生れて、雍州の鄠縣の白雲山の淨居禪院に出家す。大中祥符二年四月八日記す」と。世の傳ふる所は只佛法廣被してより、心を動せざることを得る者ならん哉と云ふに至つて

㋙五間十一架。屋を造るに三間五架、五間七架等の制あり、間ははしらまなり、架はけたなり。

止む矣。所以に黃太夫が芝曇秀に答ふる手簡に、曰く、「查公は前朝の名士なり、楊文公、王文惠公が門に遊ぶ、參禪學道、氣息ある者なり。」然も此の僧堂の記恐らくは尙ほ首尾あらん耳。公早に琅邪の覺禪師に參じて、躬ら薪水に事ふ。因つて琅邪示すに註の三祖の信心の銘を以てす。上に於いて大いに一句を寫して、下に細かに一句を寫す。數句の後に至つて豁然として旨を悟る。覺遂に之に告げて曰く、「老僧一期虛空を描畫す、直に須らく吐却して始めて得べし。」妙喜老師嘗て謂く、「大觀の間に太平州の耆宿の其の此の如くなるを言ふを聞く」と。

佛心禪師才公始め受業院に於いて、聲梵を襲つて時俗に應ず。因て城に如いて法器を置け、一叟に遇ふ。之に語るに、曰く、「汝自ら是れ法器なり、何んぞ更に佗に覓むることを用ひん。」才、忽ちに猛省す。卽ち西禪の法席に趨いて、方文海印の隆禪師の平生睡ること人前に落ちず、起ること人後に落ちずと云ふを聞いて、遂に竊かに焉を慕ふ。老宿達道者の看經するを見るに及んで、一毛頭の獅子、百億毛頭に一時に現ずと云ふに至つて、才、指して問うて曰く、「一毛頭の獅子、作麼生か百億毛頭に一時に現ずることを得ん。」達、曰く、「汝乍めて叢林に入る、豈便ち許ばくの事を理會す可けんや。」尋で又問ふに、「內に在らず外に在らず中間に在らず、此れ何の理ぞや」と云ふを以てす。達、其れをして自ら看せしむ。才、是れに由つて凡そ門に出入するには必ず其の限に跨定して、默思すらく、「內外中間にあらず、却つて那裏にか在る」と。其純誠なること此の若し。時に西禪の衆、萬指に逾えたり。

才、發心して淨頭の職を領ず。一夕汛掃する次で、隆適々夜參す、至れば卽ち結座に遇ふ。拄杖を擲つて曰く、「了ずれば毛端巨海を呑む、始めて知りぬ大地一微塵なることを。」才、豁然として省有り。閩を出で、豫章の黃龍山に造るに及んで、死心禪師と機契はず、乃ち靈源禪師に參ず。凡そ入室して出でては必ず淚を揮つて自ら誦めて曰く、此の事我見得すること甚だ分明なり、只是れ機に臨んで吐き出さず、若爲せん奈何せん」と。靈源其の勤篤なることを知つて告ぐるに、須らく是れ大徹して方に自在を得べしと云ふを以てす。居ること何ばくも無く、竊かに隣案の僧の曹洞の廣錄を讀むを觀て、「藥山薪を採つて歸る、僧有り問ふ、『甚麼の處より來る。』山曰く、『柴を討ね來る。』僧、山の腰下の刀を指して曰く、『鳴つて剝々たり、是れ箇の甚麼ぞ。』山刀を拔いて斫る勢を作す、」と云ふに至つて、才忽ちに欣然として、隣案の僧を掴つこと一掌し、簾を揭げて寮門を趨り出で、口を銜いて偈を說いて曰く、『徹徹大海乾枯虛空迸裂。四方八面絕ニ遮欄一。萬象森羅齊漏泄。』才の生緣は長谿縣、南嶽の上封に出世す。閩に歸つて、東山大乘禪淸靈石に住し、後鼓山に遷つて示寂す。其の人と爲り褊急なり、業林蚤く之を目けて才煎と爲すと云ふ。

丞相張無盡居士、平居廬山の東林の照覺總禪師と方外の侶たり。元豐辛酉の秋、序を以て、羽士蹇拱辰字は翊之が往いて總に參問するを送つて曰く、「成都の道士蹇翊之來つて、余に言つて曰く、吾が鄉の羽衣の族、世々相與に婚姻を爲して、妻を娶り子を生む、俗流と異ること無し。」拱辰因つて道藏の神仙傳の記を觀、翻然として覺悟す。吾が血氣剛强にして視聽聰明なるに當つては、喔咿哇鳴は吾が耳に順ふ。靑黃赤白は吾が目を炫す、甘脆膏腴は吾が口に爽かなり、馨香馥烈は吾が鼻に適ふ、滑澤纖柔は吾が體に佚し、觀欣動蕩は吾が意を感せしむ。此の六寇の者は、吾が眥亂に乘じ、晝夜に吾と相親んで、未だ嘗て相釋てず。一旦吾が形耗きて羸れ、氣耗きて衰へ、精耗きて萎れ、神耗きて疲れぬれば、八風の寒暑に薄られ、百邪の鬼祟に欺され、陰魄は沈んと欲し、陽魂は飛ばんと欲するときは、則ち六寇の者曾て吾に代ること莫うして、而して天下の至苦吾獨り之に當り、房闥の戀はしきは婦に如くは莫く、血肉の恩は女に如くは莫し。拱辰是に於て囊中の有る所を悉して、之に與へて謝し去り、結くに他事を以てして、出でゝ百里に遊ばんとす。遂に涪江に泛び、濮水を下り、稻雲を經、塗山を出で、岑公の洞府を訪ひ、神女の祠觀を瞻て、而して渚宮に達し、將に九江に泛んで廬山に入り、茅を錦綉の谷に結んで、長に香爐の頂に嘯き、陶石を撫して以て遙かに想ひ、遠谿を挹んで以て足を濯はんとす。蓋し我が術性を以て基と爲し、命を以て依りどころと爲す。有作に始まつて無爲に終ふ。竊かに聞く先生離微の旨を究め、心迹の歸を窮めて、無絃の曲を奏し、鐵牛の機に駕すと。故らに遠しとせずして來つて先生に見ゆ。當に試に余が爲に之を言ふべし。」余曰く、「壯なる哉子の志乎、行ひ難きを能く行ひ、棄て難きを能く棄つ。吾れ子に及ばず矣。余適々口の疾有つて子に答ふる

❼鳴つて剝々たりは腰刀が衣服にばた〳〵あたる聲をいふなり。